

千年村プロジェクト  
2015年度 相模川流域周辺疾走調査報告書



早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース  
環境造園領域 都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室

東京都市大学 工学部 建築学科 建築計画 福島加津也研究室

慶応義塾大学 環境情報学部 石川初研究室

ものづくり大学 建設学科 土居浩

元永二郎

高橋大樹

2015年9月

### 〈千年村〉運動体について

〈千年村〉とは、千年以上にわたり、度重なる自然的社会的災害・変化を乗り越えて、生産と生活が持続的に営まれてきた集落・地域のことをさす。

〈千年村〉プロジェクトは東日本大震災後の2012年に、全国の〈千年村〉の収集、調査、公開、顕彰、交流のためのプラットフォームとして構想された。建築史学、建築デザイン、社会環境工学、造園学、景観デザイン、民俗学、歴史地理学、ウェブデザインに携わる研究者・実務者らの自発的意志によって結成された千年村運動体によって運営されている。また、この活動は、平成26年度（2013年）科学研究費助成事業に「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」として採択されている。

様々な圧力を受け、変容を受け入れつつも、長い存続の歴史を持ちつづけてきた場所には、生産性や防災性や経済的交流の基盤などが考慮され、持続的な土地固有のシステムがすでに育まれてきたと考えられる。山際の集落、その眼下に広がる水田、集落をまもる鎮守の森、他所へ通じる峠道、異国へ向かう海原。日本における地域の多くはそのような性格を具備してきた。しかし、そのような性格は突出した文化財的評価の対象としてではなく、むしろ健全な日常的国土をささえていた。このプロジェクトは、そのようなたくましく柔軟に生きてきた環境・集落・共同体の三位一体に対して、いくばくかの自信を持っていただくことと今後の千年をめざした地域づくりの一助になることを目標としている。

## 目次

|  |    |
|--|----|
| 第1章 本調査および報告書の目的                                       | 1  |
| 1-1. 本報告書の目的   |    |
| 1-2. 本調査の概要  |    |
| 1-3. 本調査の位置づけ  |    |
| 1-4. 本調査の目的  |    |
| 第2章 基礎研究編  | 3  |
| 2-1. 倭名類聚抄を用いた地名比定地の利用と、その限界と展望                        |    |
| 第3章 疾走調査 各村の報告   | 4  |
| 第4章 考察   | 41 |
| 4-1. 現千年村地域の持続の評価に向けて -大住郡大上郷／神奈川県平塚市大神地区を検討例として- (中谷) |    |
| 4-2. 土壤地理にもとづく戦略的な土地利用転換 (木下)                          |    |
| 4-3. 千年地形のパッケージ (石川)                                   |    |
| 4-4. 「集落構造」の考察 -見ただ目でわかる千年村- (福島)                      |    |
| 4-5. 「疾走」しつつ「共同体」を視るための試案 (土居)                         |    |
| 4-6. 千年村アプリ概説 (元永)                                     |    |
| 第5章 付記   | 61 |

# 第1章 調査および報告書の目的

## 1-1. 本報告書の目的

本報告書は2015年5月30日～31日にかけて行われた「相模川流域周辺〈千年村〉疾走調査」において得られた知見および考察を報告することを目的としている。

## 1-2. 調査の概要

相模川流域周辺〈千年村〉疾走調査は2015年5月30日～31日にかけて行われ、神奈川県相模川流域周辺に立地する千年村計18箇所を悉皆的に調査をした。

また本調査は2015年度文部科学省科学研究費助成基盤研究(B)「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」(26289224)の研究活動のひとつとして行ったものである。

## 1-3. 調査の位置づけ

本研究は今後の集落地域の存続のための評価手法の開発を目的としている。研究対象を千年を超えて生産と生活が存続する地域を〈千年村〉とし、その発見および存続要因に関する調査を行う。〈千年村〉は日本の国土の土地利用と景観の基層をなしてきたと考えられ、これらの正当な評価手法が必要である。そのために以下の3つの段階を達成していく。

- (1) 平安期文献『倭名類聚抄』に記載された「郷」の比定地をベースとした全国の〈千年村〉データベースの作成および公開
- (2) 〈千年村〉を「環境」「集落構造」「共同体」の視点から捉え、それらの関係および存続要因を解明
- (3) 各地域の存続に関する普遍的要因と歴史的要因を元にした〈千年村〉の評価基準と存続手法の開発

上記の実現のためには、より多くの千年村を網羅的に調査することが必要であり、本調査はそのひとつとして位置づけられる。そこで本調査では相模川流域およびその周辺に立地する千年村の特徴を把握する。

## 1-4. 調査の目的

本調査の対象地とした相模川流域周辺には河口部における千年村の密集が見られる(図1)。また、鉄道や道路等の交通の充実によって市街化している千年村が確認される。これらの千年村はかつての土地に根付いた生産のシステムから転換し、新たなシステムを獲得している可能性が考えられる。これらは2012年度に疾走調査を行った千葉県、2014年度に疾走調査を行った利根川流域には確認されない。したがって特に本調査においては下記(6)、(7)の目的を設定した。

本調査の目的を以下に示す。

- (1) 当該千年村の環境的特徴の把握
- (2) 当該千年村の建築・集落構造的特徴の把握
- (3) 当該千年村の共同体的特徴の把握
- (4) 上記(1)～(3)以外の視点に基づく当該千年村の特徴の把握
- (5) 当該千年村の簡潔な命名
- (6) 低地部の千年村の特異な密集形態の要因の把握
- (7) 市街化した千年村の持続性の有無とその要因の把握

千年村研究は「環境・集落構造・共同体」が三位一体となった「継続的な土地固有のシステム」の存在を仮説とし、それを実証しようとするものである。本調査では相模川流域周辺に立地する千年村の上記(1)～(5)を概観的に把握し、調査対象地固有のシステム解明の端緒となることと期待する。

また今回の調査においては〈千年村〉運動体に新たに参加した学生に向けて、今まで蓄積してきた知見や千年村的視点を引き継ぐことを併せての目的として調査をおこなった。(執筆者:橋本)

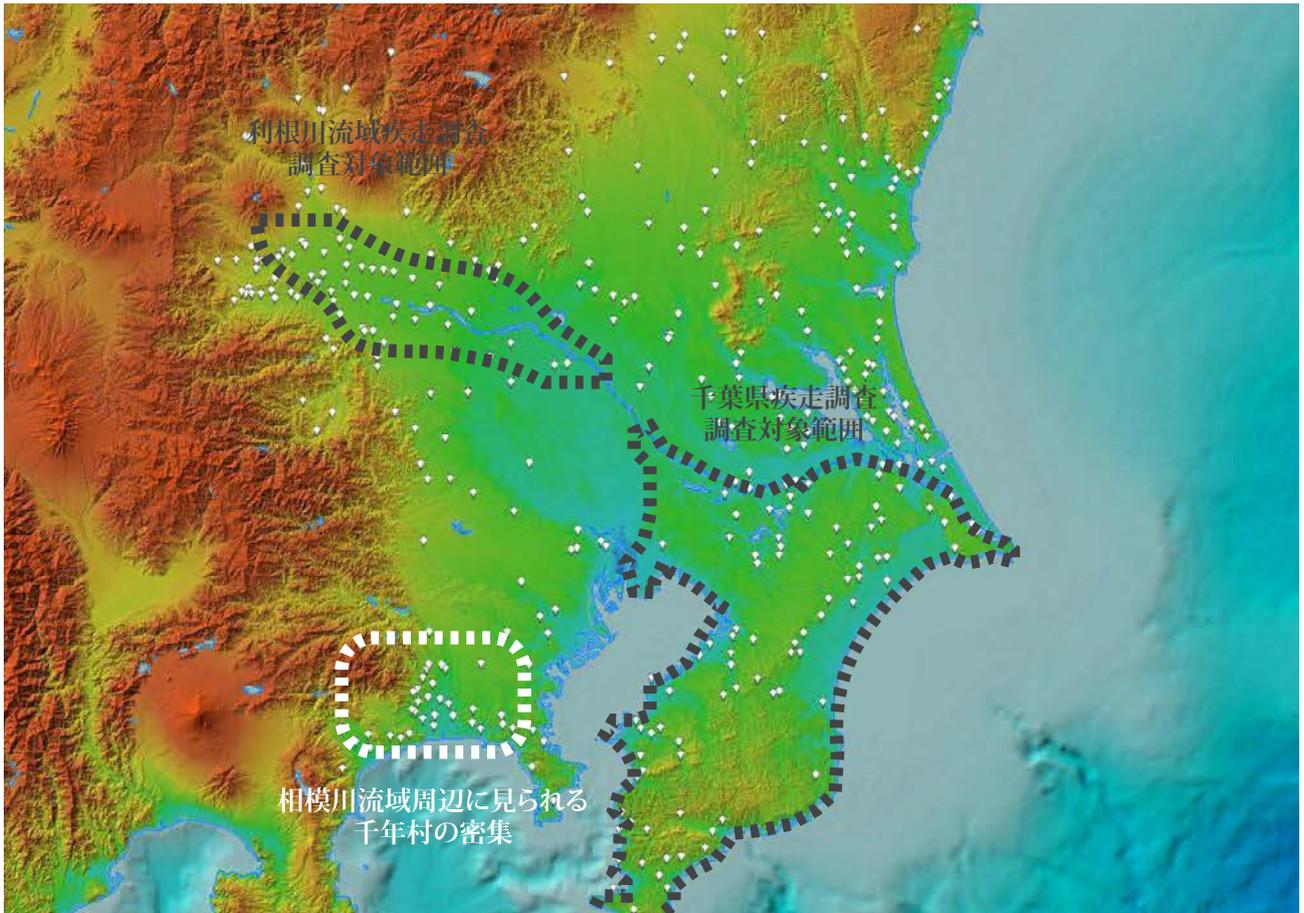


図1 関東地方の千年村

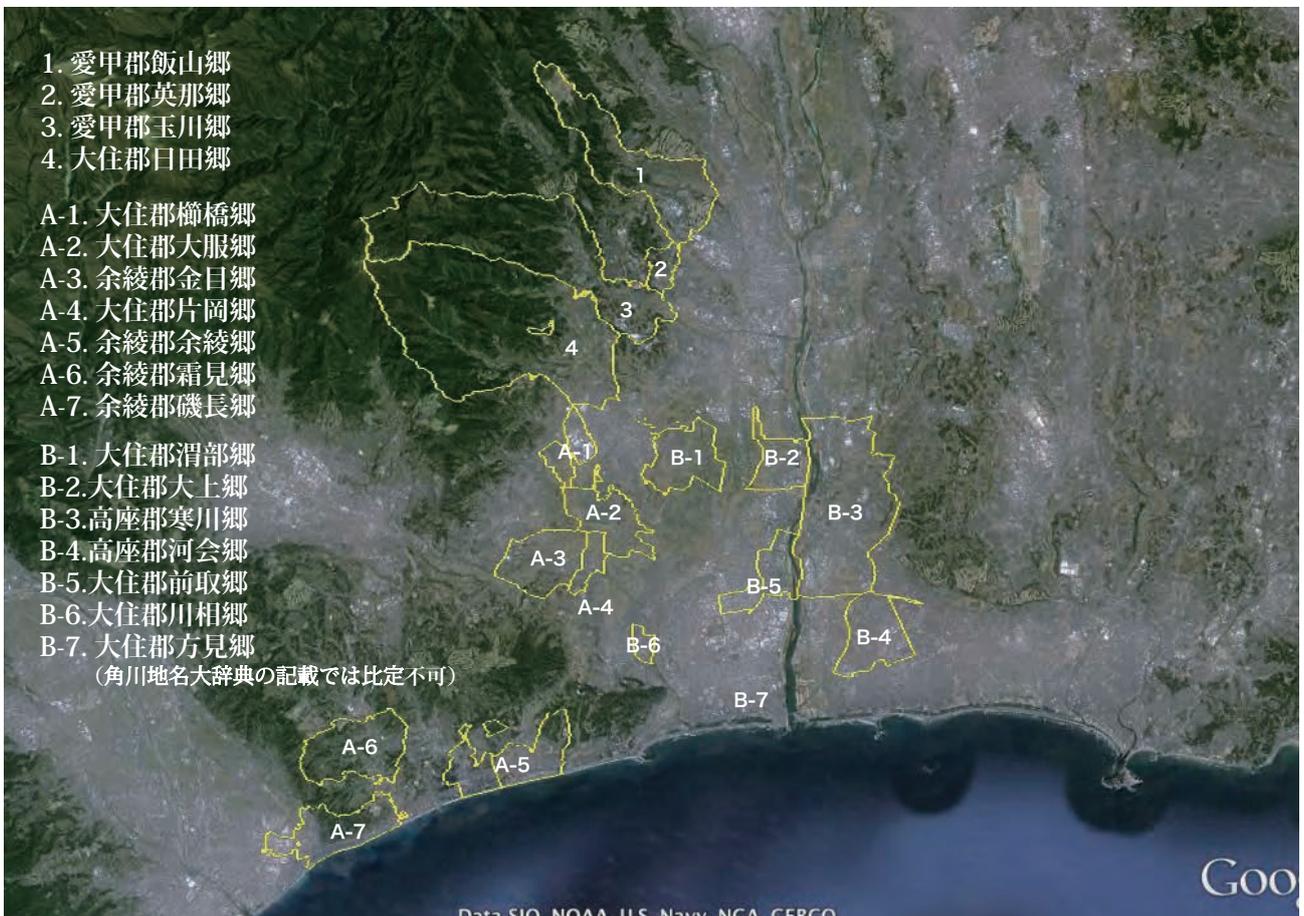


図2 調査対象地 (Google Earthに加筆)

## 第2章 基礎研究編

### 2-1. 和名類聚抄を用いた地名比定地の利用と、その限界と展望

〈千年村〉を全国からひろく収集するために、平安期文献『和名類聚抄』(註1)に記載される古代地名とそれら古代地名を現在地名へと比定した既往成果を用いている。その主参考資料が『角川日本地名大辞典』である。これら資料が平安期、すなわち今から千年前の地域名の状態を網羅的に知ることができる文献である。しかしながら『和名類聚抄』の郷名比定地=すべての〈千年村〉ではない。このデータベースが呼び水になって、新たな資料や情報が蓄積され、さらに精緻な千年村マップができあがることを期待している。

『角川日本地名大辞典』(註2)には、『和名類聚抄』記載の古代地名の現在比定地に関する先行研究がまとめられている。この記述を全国的に見てみると、古代地名に比定される現在地が、以下の7つに分類されることがわかる。

1. 単一の大字に比定される

2. 複数の大字に比定される

3. 市域に比定される

4. 河川流域など複数の市域にまたがる範囲に比定される

5. 比定に関する説が異なる

6. 比定地は未詳とされる

7. 比定地に関する記述がない

千年村運動体が公開しているウェブサイト「千年村プロジェクト」(註3)では、上記の分類のうち、1と2、一現在の行政区画・大字に比定されるものをデータベースとして地図上に表示している。その数は『和名類聚抄』記載の郷名数3986中の1977件であり、約半数となっている(図2-1-1)。現在においても比定できていない地域も多くある。データベースのマップ表示に関しては、可視化を第一の目的としたもので、この表示が示す領域やその中心に大きな意味はなく、めやすと考えて頂ければ幸いである。

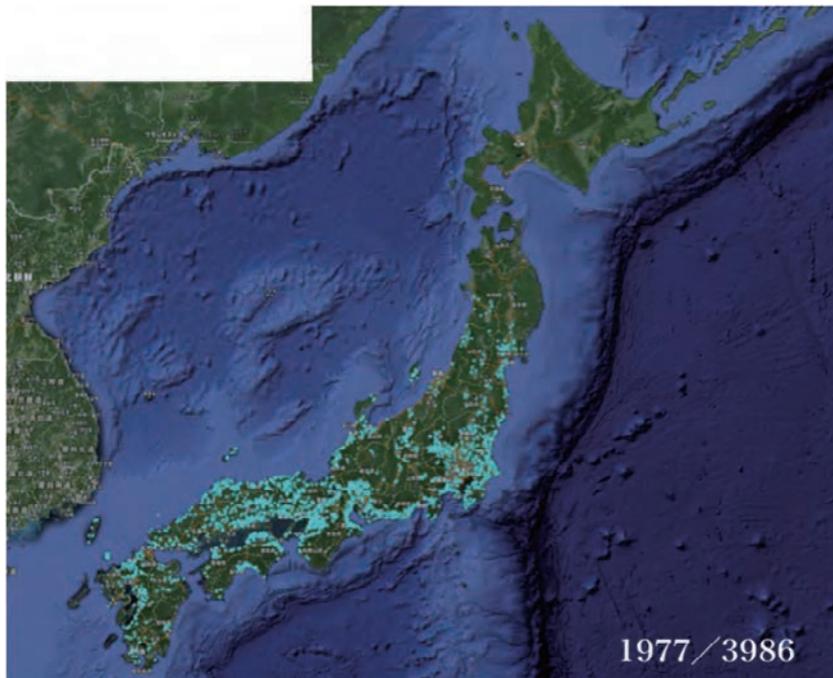


図1 千年村の分布図 (Google Earthに加筆)

1) 平安期文献『和名類聚抄』、源順著、931-938成立か。『和名類聚抄』は、古代律令国家が各地を国・郡・郷で管理していた時代の地名を記載する。

2) 『角川日本地名大辞典』は、日本全国の地名、その由来・沿革とその地の歴史を、都道府県ごとにまとめた辞書。全49巻、別冊2巻で、1978-1990年にかけて出版された。

3) 千年村プロジェクト URL: mille-vill.org

# 第3章 各村の報告

第3章では疾走調査において  
悉皆的に調査をおこなった18村の概略を以下の5つの視点から示す。

- 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報
- 2) 実見によって得られる客観的情報
- 3) 考察
- 4) 集落を象徴する風景と名前
- 5) 断面ダイアグラム

|      |                                      |    |
|------|--------------------------------------|----|
| 01   | 愛甲郡印山郷／神奈川県厚木市飯山                     | 7  |
| 02   | 愛甲郡英那郷／神奈川県厚木市愛名                     | 9  |
| 03   | 愛甲郡玉川郷／神奈川県厚木市岡津古久・小野・七沢             | 11 |
| 04   | 大住郡日田郷／神奈川県伊勢原市上粕屋・日向・子易・大山          | 13 |
| A-01 | 大住郡櫛橋郷／神奈川県伊勢原市白根・鈴川・串橋              | 15 |
| A-02 | 大住郡大服郷／神奈川県平塚市岡崎                     | 17 |
| A-03 | 余綾郡金目郷／神奈川県平塚市南金目・北金目                | 19 |
| A-04 | 大住郡片岡郷／神奈川県平塚市片岡                     | 21 |
| A-05 | 余綾郡余綾郷／神奈川県大磯町国府本郷・国府新宿              | 23 |
| A-06 | 余綾郡霜見郷／神奈川県中郡二宮町                     | 25 |
| A-07 | 余綾郡磯長郷／神奈川県小田原市山西・前川・小船・沼代・小竹        | 27 |
| B-01 | 大住郡滑部郷／神奈川県伊勢原市上平間・下平間・上谷・下谷・沼目      | 29 |
| B-02 | 大住郡大上郷／神奈川県平塚市大神                     | 31 |
| B-03 | 高座郡寒川郷／神奈川県寒川町                       | 33 |
| B-04 | 高座郡河会郷／神奈川県茅ヶ崎市西久保・円蔵・矢畑・浜之郷・下町屋・茅ヶ崎 | 35 |
| B-05 | 大住郡前取郷／神奈川県平塚市四之宮                    | 37 |
| B-06 | 大住郡川相郷／神奈川県平塚市徳延                     | 39 |
| B-07 | 大住郡方見郷／神奈川県平塚市千石河岸・札場町               | 41 |

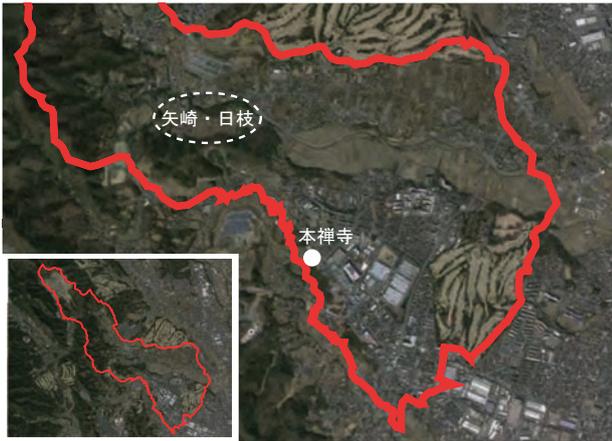


図1 比定の大字領域 Google Earthより

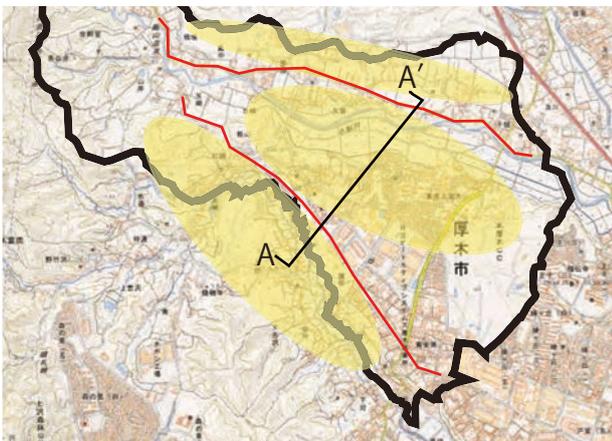


図2 地形図(著者加筆) 地理院地図より



図3 小鮎川低地の水田



図4 小鮎川北側集落

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

愛甲郡印山郷は現在の神奈川県厚木市飯山に比定されている。中津山地から愛甲台地にかけて、相模川支流の小鮎川中流右岸に位置する。畑や水田が広がっていたが、開発が進み住宅が多くなり、大きな工場やゴルフ場が目立つ。

創建当時の姿を残す本禅寺の本堂は、寛永18年(1641)に建てられたもので、全国的に近世初頭以前の日蓮宗建築がない中で貴重な文化財とされる。

明治初年の時点で飯山村内には寺社の維持・運営のために設置された所領である寺社領が存在していたことから、寺社の役割が昔から大きな役割を成していたのではないかと考えられる。

## 2) 実見によって得られた客観的情報

### ・環境

山際にはレベルが高く水を引けなかったためか畑が目立った。小鮎川の川沿いには水田が広がっているが、縮小されて宅地化された部分もあった。しかし小鮎川は水位が低いことから水田に用いられた水は貯水池からの可能性が高い。

### ・集落構造

小鮎川の北側の集落が現在まで残っているのが見られると同時に、水田を跨いで南側では山際に短冊状の開発が行われ、比較的新しい住宅、古い住宅、新しい住宅と3段階に宅地化が進んでいた。

また、日枝から矢崎の地域には川沿いの村が現存しており持続的な変化が見られた。

### ・共同体

この領域はひとつのコミュニティではなく、神奈川県道60号線と、並行したもうひとつの道路とで分けられたおおよそ3つのまとまりから形成されていると考えられる。並行した2つの道路には垂直に交わる道路がないこと、また土地の高低差も相まってそれぞれのまとまりを形成した可能性がある。今後検討する必要がある。



図5 古い屋敷に見られた祠と鳥居



図6 家と畑がセットの区画



図7 段階区画の永久千年村

### 3) 考察

愛甲郡印山郷には、昔からの集落構造を持続している地域と新たな開発によって構成された地域が伺えた。

本禅寺から北側へ小鮎川の低地を見るとレベル別に住み分けがされている印象を受けた。本禅寺周辺は谷、小学校などの広範囲必要とする土地は高い位置に配置されている。一番高い場所の街道沿いの崖は短冊型の開発が行われ、新規交代が激しく土地区画にあった屋敷が壊され新しい家が建つミニ開発がされている。ミニ開発が見られる場所は昔は使えない土地であり暮らしにくいとされてきたようだ。この下のレベルに敷地内に祠や鳥居がある古い屋敷が残り、最後に低地の利用しなくなった水田を宅地化した新しい家が見られた。

日枝・矢崎の地域は家は建て替わっているが、ミニ開発が行われていない川沿いの村が現存していた。長方形に区画された家と畑がセットの利用見られ、石垣が用いられていた。更新されつつも現存する持続的な変化が特徴だと考えられる。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「段階区画の永久千年村」

レベル別に住み分けを行いながら、現在でも昔から利用しづらい地域のみ開発の手が入っている点から永久千年村と呼ぶ価値がある。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)



図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域 Google Earthより

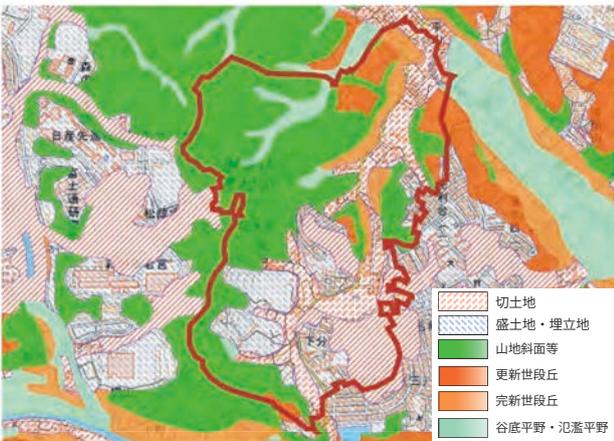


図2 土地条件図 国土地理院より

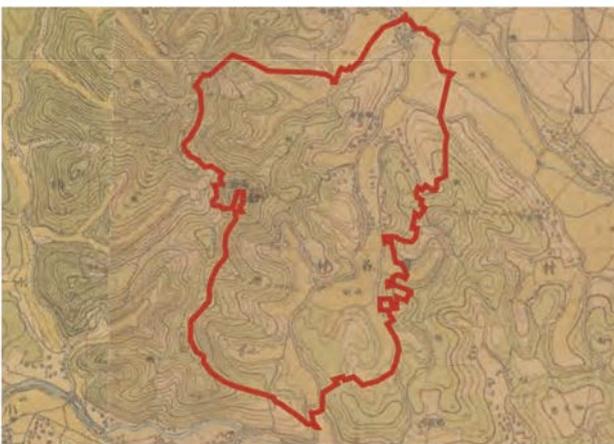


図3 迅速測図 農業環境技術研究所より



図4 古い住宅 撮影＝犬伏順一

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

愛甲郡英那郷は厚木市愛名に比定されている。

愛名は愛甲台地の南部、恩曹川と新玉川に挟まれた丘陵上に位置する。英那郷は西を高松山、東を小高い台地に挟まれた谷に形成された集落である。郷の南北に県道63号線が通っている。愛名鳥山遺跡から縄文早期の竪穴式住居1ヶ所、弥生中期の竪穴式住居7ヶ所が発掘されている。

また、英那郷は北を印山郷、南を玉川郷という大きな郷に挟まれ、2つの郷を橋渡しするように位置する小さな郷である。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

#### ・環境

調整池や排水溝が多くあることから、かつて水田があったことが窺える。しかし現代では県道沿いを中心に土地改変・区画整理が行われている。特に南部では大規模な開発が行われ、宅地化がされている。そのため水田は無くなり、県道の東側の山林の大部分が失われている(図2、3)。それに対して県道の西側は愛名緑地として比較的保全されている。また自足のためと思われる農地が点在している。さらに牛舎も見られる。

#### ・集落構造

大規模な開発がされており全体的にグリッド状の新興住宅が多いものの、一部の古い住宅は残っている。特に郷の北部の段丘上(図1白枠)には広い敷地と屋敷林を持つ住宅が見られる。また、古い住宅の屋根に赤いトタンが多く利用されていることも印象的である。

新興住宅と古い住宅に共通して、谷の斜面に立地するために盛土がされ基礎が高い住宅が多い。

#### ・その他の視点(交通等)

1970年までは県道沿いにおいて宅地開発が集中していた。しかし、1970年代に県道から分岐するバイパスが建設されてからは、そちらに開発が集中している。



図5 道路沿いの畑地 撮影＝橋本慧



図6 愛名諏訪神社 撮影＝橋本慧



図7 道に寄り添う 撮影＝鈴木明世

### 3) 考察

現在の県道は明治期において街道として利用され印山郷と玉川郷を繋ぐ機能を持っていたと考えられる。街道沿いに立地する英那郷は宿場町と農村の二面性を持っていたと考えられる。しかし社会の変化に伴い道路を中心に開発が進んだと考察される。

しかしながら、大規模な開発がなされている中でも、古い住宅や水路、自足のための農地などかつての郷の名残りを所々で見ることができた。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「道に寄り添う」

かつては印山郷と玉川郷を繋ぐ街道を中心に住宅と水田が立地していた。1970年代にバイパスの建設が始まると、そちらに宅地開発が集中し始める。このように、今も昔も主要道路に寄り添うように宅地開発が進んできた。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

### 参考文献

竹内理三他編『角川日本地名辞典14 神奈川県』  
角川書店、1991年

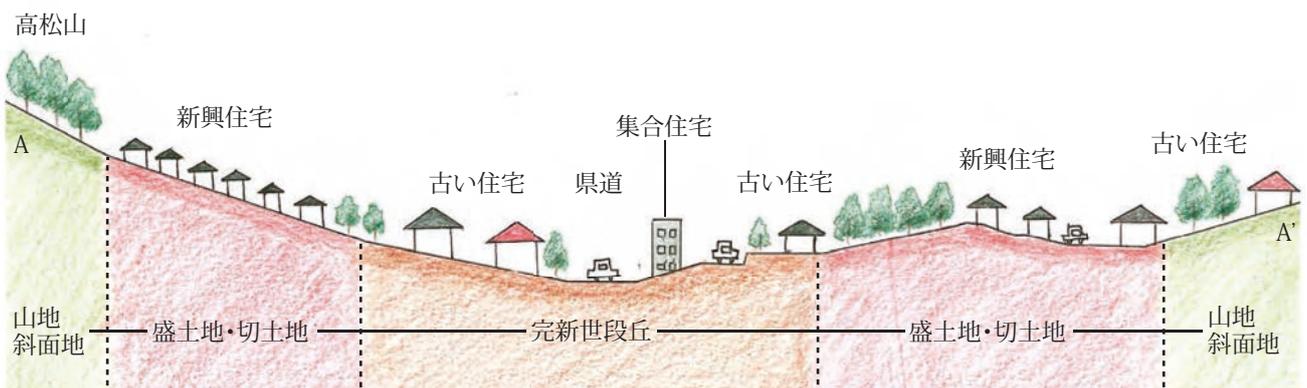


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域

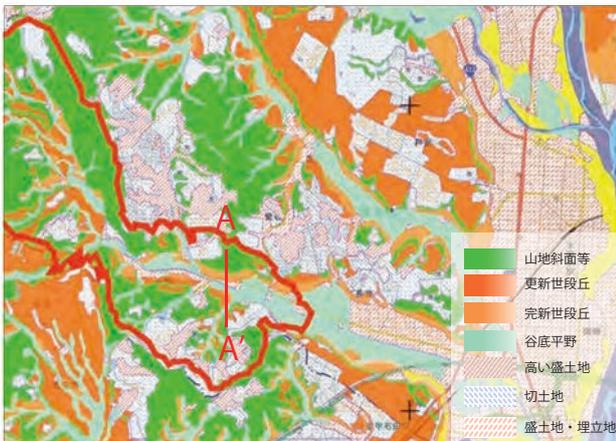


図2 土地利用図(筆者加筆) 地理院地図より



図3 基盤地図(筆者加筆) 地理院地図より



図4 旧玉川の名残 撮影＝金盛晋也

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

現在は比定大字の中央に直線上に相模川に通じる玉川が流れているが、この姿は昭和16年に起こった玉川の氾濫を機に整備されたものであり、(新)玉川と呼ばれている。かつての玉川は金目川に合流し、相模湾に流れており、こちらを旧玉川と呼ぶ。氾濫した箇所は現在、水田として利用されている。玉川のそばには小野神社があり、創建時期は不明であるが「延喜式神名帳」に記されているためそれ以前の古くから小野の地に鎮座していたことがわかる。また、比定大字の一つである七沢にはかつて七沢城があり、室町時代中期の守護大名である上杉憲忠により要害として建てられたと「鎌倉大草子」に記述されている。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

#### ・環境

玉川沿いの県道603号線を中心に商業地区が線状に広がり、かつての玉川が流れていた箇所は水田が広がっている。山地にある岡津古久付近は山を大きく切り開く開発がなされ、大規模な工場が建てられている。

#### ・集落構造

子安神社の少し南下したあたりに農地と屋敷が混在した複雑な地形をした舌状の集落があり、その範囲内には小さな二次林や鳥居などがあり、水路を挟んで北側の盆地のような箇所は水田、水路の南側の台地には屋敷が存在した。

#### ・共同体

本疾走調査では共同体についての検討までは至っていない。玉川沿いの集落である七沢、小野を比較し共通点や違いから関係性を検討したい。

#### ・その他の視点(交通等)

現在の玉川から北の小町緑地の山際に「旧玉川」と書かれた石碑や、「小町竹橋跡」と書かれた木版などがあり、旧玉川の流路の名残が幾つか見られた。旧玉川は暗渠化されている。



図5 小野神社 撮影=金盛晋也



図6 集落内の農地 撮影=金盛晋也



図7 集落内の谷戸 撮影=金盛晋也

### 3) 考察

小町神社は小町緑地という比較的高いところにあるのにも関わらず、小野神社は玉川沿いの低地に存在している。しかし、低地の中でも1mほど高くなった微高地に建てられている。さらにその背後の背殿はそれよりももう一段(1mほど)高く石が積まれた場所に建てられていた。また、付近の住宅も石段で1mほど高くしていたりと、玉川整備後には目立った水害は起こっていないが、かつて暴れ川と呼ばれたその名残が残っているように感じた。また前述の子安神社付近の舌状の集落は道路に添って建築が並んでおり、中には鳥居が存在し集落単位で祀っていたのであろうと考えられる。また農地も存在しているため、図3の赤枠の中ですべての生活がまかなわれているような印象を受けた。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「低地と山の明暗くつきり村」

川沿いの低地にある小野、山中の高地にある岡津古久、その中間である台地に存在する七沢と比定範囲の中に様々な立地を取る大字が存在し、それぞれ違ったように跡形もなく開発が進んだり、昔の名残があったりと各々の村が違った道を進んだ対比が見れたから。小野、七沢の玉川付近は千年村の特徴を見つけることは難しかったが、岡津古久ではある程度名残が残っていたため、川沿いと山間部でも明暗が分かれたような気がする。

### 5) 断面ダイアグラム

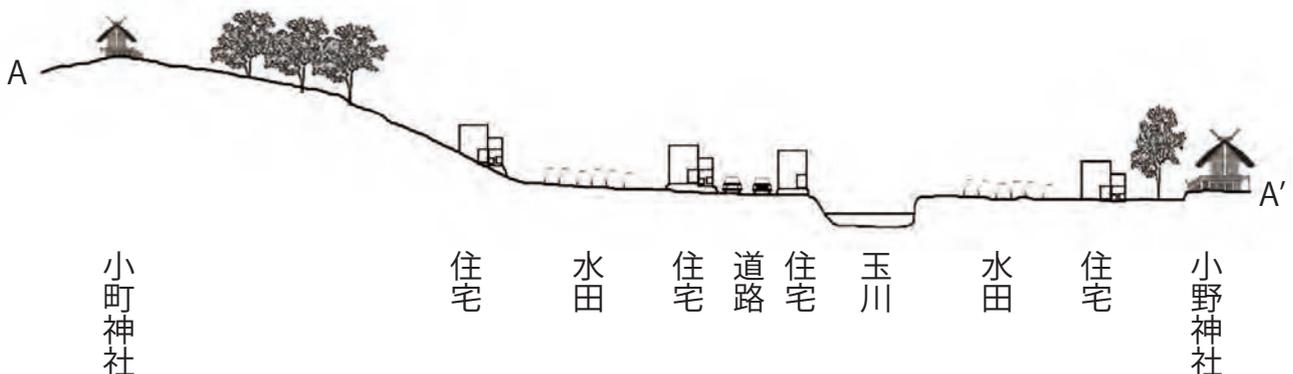


図8 断面ダイアグラム

04 大住郡日田郷／神奈川県 伊勢原市 上粕屋・日向・子易・大山

担当：近藤真

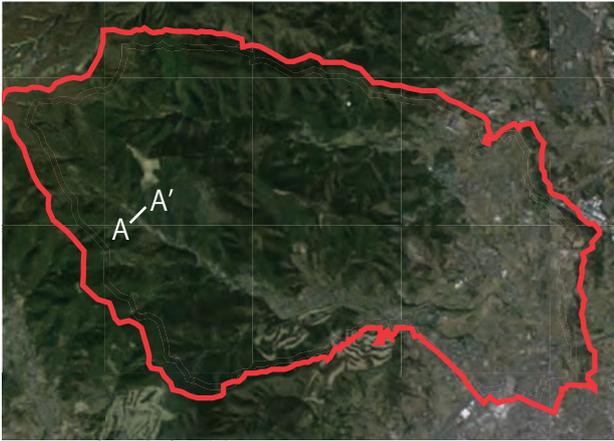


図1 比定の大字領域



図2 地質図(筆者加筆)



図3 大山に続く旧道

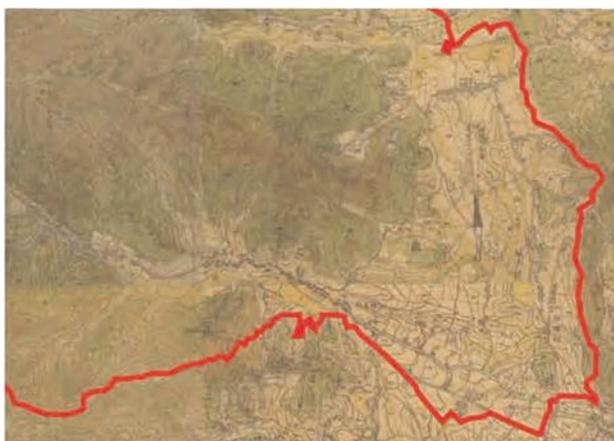


図4 迅速測図(筆者加筆)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

平安期に見ることのできる郷名。郷域内に「比比多神社」があり、同神社より、「ヒヒタ」と読むことがわかる。現在、比々多神社がある、三ノ宮、神戸付近まで、郷域が及ぶという説もある。

郷域の半分以上を占めている大山は、丹沢国立公園に指定されている。大山阿夫利神社と富士山本宮浅間大社の祭神が父子関係であるため、両参りの信仰があった。さらに、旅程が短いなど、気安く行えるため、関東一円の民衆に受け入れられていた。大山信仰の全盛期にあたる宝暦年間(1751～64年)には、参詣者は一年間で数十万人に達したといわれている。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

郷域の半分以上が山地に覆われており、郷域の東側には扇状地が広がっている。扇状地は、山地斜面、更新世段丘、谷底平野などの地質が複雑に入り組んでおり、盛土地が散見される。また、扇状地帯には水田が多く残っており、空き家が見られた。高速道路の工事に伴った遺跡調査が行われているところも多く見られる。

市街地を、県道64・64・603号が通っており、大山ケーブルカーの駅まで、県道611号が通っている。県道611号には、大山への参道を利用した旧道と、それと並列して造られた新道があり、その脇には鈴川が流れている。旧道は、道路沿いに家屋が並んでいる一方で、新道は農地を貫いて造られている。旧道沿いの民家の果樹は、2～3m程度に樹高が制限されていた。推測されるに、これらの果樹は、人間が収穫しやすいように樹高を抑制されていると考えられる。

・集落構造

迅速図によると、扇状地を通る旧街道沿いと、大山に続く参道沿いに集落が存在していた。比比多神社より先の、大山に向かう参道沿いは宿場町であったため、集落の大半が宿であった。現在では、扇状地の細い道路沿いと、旧道から別れた道路沿いに住宅が増加していることがわかる。



図5 農地を貫く新道



図6 迅速図と地質図の比較より、上粕屋町の移動



図7 新道と、獣害対策のフェンスが見える

・インフラ開発の影響、上粕屋の移転とその後  
ダム開発の影響による獣害で、比比多神社周辺では農業ができなくなり、農地と山の間には柵が設けられている。

また、迅速図と標準地図では、上粕屋の位置が変わっている。東名高速道路の開発によって、上粕屋村が集落ごと、鈴川を挟んで北に移動した。航空写真では、元の集落の地点に、基礎だけが残っている家屋も確認できる。さらに、2018年度、新東名高速道路の伊勢原北インターチェンジが完成予定であり、上粕屋の住居の移転が進められている。

### 3) 考察

扇状地、参道沿いともに、無秩序な住宅の拡大は目立たず、区画整理された農地ばかりでもないの、比較的市街化を逃れて、近代化以前の構造が残っている地域という印象を受けた。しかし、ダムや高速道路の開発など、インフラ開発によって断片的にかつての営みやめざるを得なくなった場所もあり、集落構造以上に共同体としての継続が困難となる可能性もある。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

「柔軟で、開発に負けない村」

#### 図7

高速道路の開発に伴って集落の移転が進んでも、かつての営みが続いている。

### 5) 断面ダイアグラム

図

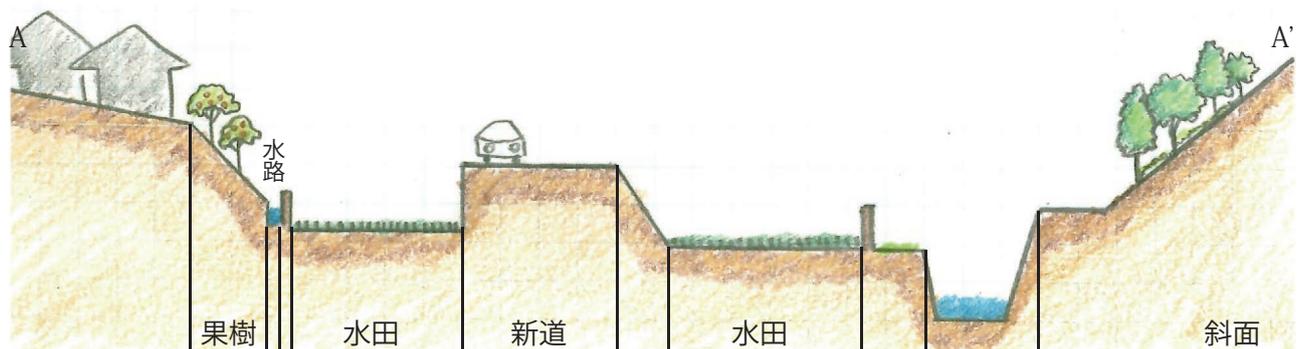


図8 断面ダイアグラム

A-01 大住郡檜橋郷／神奈川県伊勢原市白根・鈴川・串橋

担当：近藤真



図1 比定の大字領域



図2 地質図(筆者加筆)

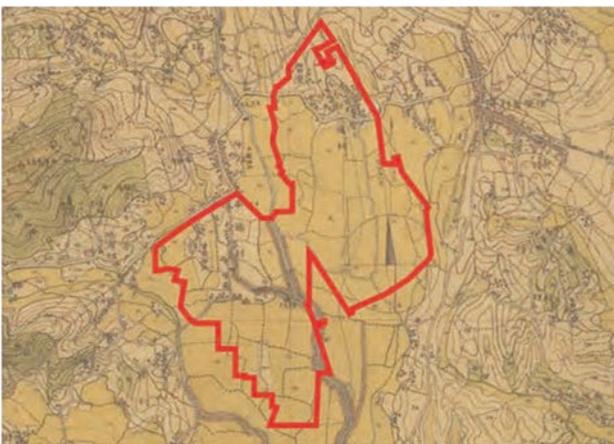


図3 迅速図(筆者加筆)



図4 鈴川の後背湿地

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

現在の伊勢原市白根、鈴川、串橋に否定される複数大字。

図2からわかるように、鈴川を境に、西側の串橋地区には谷底平野が広がり、東側の白根・鈴川地区は盛土地となっている。図2、図3を比較すると、迅速図では更新世段丘上に集落が存在しており、現在も、住宅の多くは段丘上にある。白根地区では、段丘とつながった盛土地にも住宅が広がっている。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

鈴川の後背湿地は、東側が主に水田、西側は主に畑地として利用されていた(図4)。

串橋地区の段丘上にある雷電神社から、平野部にある道路まで下りた。道路までの段丘崖では、古い土地割を残している住宅が散見されたが、造成された新しい住宅が目立った(図5)。また、道路を挟んで土地利用が大きく異なり、沿道の段丘側には住宅が並んでいるが、反対側は、道路より更に一段階土地が低くなっており、農地として利用されていた。道路を境目として、非常にわかりやすく土地を使い分けていた。

白根・鈴川地区の旧川は暗渠となっていた(図6)。

・集落構造

雷電神社の東側の遺跡には縄文時代から人々が暮らしていたという記述があった。

白根地区の段丘面は、入り組んだ道路のパターンから、古い集落であるとわかる。



図5 古い区割りと造成された住宅



図6 暗渠と化した旧河道



図7 地質に合わせて土地が利用されている

### 3) 考察

鈴川を境に、東側の白根・鈴川地区と、西側の串橋地区を比較すると、多くの共通点が見られるが、現在の姿は大きく異なっている。迅速図上では、両地区ともに非常に似た土地利用がなされているが、現在では、串橋地区の低地は農地として利用されている一方で、白根・鈴川地区の低地は盛土され、工業団地となっている。

土地条件図より、両地区ともに、河の流れ方や更新世段丘の入り方は似ている。おそらく、盛土地となっているところは、元は谷底平野で、農地として利用されていたと考えられるが、埋め立てられ、宅地とほぼ同じ高さとなっている。

以上のように、似たような性質を持ち、迅速図上でも多くの共通点が見受けられるが、鈴川を挟んで両地区の運命は大きく異なり、現在の姿は対照的だといえる。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

「運命違えたふたごの村」

白根・鈴川地区は、低地が盛土されて工場が開発されている一方、串橋地区は地質にあわせた土地利用が残っている。

### 5) 断面ダイアグラム

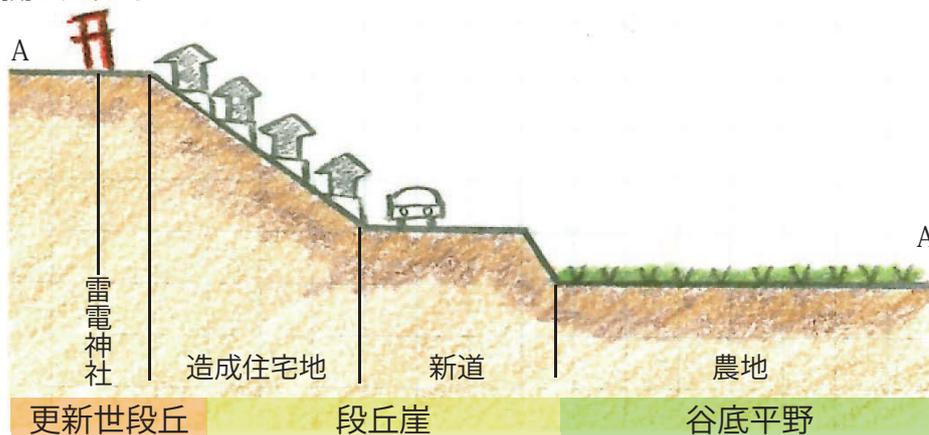


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域 GoogleEarthより

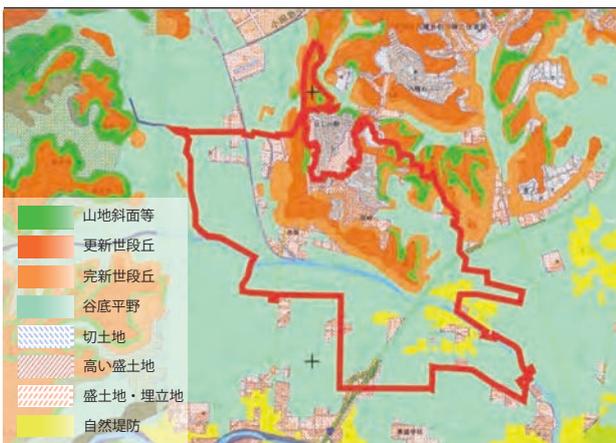


図2 土地利用図(筆者加筆) 地理院地図より

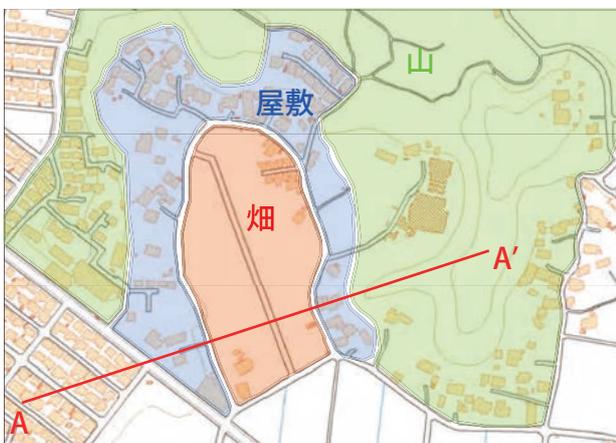


図3 標準地図(筆者加筆) 地理院地図より



図4 土地利用図(筆者加筆) 地理院地図より

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

台地の上に集落が形成され、川沿いのGLの低いエリアには屋敷が建てられていなかったが、現在でもこの傾向は変わらず。台地上の谷戸を切り盛りして大規模な住宅地開発を行い、現在ではそこに多くの人が住んでいる。そのため集落の西と南における境界にあまり変化が見られない。低地は主に水田として利用されている。郷名の大服とは大服部(おおはっとり)の略で、服部の住むところという意味であるという。服部とは絹織物を織る人のことであり、「続日本書紀」によると和銅7年に緇(=絹織物)の調を出したことが伺え、この頃から絹織物を生産するようになった。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

#### ・環境

比定大字の北に開発された住宅地が広がっている。低地に広がる水田のほとんどは区画整理されているが、王御住付近の農地は区画整理されていない。かつて絹織物の生産地だったが、養蚕業を営んでいるような建築は見られなかった。

#### ・集落構造

王御住付近における集落は三方を低い山に囲まれた盆地のような地形をしており、その谷底平野を畑として利用している。周囲の台地上には比較的規模の大きな屋敷が立ち並び、更にその背後に山がある。比定範囲の西側付近の金剛頂寺、円徳院はその付近で一番高いところに位置していた。(図4)

#### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討までは至っていない。今後王御住一帯の古い集落の各屋敷の関係性などが検討項目としてあげられる。またこの古い集落がどうやって現代の生活スタイルに馴染んでいくのかということも検討項目に入れたい。

#### ・その他の視点(交通等)

段丘に沿って高速道路が建てられている。比定範囲の西側を南北に通っている県道63号線は台地上の谷に通されている。



図5 集落内の農地 撮影=金盛晋也



図6 集落内の屋敷 撮影=金盛晋也



図7 集落の層 撮影=金盛晋也

### 3) 考察

王御住の集落はその中心に畑、次に比較的規模の大きな屋敷、その背後に里山のような人の手が入ったと思われる二次林と、同心円上に広がっており、この地域だけで持続的な生活が営まれている感じがした。(図7)を見ても、手前に農地、その背後に屋敷そして更に後ろに里山というように層のようになっている。屋敷は周囲の台地上に立地しており、水害に強そうな印象を受けた。王御住の集落の中心は畑として利用されているが一部に規模の小さな住宅(1DKほどの規模)が8棟ほど建てられており、台地上の建築との対比が見られた。集落の道沿いにある屋敷は一貫して家屋が見えない程の大きな生け垣をもっていた。中には蔵もある屋敷もあった。これらのことより、比較的裕福な人々が住んでいると考えられる。区画整理を逃れたのも個人の所有する土地面積が大きかったためでないかと考えられる。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「同心円広がり村」

昔の集落の形がそのまま残っており、かつ水田や畑等の耕作地、台地上に位置する屋敷群、そして背後に広がる里山など持続的な生活に必要なと思われる要素が王御住の小さな範囲にすべて詰まっているため。千年村の基本をすべて抑えた村である。

### 5) 断面ダイアグラム

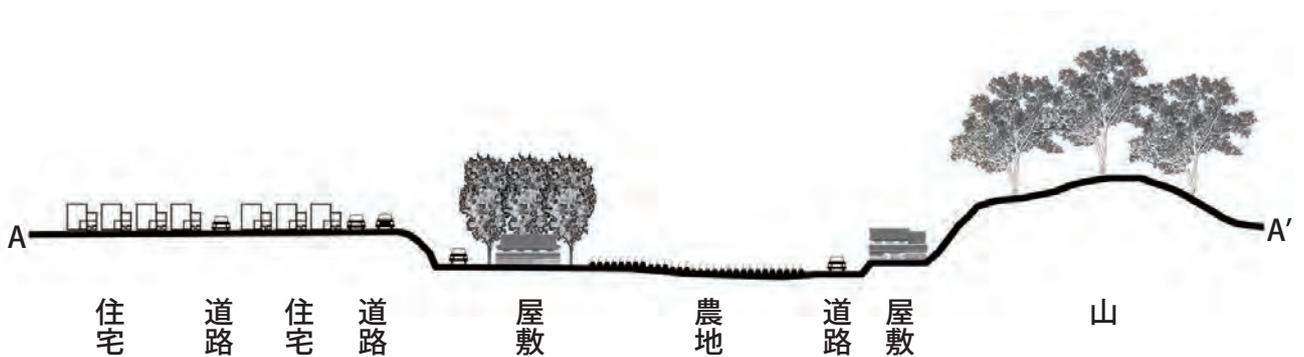


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域 GoogleMapより



図2 土地条件図(筆者加筆) 地理院地図より



図3 金目川の堤防



図4 光明寺観音堂(本堂内厨子は国の重要文化財に指定)

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

金目郷は現在の平塚市南金目・北金目に比定され、大磯丘陵の北東端、金目川流域に位置する。

「吾妻鏡」には建久3年(1192)8月9日に、鎌倉幕府が北条政子の安産祈願のため神馬を奉獻した相模国神社仏寺の1つとして「観音寺金目」とある。

建武2年(1335)足利尊氏は金目郷の旧二階堂氏領の南方・北方をそれぞれ鎌倉の宝戒寺、瑞泉寺に寄進した。(瑞泉寺領は後に浄光明寺領になる。)これが金目を南北に分けた最古の記録で、この「南方」「北方」が後の南金目・北金目の原形になったと考えられる。

応永28年(1421)12月11日の吉岡盛胤請文などによれば、当郷北方の本田数は37町5反180歩で、この年、金目(花水)川の氾濫によって20町が流出したという。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

#### ・環境

昔から平野部一体には、金目川から用水を引き入れた水田地帯が広がっており、現在もその利用は続いている。

近年になって大学ができたことから、学生向けの飲食店や賃貸マンション運営等で収入を得る農家も増え、生業に変化が見られつつある。

#### ・集落構造

北金目台地は大学キャンパスと併せて新興住宅地の開発が進行したが、台地の裾には昔からの畑が所々に残るが大部分は宅地化されていた。

南金目の大磯丘陵には畑地が広がり、住居が所々に見られ、昔ながらの集落構造が続いていると考えられる。

#### ・共同体

本疾走調査においては、共同体についての検討まではいたれていない。今後要検討。

#### ・その他の視点(交通等)

郷内を東西に走る県道62号線沿いには、ロードサイド的な開発が見られる場所もあった。

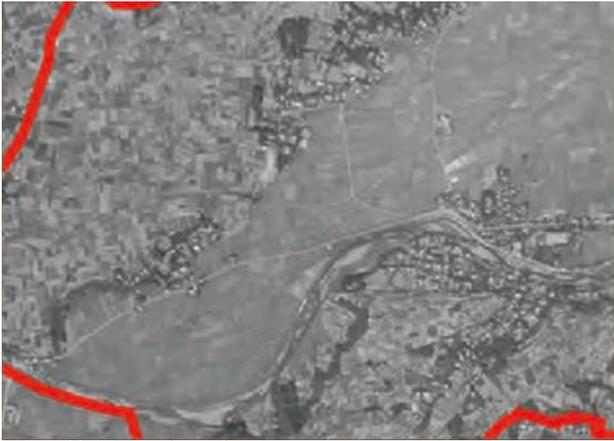


図5 航空写真(1962)



図6 航空写真(2007)



図7 南北で異なる更新を辿った村。妙現寺より、手前北金目、奥南金目。

### 3) 考察

金目川流域には北金目の塚越古墳など、旧石器時代の遺跡が発見されており、その頃から人が住み着くようになったと考えられる。

比定領域内の地形は、山(山地・丘陵・台地)と平野から成り立ち、その地形に合った生活が展開され、低地に宅地、山地に畑、平野に水田という土地利用がなされてきた。

航空写真(図5・6)を比較してわかるように、南金目では川沿いに宅地、丘陵地に畑という土地利用が続けられているが、北金目の台地には近年大学と宅地が併せて開発されたことで、南北でその発展の仕方は大きく異なった。

金目川は河床が高く、取水しやすく、昔から流域は水田稲作地帯となっている。その一方で比較的急流で曲がっているため、水害の危険が高く、昔から治水対策を行なってきた。慶長14年(1609)に徳川家康が金目川堤防の中でも最大規模の「大堤」を普請したとされている。

水田の下にはかつて繰り返された川の氾濫で運ばれた砂利が堆積しており、適度に水はけの良い土地が出来あがったため、現在も稲作が続いていると考えられる。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

「南北で異なる更新を辿った村」

金目川を挟む南北で更新のされ方が大きく異なった

### 5) 断面ダイアグラム

図8 参照

### 参考文献

金目川の博物誌—第100回記念特別展

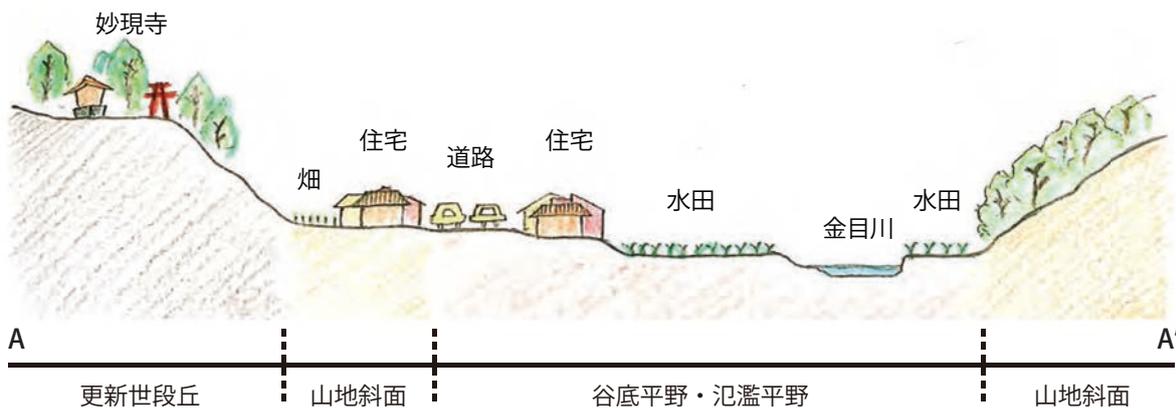


図8 図2 A-A' 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域 (Google earthより)

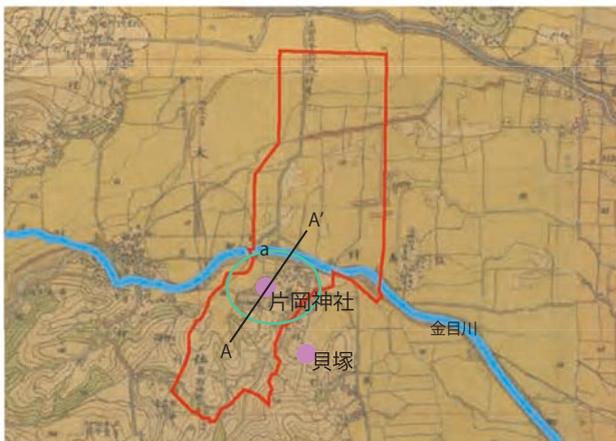


図2 迅速測図 (歴史的農業環境閲覧システム、筆者加筆)



図3 土地条件図 (国土地理院、筆者加筆)



図4 片岡神社例大祭の様子

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

相模国大住郡十六郷の一つで、平安期に見られる郷名。現在の平塚市片岡付近に比定される(注1)。南部の片岡神社の創建は1047年で、鎌倉時代から雷電社と称していた。「雷外鎮護の神として住民の神徳深く多くの伝説がある」(注2)とされているがその詳細は不明である。明治六年に改称されてから片岡神社と呼ばれている。片岡神社の例大祭はホームページ等を見る限り今でも毎年五月に開催されており、神輿を担ぐ人出も多く住宅地の細い道を人がぎゅうぎゅうになって練り歩いていく様子が伺える(図4)。金目川本流が郷域を南北に分断しており、片岡郷はこの金目川を境に土地利用が分かれている。北側は谷底平野がほとんどを占めており、古くから水田として利用されている。現在、南から北へ宅地が進出しているが、水田の多くは残っている。東側に郷域をかすめて小田原厚木道路(1969年開通)が通り、道路沿いに工場なども散見される。迅速測図で集落が見受けられるのは南の自然堤防の部分であり(図2・a)、その中で一番高い場所に片岡神社が鎮座している(迅速測図では「雷電神社」)。現在もこの地域は住宅地がメインだが、集落内の道は北側に比べ細く複雑である。郷域からわずかに南東へはずれたところに五領ヶ台貝塚がある。縄文中期の貝塚を含む遺跡で、台地の突端に位置する。図3の盛土地あたりはかつて海で、貝塚近郊は漁労が盛んだったことが発掘物から窺える。

## 2) 実見によって得られた客観的情報

調査当日は郷域北側から県道63号線を南下し、北部の生産地を確認。その後金目川をわたり段丘下の集落および片岡神社を中心に見て回った。その後南下して郷域から少しはずれた場所の集落も見た。

### ・環境

郷域北部にて圃場整備された水田を確認した。宅地が進出しているが、生産は行われている。県道は広く直線に整備されているので、生産地から集落への見通しが良かった。橋を渡った金目川以南、自然堤防上の道は細く、険しかった。特に片岡神社へ向かう坂道の傾斜は急勾配で、このあたりだけが突出して崖のようになっていた。また、隣の金目郷東南から片岡郷の南にかけては似た印象の風景が続いた。

### ・集落構造



図5 崖上から川方向を見下ろしたところ(図2矢印a) 撮影=金盛



図6 尾根道から宅地と貝塚を見渡す(図1矢印b) 撮影=金盛



図7 高低差の隙間にできた墓地 撮影=福島

現在、片岡神社周りには住宅地が形成されているが(図2-a)、これは1970年代以降に建てられており、比較的新しい住宅地であった。尾根の頂上部、片岡神社横から南東を見ると集落の周囲を一望できた(図6)。また、頂上部から一段下がった筋道には、等高線にそって墓地があった(図7)。墓地の地点からは五領ヶ台貝塚がよく見えた。古くから人が住んでいる地域は迅速測図でも確認できるように、道が細く複雑な金目川南側の自然堤防上であった。川に近接している住宅は新しい分譲住宅やアパートであり、一本奥へ入った道沿いの住宅郡の方が家構えからしても古そうであった。郷域から南に少しはずれた山際に立派な住宅と農地がセットになったような集落があった。

#### ・共同体

実見では共同体について見ることはできなかった。

### 3) 考察

片岡神社周辺は70年代に入り急に住宅が進出する。道路の開通と時期を同じくしているので、通勤範囲が広がったための結果と考えられるかもしれない。自然堤防の頂上に神社、少し下がった中腹部に筋状に墓地が位置する。墓地より下の地域に古くからの集落があり、かつては金目川をはさんで反対側の農地へ働きに出かけていたのではないかと。郷域のほずれのある地域では農地と宅地が近接しており、山際に沿って大きな邸宅が並ぶため裕福な農家が住んでいた地区だと思われる。それは隣の金目郷の南金目地区から続く風景によく似ていたため、今後は隣の郷とのつながりを検討する必要がある。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「高低差に時間がたまる村」

自然堤防の筋状の坂の連なりに、時間差で墓地や宅地ができていく様子が分かる村である。

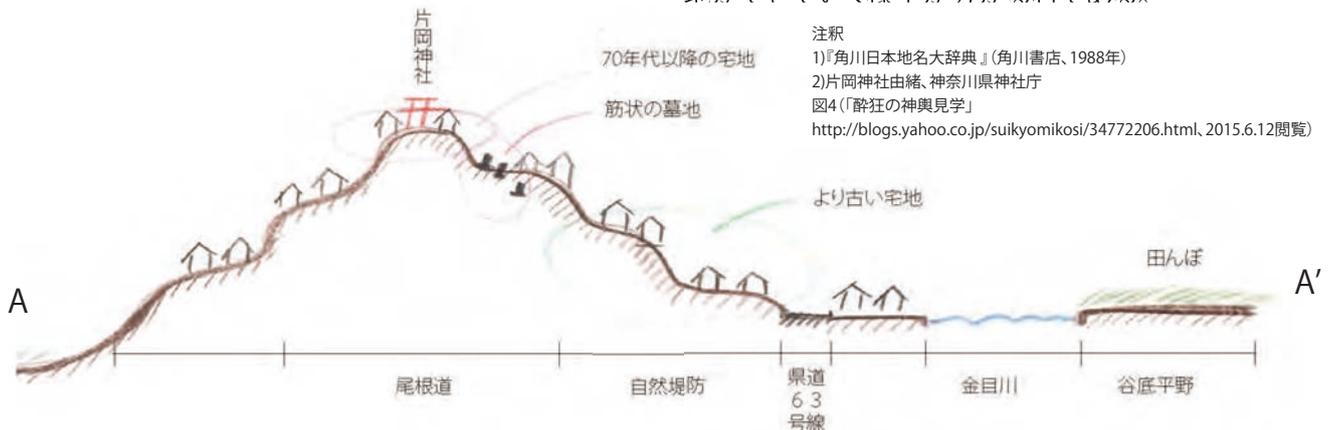


図8 断面ダイアグラム

注釈

1)『角川日本地名大辞典』(角川書店、1988年)

2)片岡神社由緒、神奈川県神社庁

図4(『酔狂の神輿見学』

<http://blogs.yahoo.co.jp/suikyomikosi/34772206.html>, 2015.6.12閲覧)



図1 比定の大字領域



図2 迅速測図（筆者加筆） 地理院地図より



図3 土地条件図（筆者加筆） 地理院地図より

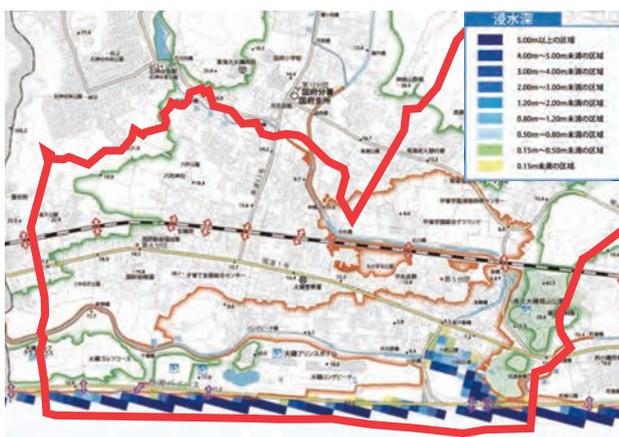


図4 大磯町ハザードマップ（筆者加筆） 大磯HPより

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

海岸線と平行に、海側から砂丘、谷底平野、更新世段丘が帯状に連なっている。南は相模湾に面し、海岸線に沿って砂丘が広がる。北東部に高麗山、北西部に鷹取山という小丘陵があり、住宅地や畑地が混在している様子が見てとれる(図1)。郷域の南部を東海道が貫通し、街道に沿って古い集落が残っていると考えられる(図2)。

歴史的物事については、六所神社が郷の西部に存在する。六所神社の起源は、第十代崇神天皇の時代(紀元前1世紀頃)に遡る。六所神社は、出雲地方から移住し、この地を開墾した人々により出雲の祖神である櫛稲田姫命くしなだひめを守護神として創建され、大化の改新後、相模国の総社として現在地に遷座された。

## 2) 実見によって得られた客観的情報

実見の行程は、まず、迅速測図において郷域の東に確認される集落α(図2参照)を旧東海道に沿って歩き、その後、郷域の東側に確認される集落β(図2参照)および六所神社を訪れた後、南下し平野部の様子を実見した。

### ・環境

砂丘は標高25m前後までおよび、谷底平野とはかなりの高低差があった。砂丘上ではゴルフ場や娯楽施設等の開発が行なわれていた。谷底平野には葛川が流れており、主に畑地が広がっているが、平野と段丘の際には住宅地が見られる。更新世段丘上には東海道が通り、ロードサイド的な開発が行なわれながらも、古くからの集落が残っていた。

### ・集落構造

古くからの集落は東海道沿い、六所神社の参道沿いに多く見られた。更新世段丘上に居住地が多く見られ、谷底平野部分は畑作等の生産地としての色合いが濃い。

### ・共同体

六所神社の周辺では、みのしま 蓑島姓の住民が集中して居住している。ヒアリング調査によれば、崇神天皇の時代(紀元前1世紀頃)、蓑島姓の方々の祖先に当たる人々が出雲からこの地に移住し、現在の住民は13～14代目にあたるとの事であった。



図5 東海道沿いの集落 撮影=木村



図6 参道とインフラの立体交差 撮影=木下



図7 段丘際から砂丘をのぞむ 撮影=近藤

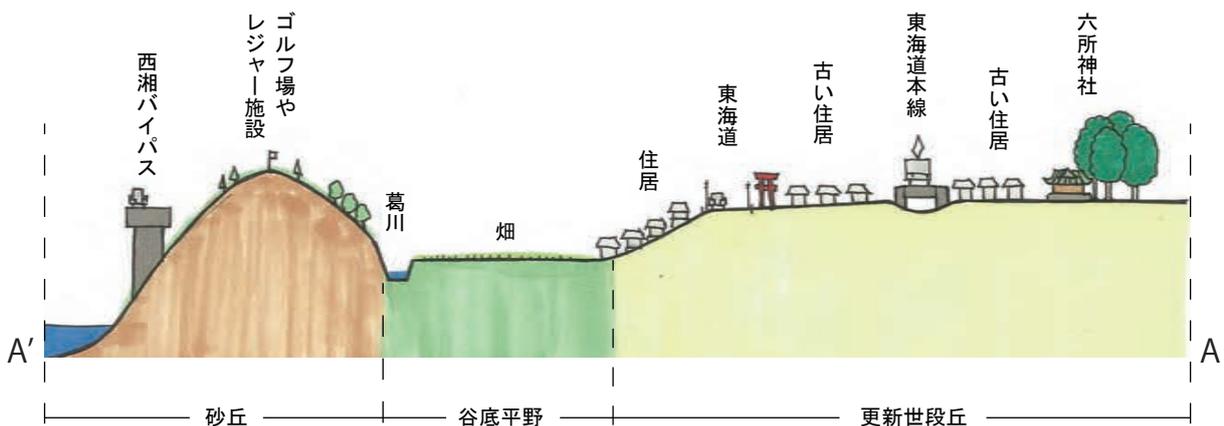


図8 A - A'断面ダイアグラム

### 3) 考察

郷域の南部において、砂丘、平野及び更新世段丘とそれぞれの土地条件を読み込んだ土地利用がなされているという印象を受けた。

砂丘部分は、砂丘が海側からの災害から内陸部を守る役割を果たす(図4参照)と共に、近代においては、広い土地を生かして大規模レジャー施設等呼び入れ、地域に経済的な利潤をもたらしていると考えられる。

谷底平野部分は、周囲と比べて低地に位置する為防災面では劣る土地であり、畑作等を行なう生産の場所として機能していると考えられる。

更新世段丘上は、東海道が通り交通を支える役割を持ち、余綾郷の骨格を成してきた場所であると考えられる。また、街道に沿って集落や神社が存在し、古くからの共同体も確認された事から、人が継続的に生活する場所としての機能も担っていると考えられる。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

「三矢村」

郷域の南部に広がる、砂丘、谷底平野、更新世段丘の3本の帯がそれぞれの役割を果たす事で、集落の存続に貢献している。「一本の矢では簡単に折れてしまうが、三本束ねると折れない」という三矢の教えの様に、異なる性質の地域が束ねられて頑丈な集落となっている。

### 5) 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域 google mapより



図2 比定の大字領域(土地条件図) 地理院地図より



図3 二宮町のハザードマップ 二宮町HPより



図4 県道71号線(旧軽便鉄道)の様子 撮影＝大森

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

相模湾に面し、その海岸線と平行するように西湘バイパス・国道1号が東西に横断しており、町の北部はなだらかな丘陵地が東西に伸びている。また、北部には50年程前に新しく開発された富士見ヶ丘地区があり、住宅地となっている。1889年に一色村・川匂村・中里村・二宮村・山西村が合併して吾妻村となり、1935年に現在の二宮町となった。

## 2) 実見によって得られた客観的情報

### ・環境

砂丘と段丘が川を隔てずに接続しており、砂丘と段丘の境目は低くなっていた。砂丘部分は高さが25m近くあり、かつ集落のある内陸部分は海岸からも離れているため、津波等の災害による影響が少ない印象を受けた。

### ・集落構造

住民への聞き取りによると、北部の富士見ヶ丘地区は以前は畑であり、迅速測図で確認できる旧二ノ宮村がおもな居住地域であったが、小田急線の開通に伴い、土地や畑が、ファミリー向けのベッドタウンに開発されたようであった。

### ・共同体

住民への聞き取りによると、小田急線開通以前まで二宮町では地引網の漁業や、自家農園、金物屋、靴屋など町全体で町の生活を支えていた個人商売の町であったが、国鉄等で勤務する人が増えたため副業化し、現在では当時の店はあまり残っていないということであった。網元も三軒ほど残っているだけであった。また、中町の氏神である守宮神社には神主がおらず、代々町の皆で守ってきたということであった。また守宮神社を含む二宮にある神社のほとんどが川匂神社を総本山としていた。この川匂神社一帯は川匂部落<sup>※1</sup>と呼ばれ、「フタミガオカ」からやってきた二見一族によって発生したということ<sup>※2</sup>であった。

### ・その他の視点(交通等)

現在の県道71号線には、1901年から1937年にかけて軽便鉄道が走っており、秦野ー二宮間を繋いでいた。秦野で作られた葉タバコの輸送が行われた。目的であった。



図5 川勾神社入り口 撮影=福井



図6 旧川勾部落農地 撮影=福井



図7 神社と民家が寄り添うように隣接(守宮神社) 撮影=福井

### 3) 考察

海岸沿いの二宮地区には代々この土地に住んでいる人が多そうであった。25mを越える大きな砂丘があり、その奥の段丘上に集落があるため、集落として土地条件を読み込んだ住み分けをしていたと考えられる。また、東海道沿いであるにも関わらず、かつては、個人商売の町として、町の中で需要と供給が結んでいたらしく、その要因を今後調査する必要がある。

霜見郷の比定領域ではないのだが、実見した川勾神社の入口付近は、うっそうと茂る山のふもとにぼっかりと穴を空けて作られたような場所であり、聖域の様であった。代々神主をしている二見一族の発祥地、「フタミガオカ」がどこにあったのかは不明であるが、一之宮である寒川神社の存在する高座郡に二実郷<sup>※3</sup>という地域がかつてあった。二実は「フタミ」と読めるため、そこからこの地へ訪れた二見一族が、川勾神社を作り、一之宮をかけて寒川神社と争ったと考えることはできないだろうか。あくまで仮説のため、今後調査を要する。

#### 注釈

- ※1 二宮という地名はこの川勾神社が相模国二之宮と呼ばれていることに由来する。相模国一之宮は寒川神社であり、本疾走調査で訪れたB-03地域に該当する。
- ※2 詳細地は不明である。
- ※3 詳細比定地は不明である。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「寄り添い村」

村人同士で寄り添い、神社と寄り添い、自然と寄り添い、道と寄り添い存続してきた村であると考えられることができる。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

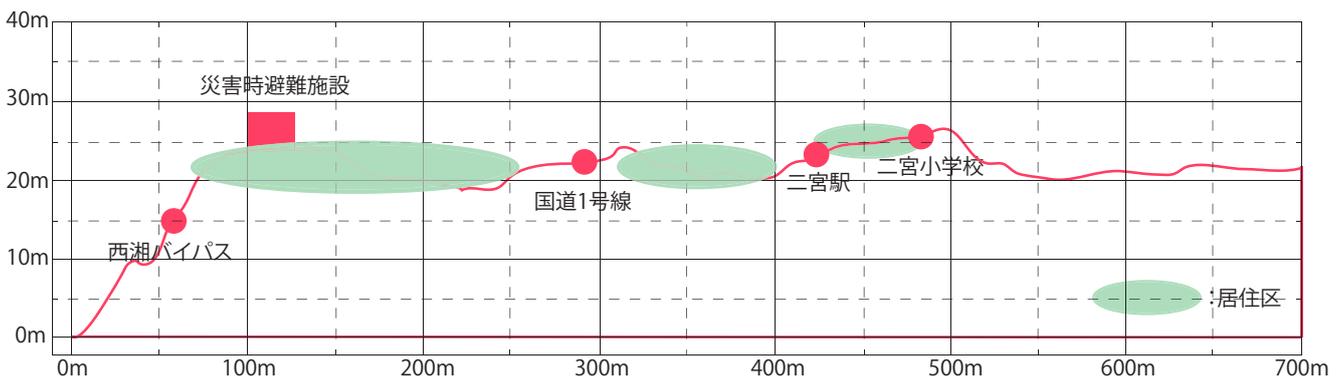


図8 断面ダイアグラム(図1 A-A'断面) 参考=二宮町HP



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapsより

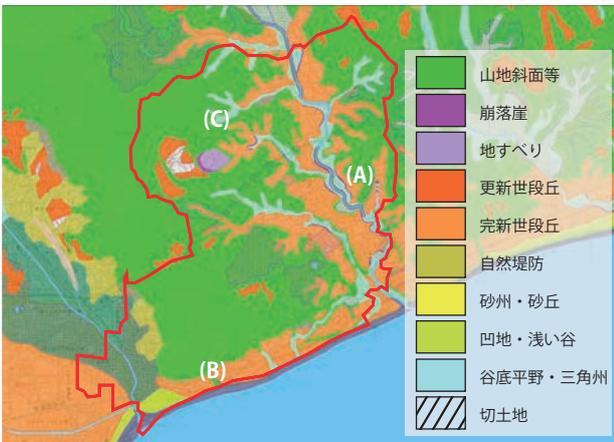


図2 土地条件図(筆者加筆) 地理院地図より

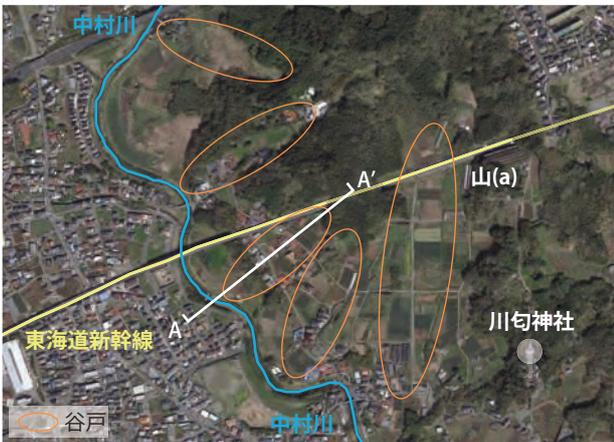


図3 山西周辺図(筆者加筆) Google Mapsより

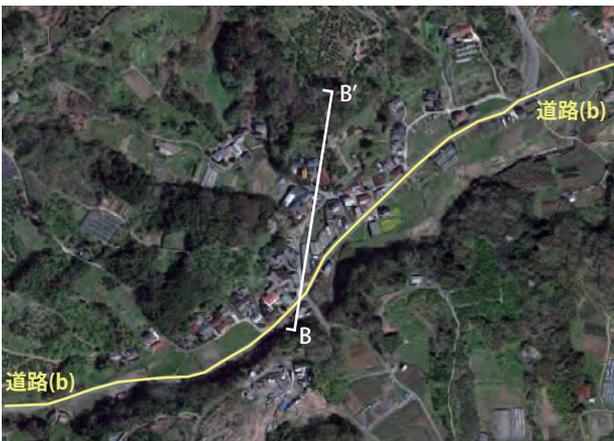


図4 明沢周辺図(筆者加筆) Google Mapsより

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

南部は相模湾に面し海岸沿いに東海道が走っている。東西を山に挟まれ、南北に中村川と塔台川が流れており、その間には県道709号線が走っている。中央を東西に小田原厚木道路と東海道新幹線が走っている。国府津は平安時代の相模国府の港であった場所である。比定地のすぐ東に当時の相模国二宮を司る川匂神社がある(註1)。

## 2) 実見によって得られた客観的情報

実見したのは、川匂神社周辺および山西(A)、国府津(B)、西部山間にある沼代の明沢(C)である(図1)。国府津では漁村のような集落形態は見られるものの、今回の調査だけでは千年村としての評価が難しかったため、〈山西〉と〈明沢〉について報告する。

### ・環境

〈山西〉は、川匂神社周辺の山(a)の斜面に沿う谷戸が複数個並んだ地形上にあり、開けた部分で中村川と接していた。〈明沢〉は、山の中に一部開けた平坦な谷戸があり、そこに集落を構えていた。

### ・集落構造

〈山西〉は、谷戸に畑へと転用された、棚田の名残が見られた。中腹に数軒をもって集落を構え、複数の谷戸をつなぐように道路が通っていた。川沿いのみ水田が残っており、中村川から水をひいているようであった。川の反対側の平野部は宅地開発がされていた。〈明沢〉は、山地に明神神社があり、「神社―畑―住居―水田―川」という明快なセットが見られた。谷底平野に向けて段々と下がっていく集落構造で、底に向かう程住居の軒数が増えていた。各段の境には石垣が多く用いられていた。

### ・共同体

〈山西〉は、聞き取り調査によって山(a)から中村川までの一帯が古くから川匂部落と呼ばれていることが分かった(註2)。〈明沢〉に関しては、本調査では見えてこなかった。

### ・その他の視点(交通など)

〈明沢〉では山地・集落を通り、東西の平野部をつなぐ道(b)があった。山を下る途中、道沿いに養蚕民家が数軒見られた。交通量が多かった。



図5 山西:谷戸の利用 撮影=福井



図6 明沢:高低差とそこに建つ石垣 撮影=鈴木(明)

註釈

1. 川勾神社は中郡二宮町山西に属する。磯長郷の比定地にも小田原市山西という地名があり、かつてはこれらを合わせてひとつの山西であったと推測できる。
2. 山西周辺には「二見」という姓が多く見られる。もともと、川勾神社発祥の際に初代の神主とともに二見の姓を持つ人がこの地にやってきたからだ、聞き取り調査により分かった。現在、川勾部落には二見姓が12.3軒ほどあり、初代神主から42代に渡り二見姓が続いているという事であった。
3. 「国土交通省 ハザードマップポータルサイト」より確認。  
URL: <http://disaportal.gsi.go.jp/> (2015.06.13閲覧)

【参考文献】

竹内理三ほか編『角川日本地名大辞典<14> 神奈川県』(角川書店, 1984)

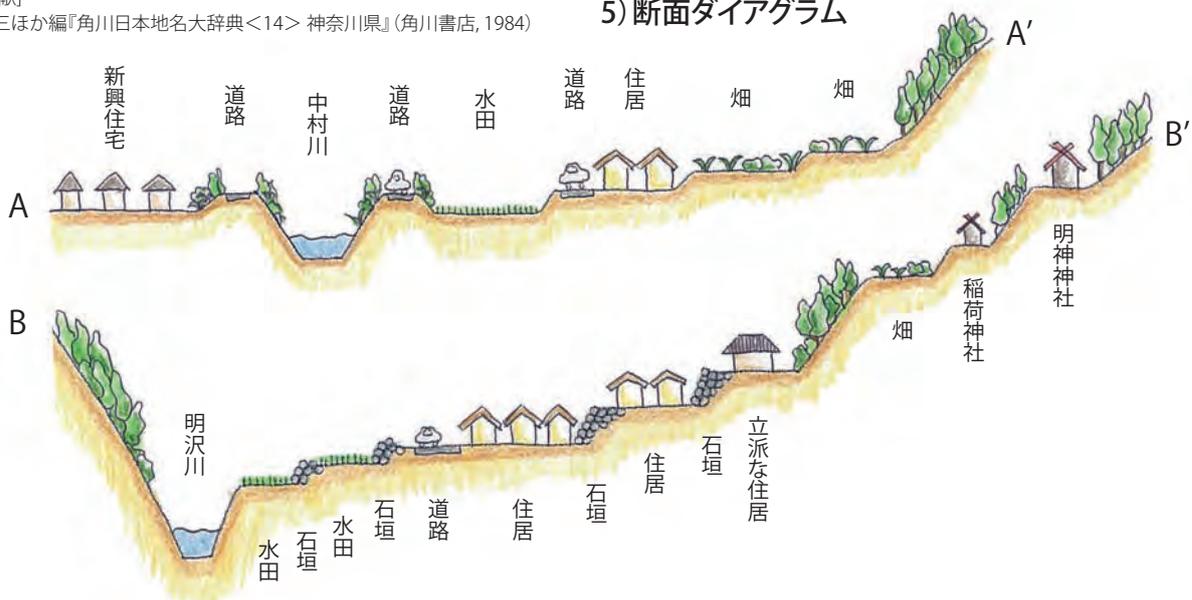


図7 断面ダイアグラム(筆者作成)

### 3) 考察

〈山西〉では、地形をうまく利用した生産を行っており、水田から畑への転用などは見られるが、古来より生産地は大きく変わっていないと思われる。川勾部落の出自の話より、一族的な共同体を形成していたことが想定出来るが、確かでない。また、谷戸ごとの関係性の追究など、更なる調査が必要である。

〈明沢〉は、オーソドックスな千年村の集落構造をしている。実見した情報から、大規模な開発はないものの、底の方で集落の拡大がなされたと考えられる。ハザードマップによると、明沢は、山地の中でも土砂災害危険域を500m程避けた安全圏に立地している(註3)。これは、千年村として評価に値する。また、道路(b)は、交通量が多く、道沿いに養蚕民家が見られたことから、古くから物資運搬の道として利用されていた可能性がある。共同体に関しては要調査。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 山西「谷戸村」

谷戸が連なる地形を利用し、持続してきた村である。一つの谷戸で完結せずに、複数の谷戸を跨いで集落を形成しているところに面白さを感じる。

#### 明沢「石積みの村」

石垣の設置には、相当な人力が必要である。もし、これらが一人で設置されたものではなく、集落の住人が力を合わせて作成したものであるなら、石垣を積むということは、共同体の現れなのかもしれない。

### 5) 断面ダイアグラム

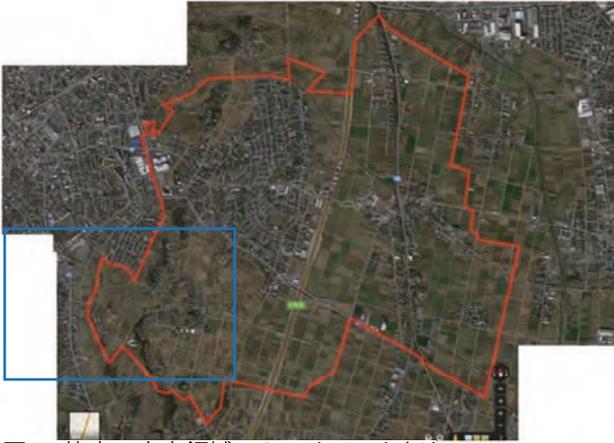


図1 比定の大字領域 Google Earthより

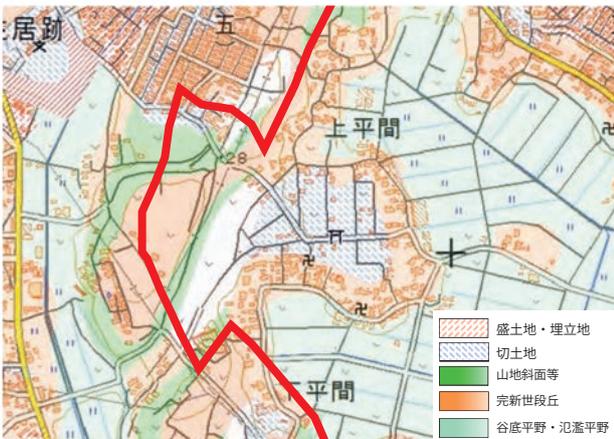


図2 土地利用図 国土地理院より



図3 迅速測図 農業環境技術研究所より



図4 航空写真(1970年) 国土地理院より

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

現在の伊勢原市沼目を中心とするあたりに比定され、伊勢原台地から相模平野にかけて位置したものと考えられる。ここでは渭部郷において、古い住宅立地と土地利用が維持されてきた上平間・下平間地域について記述する(図1青枠)。この地域は伊勢原台地の南東端に位置する。近世では上平間と下平間の入会の秣場があり、また村内を中原往還・大山道が通る。上平間の神明社が鎮社として祀られている。また、上平間と下平間の境界は集落を東西に伸びる道によって定められている。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

#### ・環境

この集落の中心は段丘、西部は氾濫平野になっている。(図2)集落の中心である最も高い段丘面は古くに切土されており、鎮社である神明社と集落の墓を所有する隆安寺が位置する。その周囲は畑地に利用されており、そこから斜面林、住宅、道、住宅又は田畑の順に低地に向かって広がっている。そしてこの土地利用は明治期から維持されている(図3)。

#### ・集落構造

集落は段丘に合わせて立地しているため帯状に曲がりくねった配置をしている(図2)。また傾斜に立地するために、盛り土や石積みを行い地盤を平坦にしている(図5)。

多くの住宅は石垣と屋敷林を持ち、大きく立派なものが多い。稀に新しい住宅も見られたが古い区画は残されている。また、赤いトタンの屋根が多く見られる。

#### ・共同体

図4の地点Aに段丘側から湧き出る清水社という泉がある(図6)。地元住民からの聞き取りによると、この泉は決して枯れることがなく、古くから生活用水として、日照りにより用水が枯喝した時には水源として利用されていたそうである。

また毎年7月13日には近隣の住民が集まり、この清水社を清掃し比々多神社の神主にお祓いをしてもらうことで、弁天や水神を清め洗う風習がある。



図5 階段上に立地する住宅 撮影＝永井朝樹



図6 清水社 撮影＝高野泰幹



図7 信じるものは救われる 撮影＝高野泰幹

### 3) 考察

涓部郷は災害に対して非常に有効な土地利用を実践している。地盤の安定している段丘面に住宅が立地し、地盤が不安定で水害や地震の被害を受けやすい氾濫平野は水田や畑地として利用されている。これにより生活の場と生産の場がはっきりと区分されている。

また神社と寺院を標高の高い位置に置き、周囲に住宅が立地していることから、神聖な施設を崇拝する思想が空間的に表れていることが印象的である。

さらに古来より清水社から水源を確保することができ下平間側の農地では安定して農作物を得ることができる点が、この集落の持続性の特徴であると考えられる。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「枯れない村」

神聖な施設に寄り添うように住宅が立地した結果、段丘上に集中し災害を免れるという利得によって持続してきた郷である。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 参考文献

- ・竹内理三他編『角川日本地名大辞典14 神奈川県』角川書店、1991年
  - ・相模国神社祭礼
- <http://eda.myhome.cx/taiko-2008/private/top.html> (2015.6.14閲覧)

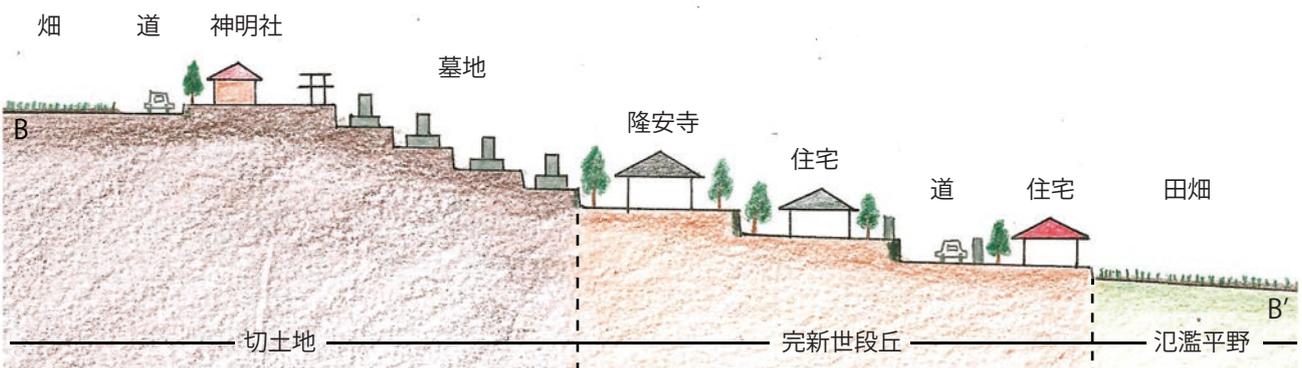


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域



図2 微高地が感じられる自動車販売店裏手のようす



図3 昔ながらの集落のものと思われる住宅



図4 ツインシティ計画反対の立て看板

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

相模平野のほぼ中央、相模川の右岸に位置する。相模川のほとりを示す大川辺が転じて大上と呼ばれるようになったという説がある。平安時代に書かれた「三代実録」によると、貞観元年(859年)に大神朝臣田村麻呂が来村し、同時に大神村と名付けたとあるが、確証は無い。

比定地内には東海道新幹線と国道129号線が通り、相模川流域の微高地を中心に宅地化が進んでいる。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

#### ・環境

谷地の盛り土による影響で、今は微高地を感じられる場所は少なくなっており、129号線の付近と畑地の境目で40cmほどのわずかなレベルの差が見られる程度である。129号線以西には今も比較的多くの田畑が残存している他、変電所、工場地といった工業施設も見られる。

#### ・集落構造

迅速測図にも見られる神社周辺の古い集落地帯には、現在も昔ながらの広い住宅が介在する。石橋姓が多く、1戸あたりの敷地面積は1反ほどもある。住宅地には新しい家も多い。広い道から分岐した細道に面するように間口を設けているため、新しい住宅は間口が狭い傾向にある。

#### ・共同体

この地域では寄木神社が最も古く、大きな神社と思われる。寺社周辺の古い集落の住民は武士の家系であり、400年程前から農業を続けている。この村は「寺」「農業」「武士」の3つの要素が古くから相互に深く関わり合いながら共同体として機能している。

#### ・その他の視点(交通等)

微高地を辿るように古い道が通っており、現在はバス通りになっている。比定地内には東海道新幹線の駅は存在しないが、129号線沿いの畑地を商業施設化し、駅を誘致するツインシティ計画が進められている。ただしこの計画に対しては一部の住民からの反対の声が見られる。



図5 寄木神社



図6 変電所と畑のようす



図7 戦う千年村(赤いのぼりは計画を反対するもの)

### 3) 考察

この千年村は相模川流域の他の千年村の中でも面積としてはあまり大きくない村でありながら、歴史ある寺社、農業用地と工業用地と住宅用地、国道と新幹線、ツインシティ計画といった多種多様な要素が含まれていた。しかしそれらの要素が混沌となることなく、豪快にまとめあげられている印象を受けた。同時に、古くから住む住民の圧倒的な存在感が印象的だった。住宅地の中心地に位置する古い集落が、新しい住宅の間で埋もれることなく、今もなお村の核となっているのかもしれない。一方で、ツインシティ計画に対しては大きな関心が無く、商業施設が建つことに強い反対はしていない住民も多いように感じられ、住民の中でも開発に対する意識の違いがあると思われる。一見のぼりや立て看板により反対の声の方が強いように感じられるが、反対する住民は一部の地主で、人数はあまり多くないと考えられる。また、住宅地も新幹線と国道により新旧の宅地がはっきり分かれているようだ。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「戦う千年村」

この村に400年以上住み続ける武士の家系と云われる住民たち。彼らの菩提寺の宗派には浄土宗や日蓮宗が多く見受けられ、かつては百姓一揆にも関わっていたのではないだろうか。加えて現在もツインシティ計画に対して強い反対の声を上げる住民たちがいる。この村は古くから大きな勢力や権力に屈することなく戦ってきた村といえるのでないだろうか。

### 5) 断面ダイアグラム

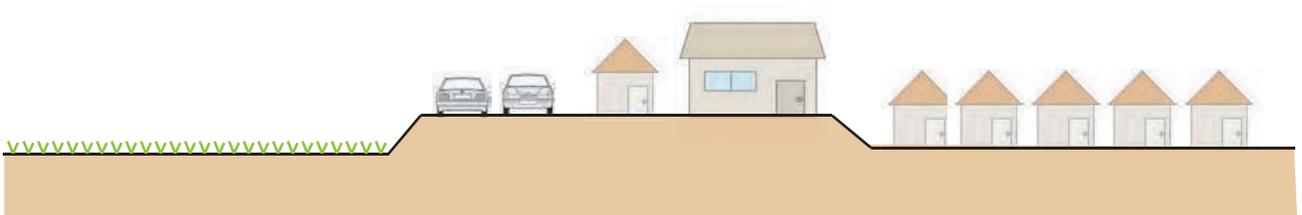


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域

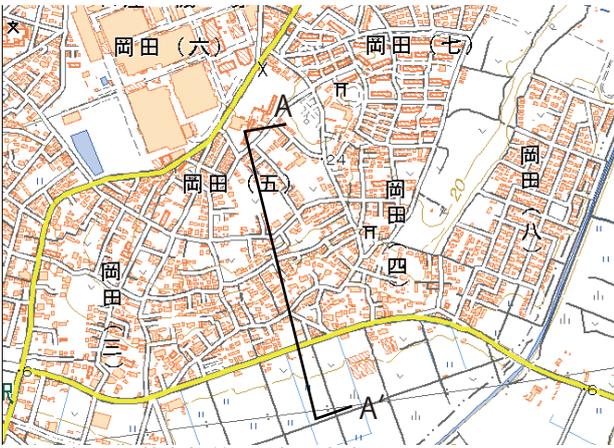


図2 地形図(著者加筆) 地理院地図より



図3 寒川神社の参道



図4 宅地に残る村構造

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

高座郡寒川郷は現在の神奈川県寒川町に比定されている。相模平野南東部、相模川下流東岸に位置し、郷のほぼ中心には寒川神社が存在する。おおむね平野だが段丘も見られる。

約1500年の歴史を持つ寒川神社は相模国一之宮と称され、古くから八方除の守護神として信仰されている。1kmにおよぶ参道が境内から南へ伸びる様は見どころである。

かつては純農村であったが、昭和36年頃より工業立地が始まり、それ以降工業団地の造成や宅地化が進み、東京や横浜に通勤するサラリーマンのベッドタウンとなっている。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

#### ・環境

寒川神社は境内の神社林がクロマツ、クスノキを主体とした珍しい植栽であり、参道も所々桜が植えられつつもクロマツ並木で構成されているのが特徴的だった。

岡田の地域には宅地化されながらも点在する畑が見られ、一之宮の地域には幅1mほどの水量がしっかりと水路が確認できた。

#### ・集落構造

岡田はぱっと見、宅地化が進み千年村っぽくはないが、中に入ると丘のへのりの古い道路とその上のあいだで宅地の利用に差があった。斜面の元入会地にひな壇造成開発がされつつも村の基本構造が残っているのが伺えた。

一之宮は迅速図から現存する集落であり、建物の建て替えがされつつも水路や生垣を始めとするインフラがきれいに残っている。

#### ・共同体

古くから存在する寒川神社が領域の中心部に位置していることから、共同体に関わっている可能性が高いと考えられる。今後検討する必要がある。



図5 点在したお墓



図6 車庫に転換した納屋を持つ農家屋



図7 守護神が見守るしたたかな村

### 3) 考察

高座郡寒川郷は中心に位置する寒川神社、段丘が興味深い岡田を主体に調査を進めた。

寒川神社にはお宮参りで赤ちゃんを連れた家族連れが多く参拝していた。また、境内の絵馬を見たところ、健康祈願や子供の成長など家族の願い事をしている人が多く、寒川神社が祀っている二神が人々の守護神として信仰され成り立っている様子が伺えた。

岡田では宅地化が進んでいたが、段丘を歩けば歩くほど村の跡が伺えた。住宅の中にぼつりぼつりと空き地で畑やお墓が点在し、家の区画に混じってモザイク状に残っているのが、元入会地だったと考えられる要素になった。区画が大きく丘のへりにあったのは昔の農家であり、納屋を車庫に転換利用していたりと家の構造が生き延びた農地を表していた。土地は売り渡って家も建て替わっているが、しっかりとした地面のリテラシーが成されていることが確認できた。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

「守護神が見守るしたたかな村」

寒川町を代表する寒川神社の二神の加護を受け、時代の変化に苛まれながらも基本構造は変えずに地形を残しているところにしたたかさを感じた。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

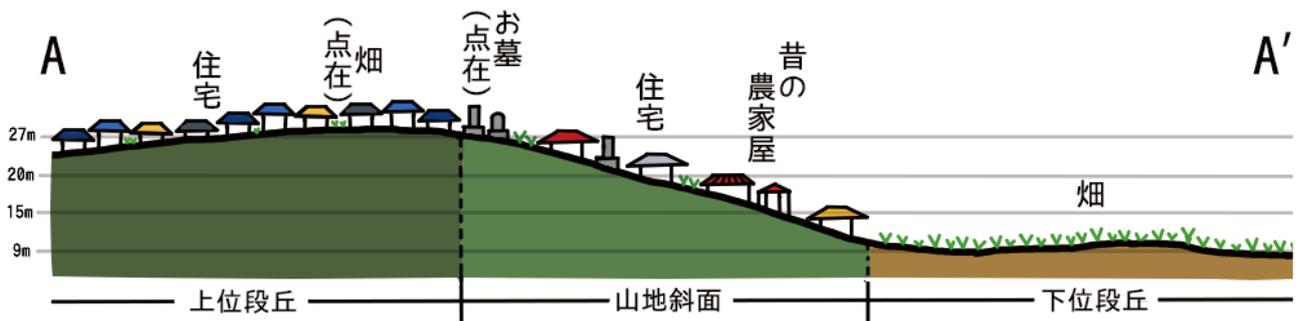


図8 断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域(筆者加筆) GoogleMapより



図2 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より

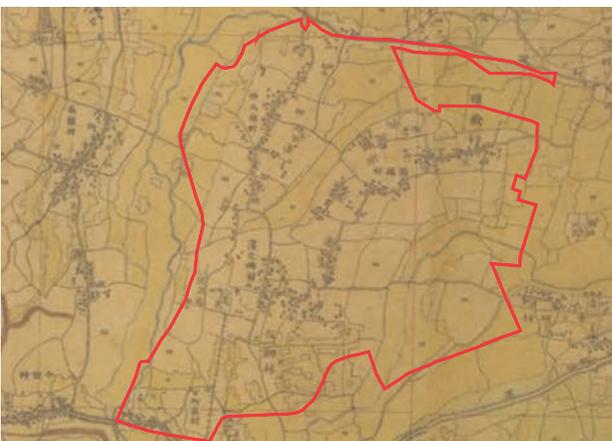


図3 迅速測図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 宅地開発の進む元谷戸(筆者撮影)

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

高座郡河会郷は現在の茅ヶ崎市西久保・円蔵・矢畑・浜之郷・下町屋・茅ヶ崎に比定されている。土地条件図から、円蔵の北西部に元は谷戸であった場所(図2,青色楕円部)を盛土した区域がみうけられる。盛土した区域は西久保に接するように存在しており現在は完全に埋められている。迅速測図からはその谷戸を挟んで集落が存在していたことが確認できる。

浜之郷の鶴嶺八幡宮は長元3年(1030年)に源氏が関東に進出する際に創建されたもので、国道1号線から松並木の参道が続いている。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

迅速測図に集落が確認できる西久保・円蔵・浜之郷を重点的にみてまわった。

#### ・環境

元谷戸であった場所は水田であった名残から中央部に暗渠化された水路が通っている。この暗渠は土地の勾配にそって東から西へと流れ、最終的に小出川に注ぎ込んでいる。

一方、新湘南バイパスは水田の中に用水路に沿って通されているが、周りへの直接的な影響はみられない。

#### ・集落構造

西久保はジャンクション沿いに小学校、介護施設、コミュニティーセンターなどの公共施設が建設されている。これらの施設は残存する水田に囲まれ、一帯はモザイク状の土地利用となっている。

円蔵の元谷戸にあたる場所は宅地開発が進んでいる。細分化された土地にいっぱいの家屋が建てられており、場所によってはその家屋が更新され、さらに細分化された土地利用が進行している様子が伺えた。

#### ・共同体

西久保の東部自然堤防と平野の境に寺の墓が見受けられた。墓石には時間によって風化したとみられるものも多数残存したことから古い集落であることが分かる。また町中に散らばるように独立していくつかの墓が見られた。



図5 新湘南バイパスと用水(岸本撮影)



図6 点在する墓(中谷撮影)



図7 埋められた谷戸と暗渠(おぎない村) 筆者撮影

### 3) 考察

元谷戸であった場所は円蔵地区のものであるとみられ、円蔵側の集落がその土地を短冊状に分割しつつ宅地開発を進めていることが推測される。その宅地は細分化を重ねながら世帯数を増やしていることから、円蔵の土地所有者は土地の売買もしくは賃貸をもって生計を立てていることと予想される。一方で人口増加に伴い必要となる公共施設は西久保の海岸平野に集中して見られることから、小字ごとの開発という視点によらず、他の字とも相互補完するように計画がなされている様子が見える。

自然堤防の上に位置する鶴嶺小学校が1947年創立なのに対し、1998年創立の浜之郷小学校は水田であった場所に位置する。宅地開発に伴う人口増加により学校の新設が余儀なくされ、大きな敷地が取れる水田が整備・開発されたものと捉えられる。

また市中に散見される墓は屋敷墓であって、個人宅に併設されていないものもあることから、それが所有者の敷地縮小した際に取り残されたものではないかと考えられる。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「おぎない村」

土地の転用には、その土地に適したものとそうでないものがある。河会郷ではそれぞれの集落が適したものを補い合うようにして転用を進めている。西久保では公共施設のような広範囲の施設、河川から離れた円蔵では住宅の建設が進む。

#### 参考文献

竹中理三他編『角川日本地名大辞典14 神奈川県』  
角川書店、1994年

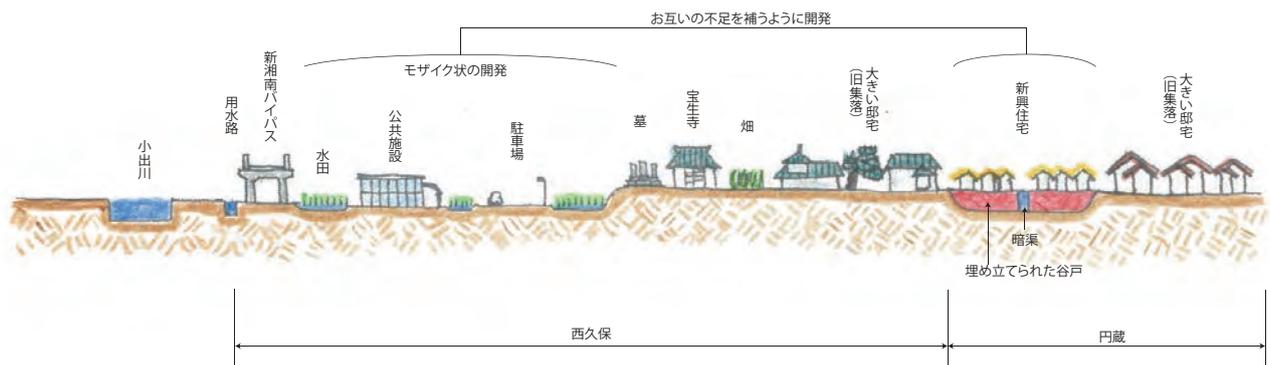


図8 a-a'断面ダイアグラム



図1 比定の大字領域



図2 迅速測図

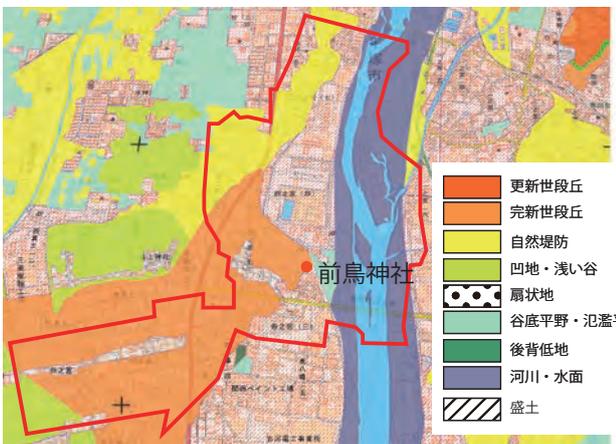


図3 土地条件図



図4 集落に部分的に共通する石垣 撮影者＝高野

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

大住郡前取郷は平塚市四之宮に比定されている。本領域は相模川の右岸に位置している。土地条件図からわかるように迅速測図に見られる集落および前鳥神社は更新世段丘に位置し、下水道公社を含めた工場群は盛土に位置している。このように領域全体で宅地化、工場化が進行している。また前鳥神社の創建年代は奈良時代以前とされている。(1)

### 2) 実見によって得られた客観的情報

#### ・環境

現在は生産地が見受けられなかった。しかし、ヒアリングから、かつては相模川の恩恵を受けて麦、米、芋などの生産物が収穫されていたことが分かった。(2) 更新世段丘と盛土の高低差を確認したところ、現在でも盛り土は低い位置にあることが実見された。

#### ・集落構造

迅速測図に見受けられる前鳥神社の西の存在する集落を見て回ったが古くからの景観が残っておらず、部分的に古い石垣が残存しているだけであった。(図4)

#### ・共同体(2)

前鳥神社では主に大規模な相模国府祭、作物を敬う神事である麦振舞神事が継続的に行われている。神事の呼びかけを積極的にし、新しく建てられたマンションの住民にも声をかけている。神社の評価は江戸時代と明治時代では「延喜式」神名帳の発見により変わっている。そのため明治以降は式内社であることを強調するようになった。

#### ・その他の視点(交通等)

前鳥神社参道の位置が変わっていることがわかった。古い参道(図5)は神社より西に伸びているが、明治以降に南へ伸びた参道(図6)へと更新されている。また、新しい参道は県道と繋がっている。



図5 旧参道 撮影者=高野



図6 県道より新参道を見る 撮影者=高野



図7 強い軸を持つ新参道(象徴をアダプトする千年神社) 撮影者=高野

### 3) 考察

宅地化が進み、迅速測図で見られた集落もその波に押されているような印象があった。前鳥神社のように大きい力を持ち、地域に影響を与えられる神社があると集落構造、環境の要素は見えづらくなっている。相模国府祭の各神社においてもその傾向があるといえる。

また、近世と近代で神社の評価が変化していることと新しい参道が明治以降に作られていることから時代に合わせて持続してきた神社といえる。さらに、新しい参道は県道と繋がるように通している様子や神事では血縁関係に拘らず神社との関係を築くために積極的に招待していることは、固執せず柔軟な神社の姿勢がある。その姿勢は持続性を高める要因であると考えられる。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「象徴をアダプトする千年神社」

前鳥神社が集落構造や環境の要素部分までも担保してしまう神社であることが認められるから。

注釈

(1)『相模國六社御朱印めぐり 御朱印帳』前鳥神社は「延喜式」神名帳に記載されている。また、寒川神社、川勾神社、比々多神社、前鳥神社、平塚八幡宮、六所神社の6つの神社で大化の改新以後継続的に行われている国府祭、相模国府祭がある。

(2)前鳥神社氏子さんからの聞き取り

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

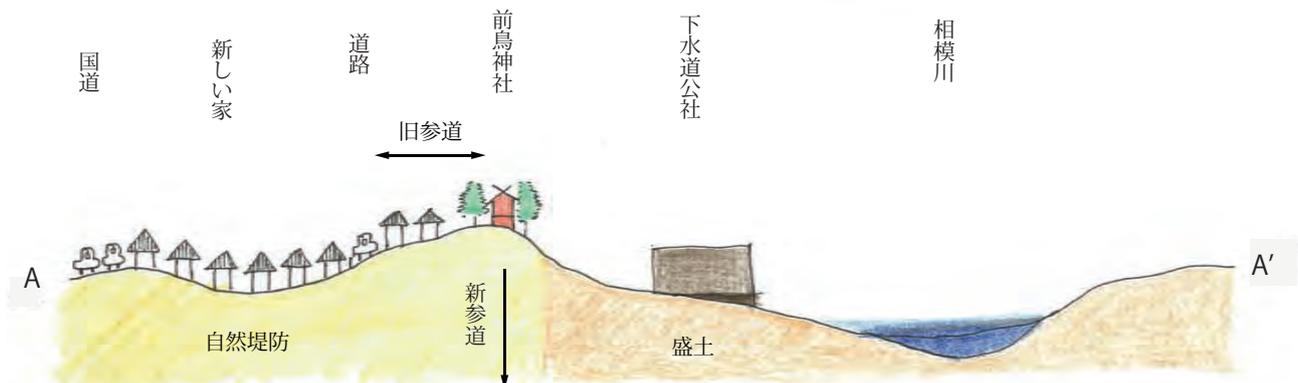


図8 断面ダイアグラム

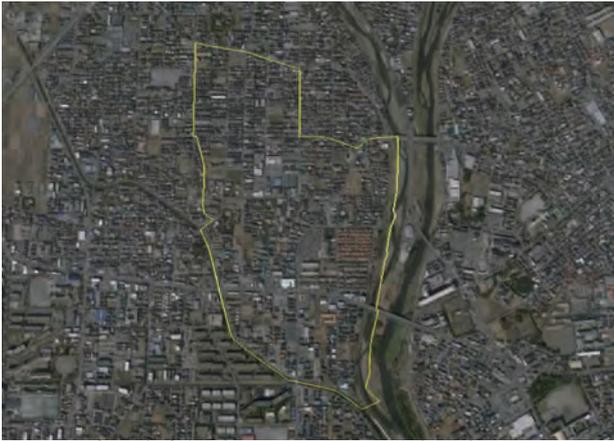


図1 比定の大字領域 Google Earth(航空写真)より

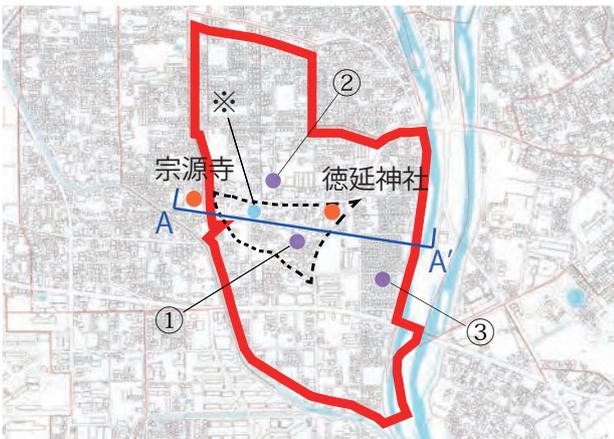


図2 主要寺社と古い集落部(基盤地図より、作成者加筆)

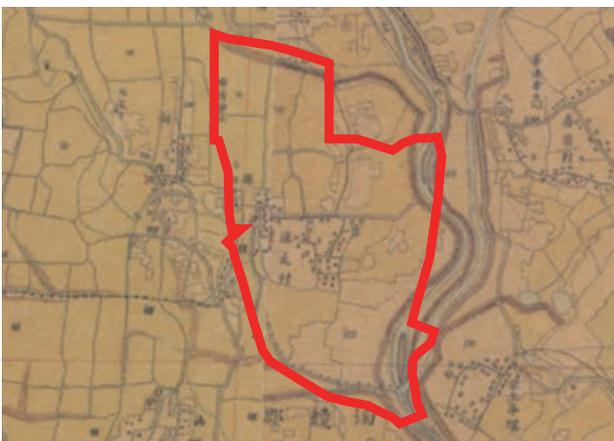


図3 迅速測図(作成者加筆)

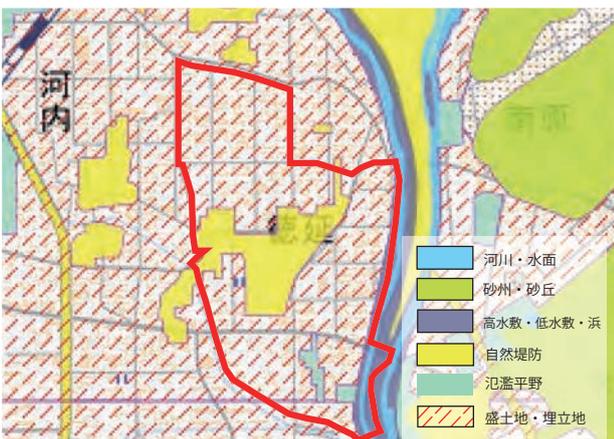


図4 土地条件図(作成者加筆)

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

平塚市徳延の東域には金目川(渋田川との合流地点以降は花水川と呼ばれる)が流れる。迅速測図と航空写真によると、昔からの集落は中央付近の自然堤防上に集中し、その他は田畑で占められていたことがわかる。盛土されたことによって現在は全域が平地である。

## 2) 実見によって得られた客観的情報

### ・環境

盛土されたために全域はほぼ平地となっているが、川沿いの旧氾濫原は少し低くなっている。

古くからの集落が残る地域は道が湾曲している一方、かつて田畑だった地域はその地割に沿ってグリッド状に宅地化されている。

### ・集落構造

古い屋敷は周囲に生け垣あるいはブロック塀を巡らせている。高さは人間の身長ほどで、庭木も多く壁のようになっている。道から住宅の様子は伺いにくくなっており、それぞれの土地の境界がはっきりと主張されている。

### ・共同体

古い集落部分には同姓の住宅が複数見られた(原田、白井など)。住民の方への聞き込みでは、中心部に大きな屋敷を持つのは7-8代以上続いた地主の家系の人々であるという。

その中でも大きい屋敷を持つ白井姓は、不動産や石材店を営んでおり、白井不動産の看板は古い集落の外側で度々見られた。

### ・その他の視点(交通等)

現在、生産地は残存せず小さな田畑があるものの使われていなかった。しかし、周縁部の開発された敷地の合間には農業に利用されていたであろう水路の跡がはっきりと見られた。

古い集落の一番外の一角に、開発事業計画の看板が掲げられた屋敷(成瀬宅)があった。掲示によれば、1つの敷地が8区画に分割される予定である。

南西には横浜ゴムの工場寮や、100戸ほどの量産型住宅が一面に広がっている。



図5 生け垣を持つ古い屋敷(①) 撮影=高野



図6 水路の跡(②) 撮影=太田



図7 スペイン風新興住宅地(③) 撮影=神保

### 3) 考察

白井不動産、成瀬宅の例や、神社の神主への聞き込みからも、この集落は所有する土地を売り貸しすることで収入を得ているということがわかった。

元が大きい敷地に建てられた屋敷である場合は、クルドサック(袋小路状の路地を造って宅地割りを行うこと)のような方法で中を複数に分割して住宅地としている例が多い。一方、土地所有者によって元々生産地としてグリッド状に整理された土地は、そのままの地割で住宅地に転用されている。インフラが整備されていることも要因となり、逆にその後の戸建て住宅開発を誘発していると考えられる。

成瀬宅の例を見ると、屋敷を保持する跡継ぎがいなくなったのか、中央部にも分割住宅としての開発が進行していることがわかる。この村は、完全な宅地化へと向かう途中段階であり、千年村が都市化しながら持続していく一例であると言えるだろう。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「不動産千年村」

田畑から量産型の住宅地へと用途は変化しているが、土地を所有することで収入を得るというシステムは保たれている。土地の所有者にとっては水田も住宅も同じであり、それぞれの時代で必要とされるものを生み出しているにすぎないと言える。

古い集落形体がそのまま残されてはいないものの、「不動産千年村」としてのシステムが良質に機能し持続している好例であろう。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

#### 参考文献

『角川日本地名大辞典 14 神奈川県』

(角川書店、1984)

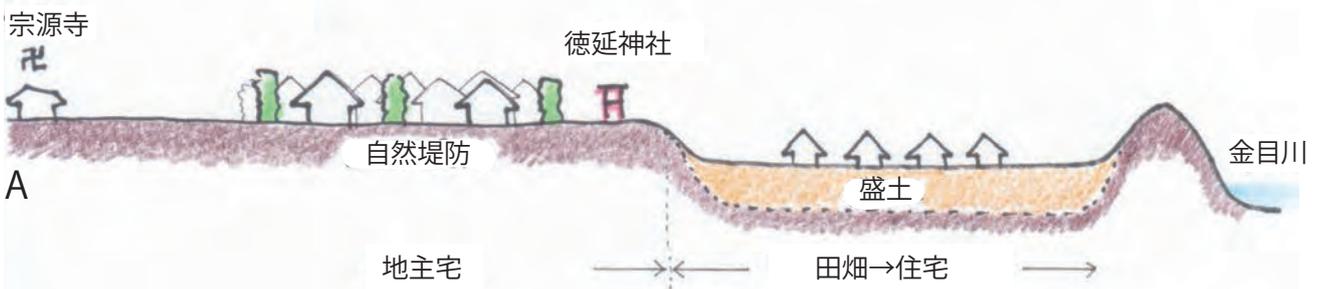


図8 断面ダイアグラム(AA' 断面)



図1 比定の大字領域

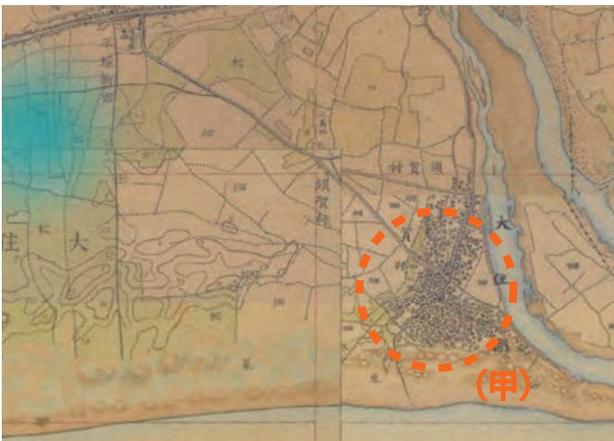


図2 迅速測図



図3 民家における屋敷神(永井撮影)



図4 土地条件図

## 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

「地理志科」により当郷を現在の平塚日の海浜寄りの地帯に比定していることと、迅速測図において現在の千石河岸、札場町に集落があったことが確認できる。また、千石河岸と札場町を含む周辺一帯は旧須賀村として存在していたほか、古くから「<sup>すがみ</sup> <sup>なと須賀浜</sup>」と物資の集散地になっていたことより漁港として栄えていた面がある。現在も平塚漁港や漁業関係者に親しまれている三嶋神社、港稲荷神社があり、漁業が重要な役割を担っている。三嶋神社の祭礼では年に一度神輿が海辺に巡幸する浜降りが行われている。

## 2) 実見によって得られた客観的情報

### ・環境

三嶋神社から港稲荷神社にむけた県道沿いは宅地開発によって整備されている。平塚漁港周辺は微高地になっており、バス停「札の辻」(図5参照)のあたりがもっとも高くなっている。また、河口は2000年代に護岸工事が行われた。

### ・集落構造

微高地には古くから住み続けている人が多く、もっとも高い「札の辻」は商店が多く、少し下がったところに民家、寺などが密集していると思受けられる。迅速測図で確認できる集落(図2-甲部)は小田原北条氏による区画整理によって造成されたもので、その道路の形状は現在においてもあまり変化していない。

### ・共同体

札の辻には米屋、菓子屋、乾物屋と、工務店などの商店がいくつか存在している。長樂寺周辺は古いと思われる民家が密集しており、図5-甲部に入ると屋敷神がある民家が数多くみられる。県道沿いの比較的新しい共同体と札の辻周辺の古くからの共同体が干渉合いながら存在している。

### ・その他の視点(交通等)

河口の西側に住宅が密集していたが、国道129号(図5参照)が南北に伸びるとともに宅地開発が進んだ。そのため、田畑は宅地となり現在の生産は漁業が中心となっている。一方平塚漁港の周囲にはキャンプ場利用者のためのスロープが設けられ、漁業関係者と外部の人間が分別されている。

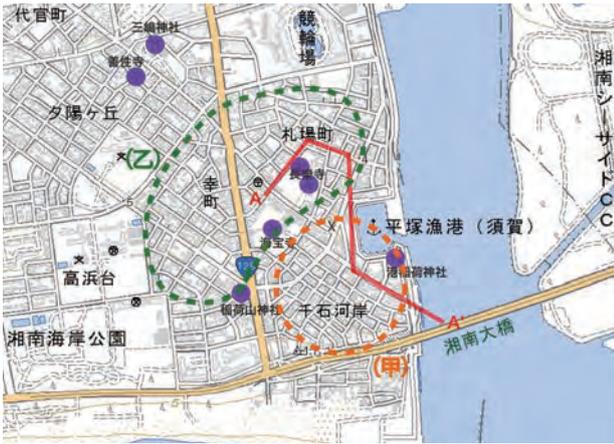


図5 基盤地図および主要な寺社(筆者加筆)



図6 平塚漁港とスロープ(筆者撮影)



図7 微高地(筆者撮影)

### 3) 考察

微高地を中心とした集落(図5-甲部)の区画が現在も残っており、周辺の区画(図5-乙部)とずれが生じている。古くから須賀湊として漁業が続いていることや三嶋神社の浜降りの祭祀などから漁業を生産の拠り所に行っていることがわかる。港稲荷神社と長樂寺には含まれた地域は微高地になっており、自然堤防のような役割を果たしていたと考えられる。とくに長樂寺からバス停「札の辻」までは高低差が激しく、図5甲部に入ると屋敷神をもつ民家が数多く見られる。「札の辻」周辺にある商店は聞き込みによると100年以上は続いているという。また、「札の辻」前にある工務店は、海宝寺にある墓地や神社境内の奉納金芳名額、玉垣への奉納者名と関連があると見られ、この地域の宗教的施設を経済的に支えているという面から共同体をうかがうことができる。一方で国道134号線から南側は北側の地域とは異なった様相をしていることや、平塚漁港とキャンプ場がスロープによって空間的に明確に仕切られていることから、開発が進んでいく中で共同体の区分がなされたことも考えられる。

### 4) 集落を象徴する風景と名前

#### 「漁港千年村」

漁業のみではなく、経営者と宗教施設との関わりや何代もつづく商店などによる共同体がうかがえることから「漁村」ではなく「漁港」の性質が強いと考えた。

### 5) 断面ダイアグラム

(図版参照)

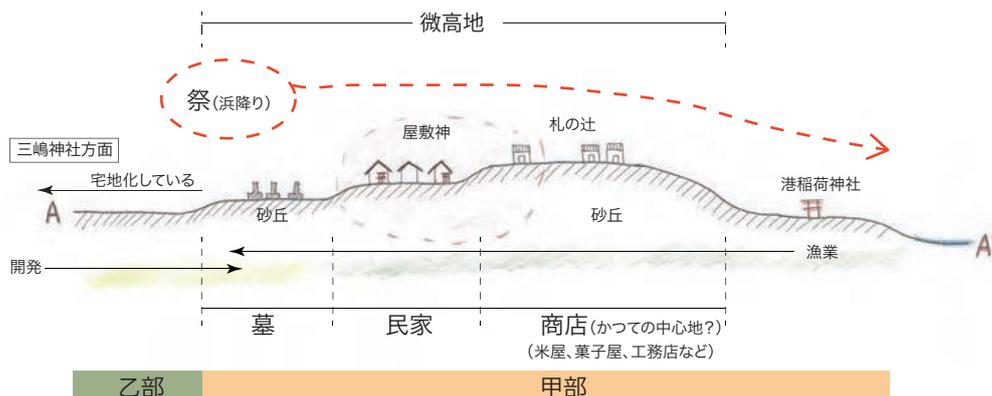


図8 A-A断面ダイアグラム

# 現千年村地域の持続の評価に向けて

-大住郡大上郷／神奈川県平塚市大神地区を検討例として-

早稲田大学理工学学術院 創造理工学部建築学科 中谷礼仁

2014年度の利根川流域疾走調査報告書では、佐々木葉の指摘を踏まえ、現在の千年村の具体的な評価方法を提案した。その後2014年3月7、8日にわたって開かれた関東班・関西班合同会議では、地域のキャラクターについてそれを客観的な「ことば」として提起することの重要性が確認された。2015年度の調査方法は、この方針に従って行われた。以下に要約する。

- 1 千年村と仮定された地域の持続を証する考古学的、文献学的証左の獲得
- 2 生産基盤を含むセットとして大字領域を重視し、同地域における環境－産業・交通－共同体の三位一体(から発生する集落構造)の特性を普遍的キャラクターとして抽出
- 3 そのキャラクターを基準として、現在の地域のセットがどのように保持されているかを検討し、それによって同地域の千年村的評価をおこなう。
- 4 今後その評価方法を簡素化し、必要な場合、同地域の持続的地域づくりの提案・活動に参画(詳細調査以降)

本論はこの流れに従って、今回の相模川流域疾走調査で訪問(2015年5月31日したB-02大住郡大上郷／神奈川県平塚市大神地区)を例にして、大規模再開発構想「ツインシティ」が検討されている同地域の千年的持続性の評価を試みる。なおこの評価はあくまでも私見であり、千年村運動体としての提言ではないことを明記しておきたい。また実際の評価にあたっては、同地域のさらなる聞き取り調査などを進める必要があることも明らかである。今回は千年村評価の性格やその限界性、他の評価方法との関連性に重きを置いて検討してみたのである。

## 1.地区が千年村を外れるとき

対象地区が千年村から外れるのは、上記の三位一体が、構造とは呼べないまでに弱まった時である。その閾を千年村持続の可否としても流用できる。これについては環境、集落構造、共同体の各要素に応じて示唆することが可能である。

- ・環境の前提(土地形質)は保持されているか
- ・現在の共同体に過去の活動との連続性が存在しているか
- ・交通・産業はどのように変化したか
- ・集落構造はどのように残存、開発(縮退)されているか

## 2.相模川流域千年村のキャラクター (川沿いの歴史的開発と私的所有)



相模川、高座郡の風景「新編相模国風土記稿」より  
出典 国立図書館デジタルライブラリ

大神地区周辺は環境的には付近のB-04高座郡寒川、B-05高座郡河会郷などと性格を共通し相模川の縁部に展開している微高地上の村落(高座)である。そこを起点として、川周辺の平地が徐々に田地として開発された。

交通は古代より、資料としては近世初期から判明する<sup>1</sup>山から海にいたる南北の水運を利用した物流交通軸とそれを横断する東海道を代表する東西の人的、経済的交通網が存在していた。さらに古代においては、高麗山という地区の存在、神奈川の語源を「韓川」と言う説<sup>2</sup>もあり、特に沿岸部を起点とした渡来人による初期開発も推測される。

大神地区の共同体について、二例の苗植え中の人物群に聞き取りを試みた。一方にあっては自らの出自について回答を得た。それによると、先祖はもともと武家出身であり、菩提寺の正安寺(浄土宗)に過去帳が伝わるという。これを聞き取り調査とするには不

<sup>1</sup> [http://www.hirahaku.jp/web\\_yomimono/hirareki/hirareki22.html](http://www.hirahaku.jp/web_yomimono/hirareki/hirareki22.html)

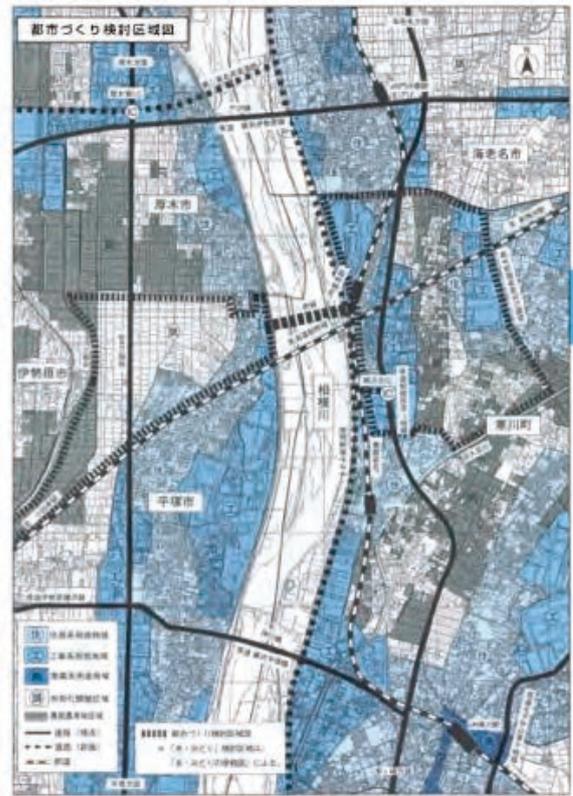
<sup>2</sup> <http://www.ne.jp/asahi/davinci/code/history/kanagawa/index1.html>

十分であるが、住民と寺との関係についてヒントを得た。

大神地区には正安寺の他に、眞芳寺(曹洞宗、天文二年(1533)小田原北条氏の氏族という)、隆盛寺(日蓮宗、創建不詳)、般若院(古義真言宗、須賀村長楽寺末、創建不詳、元和四(1619)卒の記録あり)、浄安寺(曹洞宗、本尊正観音、開山萬嶺祝、寛永十一年(1635)卒の記録あり)<sup>3</sup>がある。寺院密集地であり、その多くが戦国時代から近世初期に成立している。また新編相模国風土記稿(1841)によれば、同地は永禄四年(1561)上杉輝虎、十二年武田信玄等、小田原発向の時、共に陣所となったという指摘をあわせ、聞き取りとの関連を考えると、これらは近世初期における同地の水田開拓と武士階級も交えた新住民の度重なる流入による層的な共同体の形成を被った可能性がある。それら幾たびかの新住民流入による開発と寺院進展の関係は深いと思われる。なぜなら寺院は神社とは異なり、人の死を扱う機能を担うからである。なお神社は寄木神社があり、微高地の最も古い場所に建てられたと想定されるが、その活動は今回の実見においてその詳細は不明であった。とりあえず大神地区においては現世宗教としての仏教の役割と共同体の関係に注目したい。

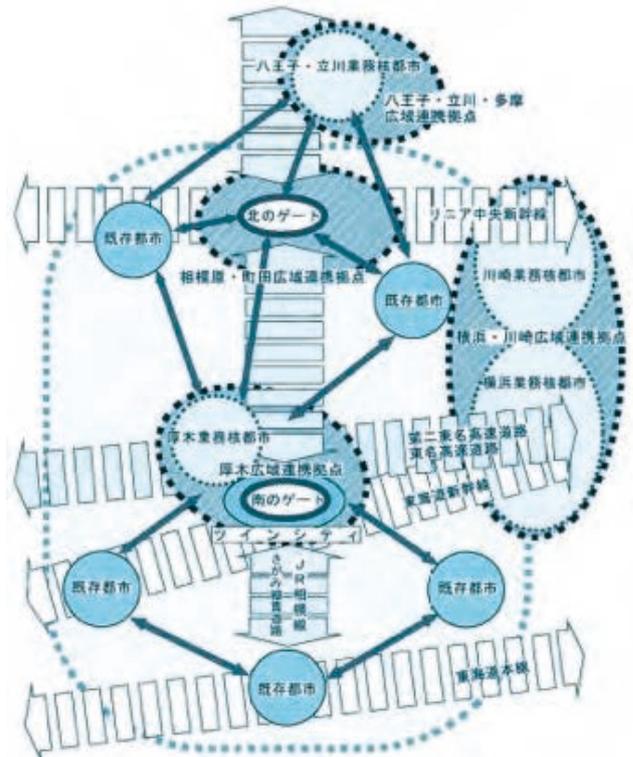
集落は明瞭に微高地上に展開している。微高地は第1種住宅地域に用途指定されている。さらに川側を工業用地域として産業化させ、また集落の西側には1963年に指定された大神地区を南北に通る国道129号線が走る。同国道沿い(後述)は準工業地帯の用途指定がなされており、大型店舗の出店も散見される。それ以西の水田地域は市街地調整区域となっている<sup>4</sup>。集落内の家々は都市近郊のため建て替わっていることも多いが、新規都市型住民を迎えるミニ開発の形跡は少ない。要は近世以来の共同体が継続して居住の中心を占めていると推察できる。

以上を要するに同地区の千年村的性格として、戦国時代の複数の戦いを象徴とし、各時代の産業・交



「都市づくり検討骨格図」

相模川を挟んで西側が大神地区。水色が旧街道筋の住居地域。北東から南西に向かって新幹線が通る。国道129号線沿いは市街地調整区域と準工業地域  
出典 <http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f6601/p19759.html>



「ネットワーク型都市形成の概念図」

出典 <http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f6601/p19759.html>

<sup>3</sup> 寺院の情報については、実地見聞と新編相模国風土記稿を元にした以下URLを参照。  
<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Renge/1083/>

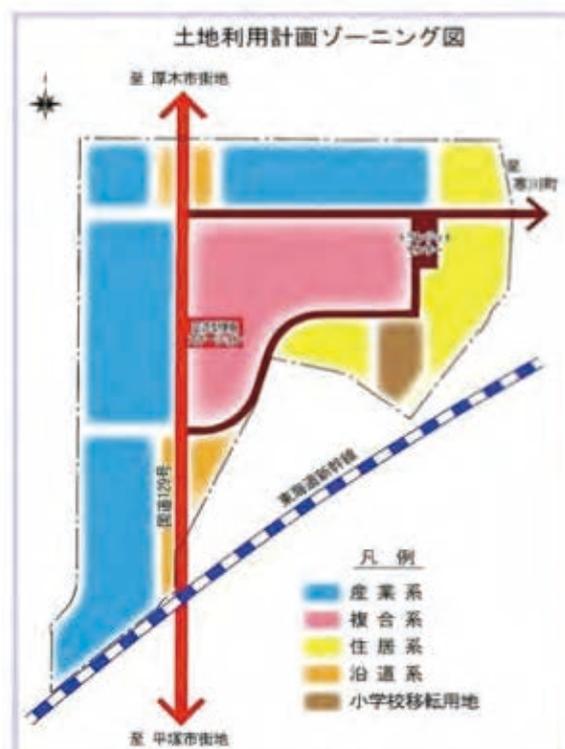
<sup>4</sup> 平塚都市計画総括図による

通の変化に伴う開発とそこに住みついた人々の強固な土地所有意識が現状の用途地域においても現れている点が特徴である。その意味では同地区の共同体的歴史が集落構造上の先行形態として温存され、持続してきたと考えることができる。

### 3. ツインシティ構想について

しかるに現在同地域は大規模開発構想をめぐって関係する地権者、地元民によっておおきく揺れ動いている。1997年、東海道新幹線の新駅(相模新駅)を寒川町倉見地区に誘致する構想がまとまった際に、相模川の対岸の平塚市大神地区へ橋をかけて両地区が一带となって開発を進める構想も進められることとなった。これが「ツインシティ構想」である。2000年にはツインシティ基本計画が、2002年にはツインシティ整備計画が神奈川県および神奈川県東海道新幹線新駅設置促進期成同盟会によりまとめられ、新たな都市づくり構想が進められている<sup>5</sup>。この計画は端的には、新線の開通を見越したマクロな経済発展を同地の開発に取り入れる動きと考えることができる。しかしながら現状、新幹線の新駅を誘致することは事実上不可能であり、将来のリニアモーター計画の際の駅として調整に入っていると言われているが、決定はされていない。ただし国道129号線の開発に伴い、新幹線との関連性の薄いまま、本構想は「土地区画整理事業により、計画的かつ効果的な土地利用を図り、新たな産業や都市機能の集積を計画するとともに、良好な市街地および周辺の環境と調和した環境共生都市の形成を図ることを目的とし」、【事業名】(仮称)平塚都市計画事業ツインシティ大神地区土地区画整理事業とし、【施行者名】を(仮称)平塚市ツインシティ大神地区土地区画整理組合とし関連する地元の地権者によって、その調整が開始されている<sup>6</sup>。

現地においては同構想への賛同を求める看板と逆に反対を示すのぼりもたち、賛成者と反対者それぞれが活動していた。同構想を千年村の持続的性格、キャラクターを残すことから検討すると、どのような評価がなされるか私見ではあるが検討してみたい。



※本図は平成 25 年 4 月時点で作成したものです。今後、地元との調整、企業ニーズ、関係機関協議等の検討を踏まえ、変更が生じますのでご注意ください。

「土地利用計画図」(大神地区のみ掲載)

出典 <http://twin-ookami.jimdo.com/事業の概要/>

### 4. ツインシティ計画についての千年村からの評価

まず、環境条件から考えられる土地利用であるが、田地を収益性を主眼とする非居住地と考えた場合、機能上はその性格をくつがえすものではない。しかしながら物理的環境特性とその生産物は大きく変更されるため、それについての専門的なアセスメントが不可欠であろう。

次に、交通・産業面から検討した場合、新幹線の新駅誘致は白紙状態であり、寒川地区と大神地区とのツインシティ構想自体の意図がおおきく弱まっているものの、国道129号線の開発を主目的とした場合、同地域の地権者の一部が賛成に回ることも理解される。しかしながら継続的な共同体の重なりと共存が同地域のキャラクターならびに集落構造であり、その居住地域が用途地域におおきく影響していることを考えると、ツインシティ構想の計画はそれらの共同体由来の持続と集落構造と齟齬していることは否めない。特に従来への微高地とのすぐ境から国道129号戦

<sup>5</sup> [https://ja.wikipedia.org/wiki/ツインシティ\\_\(平塚市・寒川町\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/ツインシティ_(平塚市・寒川町))

<sup>6</sup> <http://twin-ookami.jimdo.com>

までにおおきく区画された新しい「複合地」が、商業施設として検討された。すでに立地企業予定者にイオンモール株式会社が名乗りを上げている。すでにパースも上がっているが、「未来の架け橋となる「環境共生型」「公共交通指向型」「地域生活圏形成型」のまちづくり、緑に包まれた空間に、新しいライフスタイルと体感(エクスペリエンス)と発見のあるまち、『人』と『緑』と『未来』をつなぐおおかみの杜(説明パンフより)は、その立地上、これまでの居住地域に代わって、大神地域の中心的機能を占めるようになると考えられる。これによる周囲の共同体の従来の住み分け方と集落構造に与える影響は想定を超える。ようは地域の中心が生活～集落構造域から元田地～大規模消費型モール産業域に変更される可能性が大きく、千年村持続としてのキャラクターの消滅が危ぶまれる。

大神地区のツインシティ受入後の変化を千年村のキャラクターを保持しつつ、予測可能なものにするために、以下提案したい。

- ・ 国道沿い向けの大型規模の計画に偏重している点をあらため、従来の集落構造との規模上の調和をはかる。
- ・ 従来の第一種住居専用地域における生活様式の変更へのインパクトを軽減すること。特に現在最も実現性の高い「複合地域」には低層の住居地域を計画すべきである。仮に密度の異なる高層集合住宅の開発などがなされた場合は地域の共同体の性格とは全く別の核を生じることとなる。これをもって大神地区の従来の千年村的キャラクターは相当な変化を余儀なくされよう。
- ・ 従来の住居街区から国道西側への田地へのアプローチを確保すること。
- ・ 同地域の環境特性を維持してきた用水路等の水利については既存を重視した保全計画を検討するべきである。

●施設イメージ図



「複合地域」の開発イメージ図

出典: <http://u.jimdo.com/www59/o/s0df6f34a7125da55/download/>

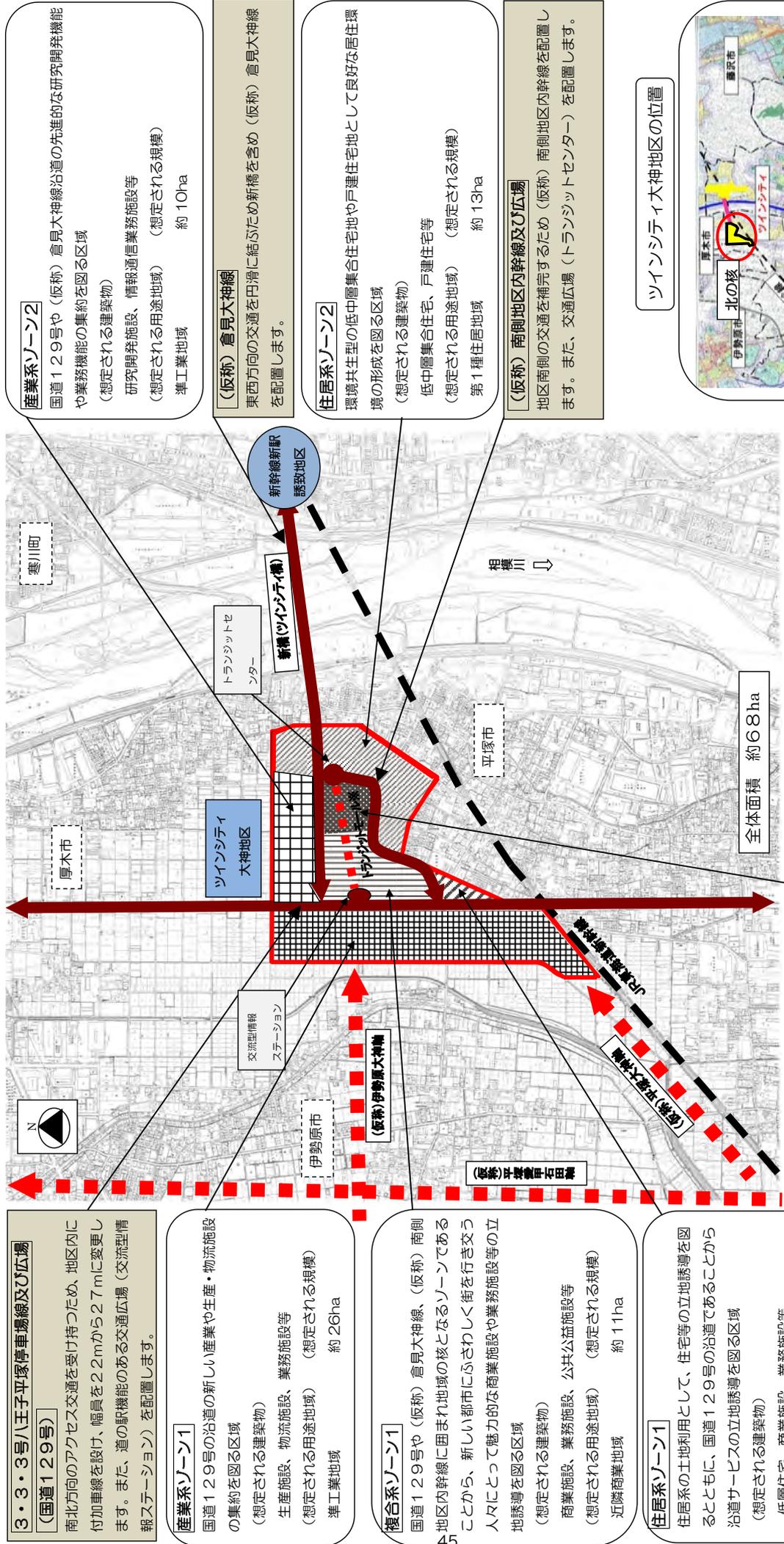


賛成派の説明図と、反対派の理由書(大神地区にて採集)

(5) まちづくりのイメージ

以上の考え方をもとにまちづくりのイメージをまとめたものがツインシティ大神地区まちづくり計画図となります。

ツインシティ大神地区まちづくり計画図



**産業系ゾーン1**  
 (国道129号)  
 南北方向のアクセス交通を受け持つため、地区内に付加車線を設け、幅員を2.2mから2.7mに変更します。また、道の駅機能のある交通広場(交流型情報ステーション)を配置します。

**産業系ゾーン1**  
 国道129号の沿道の新しい産業や生産・物流施設の集約を図る区域  
 (想定される建築物)  
 生産施設、物流施設、業務施設等  
 (想定される用途地域) (想定される規模)  
 準工業地域 約26ha

**住居系ゾーン1**  
 国道129号(仮称)倉見大神線、(仮称)南側地区内幹線に囲まれ地域の核となるゾーンであることから、新しい都市にふさわしく街を行き交う人々にとって魅力的な商業施設や業務施設等の立地誘導を図る区域  
 (想定される建築物)  
 商業施設、業務施設、公共施設等  
 (想定される用途地域) (想定される規模)  
 近隣商業地域 約11ha

**住居系ゾーン1**  
 住居系の土地利用として、住宅等の立地誘導を図るとともに、国道129号の沿道であることから沿道サービスの立地誘導を図る区域  
 (想定される建築物)  
 低層住宅、商業施設、業務施設等  
 (想定される用途地域) (想定される規模)  
 第1種住居地域 約2ha

**産業系ゾーン2**  
 国道129号(仮称)倉見大神線沿道の先進的な研究開発機能や業務機能の集約を図る区域  
 (想定される建築物)  
 研究開発施設、情報通信業務施設等  
 (想定される用途地域) (想定される規模)  
 準工業地域 約10ha

**(仮称)倉見大神線**  
 東西方向の交通を円滑に結びため新橋を含め(仮称)倉見大神線を配置します。

**住居系ゾーン2**  
 環境共生型の低層集合住宅地や戸建住宅地として良好な居住環境の形成を図る区域  
 (想定される建築物)  
 低層集合住宅、戸建住宅等  
 (想定される用途地域) (想定される規模)  
 第1種住居地域 約13ha

**(仮称)南側地区内幹線及び広場**  
 地区南側の交通を補完するため(仮称)南側地区内幹線を配置します。また、交通広場(トランジットセンター)を配置します。

全体面積 約68ha

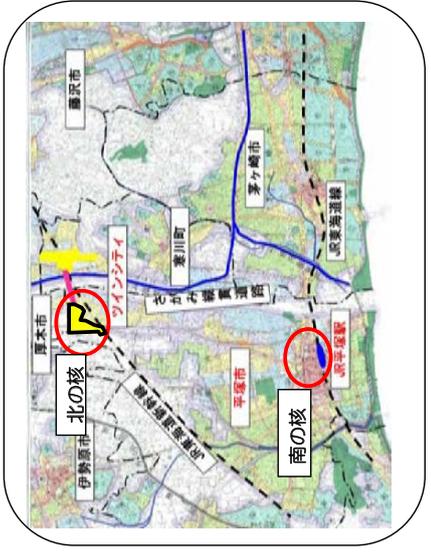
**凡例**

|  |         |
|--|---------|
|  | 住居系ゾーン1 |
|  | 住居系ゾーン2 |
|  | 産業系ゾーン1 |
|  | 産業系ゾーン2 |
|  | 複合系ゾーン1 |
|  | 複合系ゾーン2 |

**複合系ゾーン2**  
 国道129号(仮称)倉見大神線、(仮称)南側地区内幹線に囲まれ地域の核となるゾーンであることから、新しい都市にふさわしく街を行き交う人々にとって魅力的な商業施設や業務施設等の立地誘導を図るとともに、利便性を活かした中高層集合住宅の立地誘導を図る区域  
 (想定される建築物)  
 商業施設、業務施設、公共施設、中高層集合住宅等  
 (想定される用途地域) (想定される規模)  
 第2種住居地域 約6ha

**※トランジットモールとは**  
 国道129号の広場と(仮称)南側地区内幹線の広場とを結び地域の交流を盛んにするシンボルとなる道路

ツインシティ大神地区の位置



参考

環境共生モデル都市ツインシティの整備(神奈川県ホームページ)

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f6601/p19758.html>

環境と共生するまちづくり ツインシティ大神地区土地区画整理組合設立準備会

<http://twin-ookami.jimdo.com>

そのほか意見

ツインシティ開発 「号外チラシ」に思う

<http://eguchitomokoblog.com/?eid=1000>

平塚市ツインシティ大神地区区画整理事業の公聴会①

[http://scn-net.easymyweb.jp/member/kaneko/default.asp?c\\_id=191351](http://scn-net.easymyweb.jp/member/kaneko/default.asp?c_id=191351)

ツインシティ・平塚市大神地区のまちづくりに対する県の取組について

[http://www.kanagawa-komei.com/honkaigi/13/1206/1206\\_5.html](http://www.kanagawa-komei.com/honkaigi/13/1206/1206_5.html)

「ツインシティ大神地区まちづくりシンポジウム」参加者からの質問に対する回答

<http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/machi-j/pcpage00010.htm>

## 1. 立地類型と開発類型

この地域の、抄郷比定地の分布密度が高いのは、大河川の支流の多さや古代駅路の存在によるところが大きいのではないかと考えられる。また、土壌・農産の面からみると、大面積の低地土／水稲栽培を維持している地域に抄郷の集中がみられる(図1)。その地域は、縄文海進期に海岸線だったところで、海退後の堆積によって生じた広大な低湿地が後の水稲栽培の物質的基盤を提供したと考えられる。一方、大山山麓では黒ボク土を利用した蔬菜栽培が、臨海部では森林土での果樹・林産、谷筋の低地土で小規模な水稲栽培が行われている。

地形立地は、上流部(主に山地、丘陵地、台地)、低湿地帯(主に扇状地・谷底平野、三角州・低地)、臨海部(主に丘陵地、三角州・低地)に分類できる。また開発パターンは、①段丘の開発:造成をとまなうミニ開発、②谷底平野・氾濫平野の開発:盛土地・埋立地の出現、工業団地の建設、大規模な宅造等、③砂州・砂堆・砂丘の開発:別荘地、保養地等に分類できる(図2)。本考察では①②の性格をもつ伊勢原市串橋・白根・鈴川(A-01)と、③の例として大磯町国府本郷・国府新宿(A-05)をとりあげた。

## 2. 手段としての工業化:A-01

二級河川鈴川右岸の串橋(大字)と左岸の白根・鈴川(いずれも大字)を比定地とする双子のような地区であるが、串橋の谷底平野では農地が維持されているのに対して、鈴川では谷底平野に工業団地が建設された(図3)。串橋・鈴川の谷底平野はともに礫質グライ土が広く分布し、土壌の性質に大差はないことから、鈴川のみ工業化された理由を知りたいと考えた。そこで迅速測図をみたところ、串橋では乾田が多く、鈴川には湿田が多かったことがわかり(図4)、相対的に生産性が劣る湿田の有効活用の方策として工業団地が選択された(工業化ポテンシャルは生産性の低い農地で高まる)可能性が示唆された。こうした大規模開発では、安全性向上のための造成や基礎工事が可能だが、住宅の建設は、地形・地質・土壌条件をより慎重に選ぶ(場合によっては生産性の高い農地も転用する)。意識的にこのよ

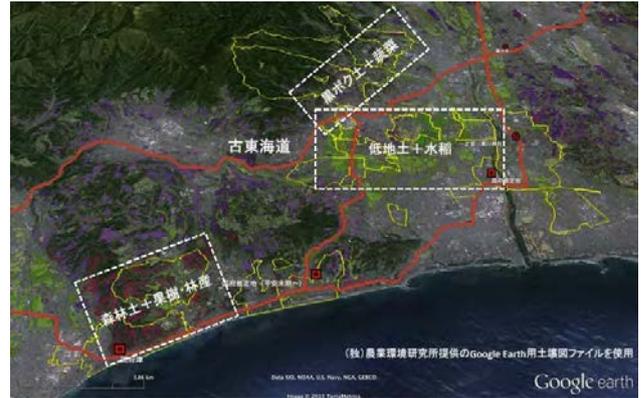


図1 土壌・農産と抄郷比定地の大字

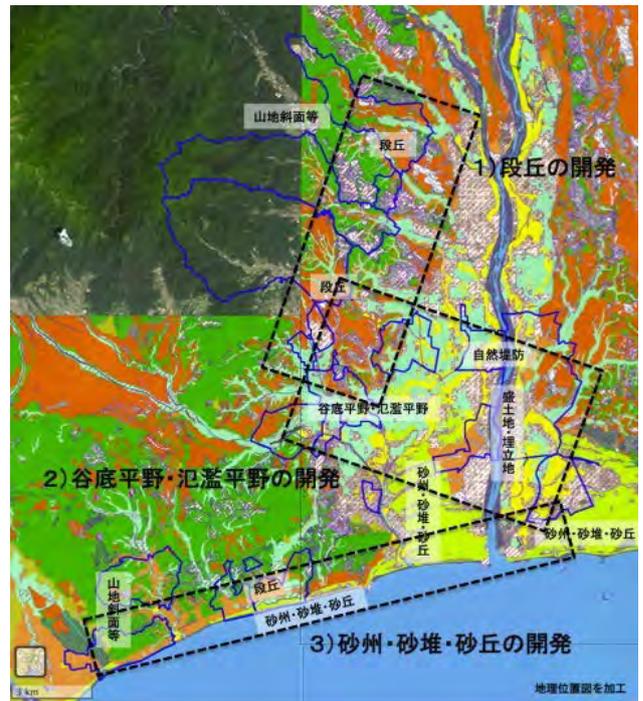


図2 土地条件と開発パターン

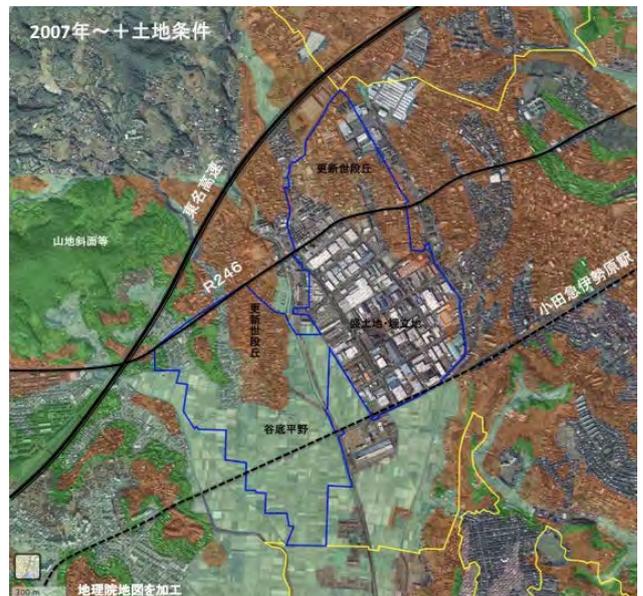


図3 串橋・白根・鈴川の土地条件と景観(2007年～)

うな農地転用が行われたかどうかは不明だが、低地の開放は一定の規範にもとづいて行われたのではないだろう。

### 3.砂丘＝インフラの経営：A-05

砂丘は津波・高潮の防災インフラとして、定住地における生命の安全と生産の安定を支えてきたと考えられる。砂丘を擁しながらも、市街地の大部分を完新世段丘に乗せ、砂丘北側の葛川低地での宅地化は選択的である(開発自体が新しく、しかも水はけの悪い土地で事業所・集住が、水はけのよい土地で住宅が建設される傾向あり)(図5, 図6)。つまり、住宅建設は低湿地を避ける傾向にあり、砂丘という堅牢なインフラがありながら、それに頼りきらない定住地の形成が認められた。砂丘の未熟土は畑作



図4 串橋・白根・鈴川の土地利用(明治期)

さえ不向きで久しく未利用だったが、戦後に大磯ロングビーチが建設された。この土地利用転換は景勝と安全に依拠し、かつ防災インフラとしての機能を損なうことのない土地利用(保養地)に砂丘を開放したもので(生産するインフラへの転換)、戦略的な地域開発といえまいか。

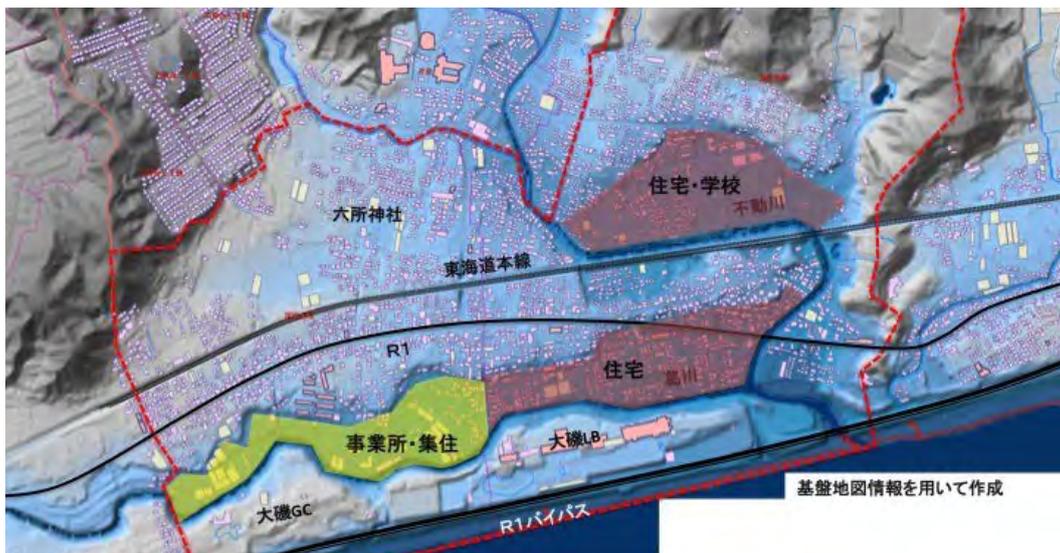


図5 国府本郷・国府新宿付近の地形と土地利用



図6 国府本郷・国府新宿付近の土壌

## 1.流域のレイアウト

相模川流域の疾走調査で私たちが回った対象村の村域を広域地形図にプロットすると、いくつかの特徴的な傾向があるように見える。ひとつは、流域における郷の配置である。それぞれの村域は、丹沢山地沿い、相模川の低地、相模湾沿い、という3つのグループに分かれている。山沿いの愛甲郡の三郷と大住郡の一部では、いくつかの郷は丹沢山地まで村域を深く広げ、山林を抱き込んだ領域を示している。大住郡、高座郡を含む相模川沿いの低地では、村域はいずれもほぼ低地に位置しているが、詳細地形を見ると、相模川の自然堤防や鈴川、渋田川などの地形のうえに、微高地と低地をまたぐように位置していることがわかる。海岸沿いの余綾郡の郷では、村域は北側の丘陵地と海岸沿いとにまたがっている。これらの郷がすべて、一様な地形ではなく高低差を含む地形を内包していることは示唆的である。すでに利根川流域の疾走調査の際に指摘したが、土地利用のメニューの多様性が、持続力に関わっているようだ。今回、顕著なのは村域に内包される地形の多様さ、特に山地／丘陵、穏やかな傾斜地、低湿地という地形の基本的な要素が揃っていること。低地の集落でも、微高地がある。

## 2.高座郡寒川郷岡田地区

寒川郷は広い村域を持っており、その輪郭はそのまま現代の寒川町の境界に受け継がれている。域内には小河川や低地、微高地が入り組み、迅速図からはいくつもの集落が点在していたことが読み取れる。その中に、標高差20メートル程度の台地があり、台地の裾に旧岡田村という地区が集落をなしている。台地の下を流れる小出川沿いの低地は圃場整備されたグリッド状の水田で、部分的に宅地化しているが、大きくは水田として使われている。台地の裾から上部にかけては主に一戸建て住宅地として宅地化され、旧村はそこに埋没していて、岡田村の輪郭を現代の航空写真や地図から読み取ることは難しい。

しかし、実際に旧集落のあたりに身をおいてみると、住宅の敷地の大きさや道路の幅、建物の新しさ、



ALOS全球数値地表モデル (DSM)+川だけ地形地図+Kashmir3D



地形の段差や植栽などから、概ねの集落の伝統的な領域を感じることができ、境界を感じる道路を歩いたのちに軌跡ログを地図にプロットすると、旧集落の形を描いていた。

旧集落の周囲では、宅地化のために既存の斜面がコンクリート擁壁によってひな壇に造成され、多くの宅盤に最近の戸建て住宅が建てられているが、歩きまわってみると段々の宅地のなかに小さな墓地や畑が点在し、新築住宅と旧集落の土地利用がモザイク状に入り混じっていた。迅速図や戦後のGHQによる空撮などを見ると、畑として利用されていた台地上部、斜面林と裾の集落、低地の水田が、それぞれ時間差を伴って、宅地化や道路化されていることがわかる。現代の写真だけを見ると典型的な郊外のスプロールだが、集落は土地を細かく造成、切り分けることによって、結果的に旧村の輪郭を保持してきたようにも見える。

### 3.最適化のスケール

#### ・村の配置のスケール

流域規模の地域において、それぞれの村が自律的に集落を形成・維持する土地の形状には限りがある。山地／丘陵と低地にまたがった領域が確保できる場所に千年村は立地する。その地域での村の配置はおそらく千年単位の時間によってレイアウトが最適化されてきた。

#### ・村域の地形と土地利用のスケール

高地と低地を含む千年村の地形は、村のスケールでの水系をなしている。域内で循環する地形・水系の持続的な利用のために、山林や農地、集落のレイアウトがなされている。この空間単位は数百年単位の時間で最適化されてきた。

#### ・屋敷の敷地単位のスケール

ある程度の規模の屋敷はその敷地に山林・段丘・低地に相当する地形／土地利用を含んでいる。敷地内に新建材の住宅が増築されたり、納屋や土蔵がガレージや物置に改造されたり、庭に菜園や花壇が設けられるなど、屋敷のスケールでの施設の更新や再利用がよく行われている。そうした、居住施設の新陳代謝を許容する一定の規模が、屋敷の敷地に



は必要であるように見える。

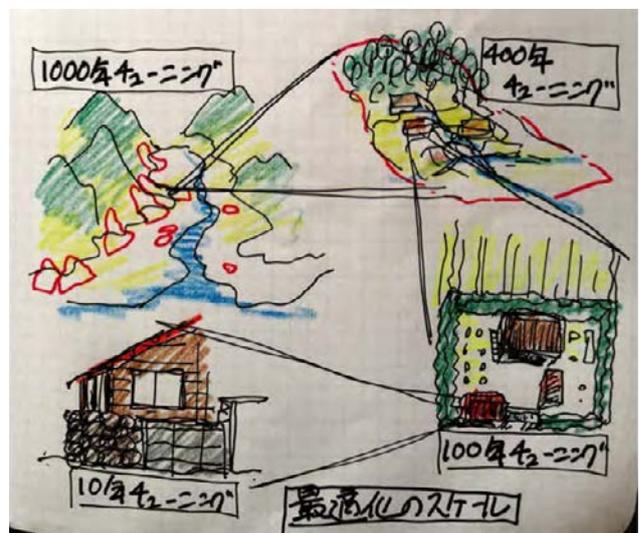
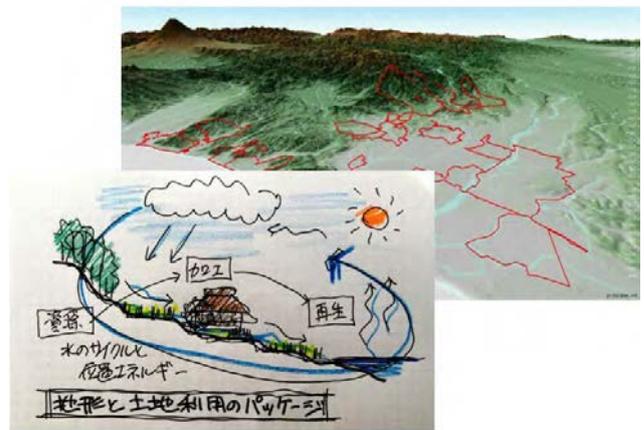
#### 4.複雑な土地利用を促す複雑な地形のパッケージ

これまでの千年村スタディを通じても観察されてきたことであるが、村の長期にわたる存続を可能にしてきた条件のひとつは、地形の複雑さと、それに呼応する土地利用の多様さである。房総半島のスタディ以来、私たちはこれを土地利用の「セット」と呼んでいる。今回、あらためて確認したのは、「セット」の成立を促す地形のありようが、流域スケール、集落スケール、屋敷スケールと、階層的にそれぞれのスケールごとに、多様性が内包されている、いわば「地形のパッケージ」を見出すことができるということだ。

あらためて千年村が「なぜ」私たちに必要なのかを考えたとき、千年村がどう有効であるか、現在の千年村の状態が、私たちにとってどのように「使えるか」という観点も、そもそもの意義として重要であるだろう。私たちは千年村について、

- 1.「千年長持ちした住みかたを、指標として今後も温存したい(長生きの秘訣を記録しておきたい)」
- 2.「私たちが前提としている都市環境が停止するような事態の際に、予備資源として助けてほしい」と考えている。1はいわば「長く住み続けるための土地利用マニュアル」であり、2は災害時などにバックアップしてくれるシステムとしての期待である。後者については、現代のインフラがダウンした際にどう村の生活を「稼働」し続けることができるか、さらに政策や経済も含めた「環境」の変化に対する強靭さがどれほどあるか、という観点から評価することができ、そこから1のマニュアルを作ることができるだろう。

と述べた。これに加えて今回の気づきは、「千年サバイバルマニュアル」の作成にむけて、流域のスケール、村域の地形スケール、屋敷地のスケール、それぞれについて階層的に固有の観察が必要であること、一方でそれぞれのスケールからの固有の知見を得ることができることも示唆していると思う。



# 「集落構造」の考察 -見た目でわかる千年村-

東京都市大学工学部建築学科建築計画 福島加津也

## 1.概要

調査は2015年5月30日、31日の2日間にわたって行なわれた。調査の目的は、急峻な丹沢山地と巨大な関東平野の境界にある集落と、関東平野の中にあつて市街地化が進んでいる集落の持続性の有無とその要因の把握であつた。2日間で11の集落を調査する日程で、福島は後者の山地と平野の境界ルートを疾走した。

## 2.疾走調査における集落構造の分析方法

2012年の千葉疾走調査では、集落、生産地、地形の構造が周辺環境を反映して明快な事例が多く、特に2種類の生産地を持つことに注目した。

2014年の利根川流域疾走調査では、調査地の北関東が近世まで交通の要衝だったため、千年村候補地が街道や宿場町などのかつての交通インフラに近接していることを発見した。

今回の調査では、千葉ほど明快な集落構造が見つからなかったにもかかわらず、ここが千年村でありそうだと、という雰囲気をも多くの集落で感じたことが面白かつた。この「雰囲気」は集落構造ではなく、いくつかの「見た目」の組み合わせから生み出されているのではないだろうか？ここでは、全体を通して各集落に共通する「見た目」の候補を抽出し、疾走調査であることを生かしてあえて印象論のまま提出したい。

## 3.「見た目」候補

### ・土地の高さ

土地の高さによる垂直方向の用途区分が明快であり、遠景で写真を撮ると水平方向に同じ用な建築や土地利用が連続していることが良くわかる。

### ・水平の境界

水平方向の領域を区分する道祖神や植栽などが多く見られた。そのもの自体は日本中で見ることができが、千年村の特徴としては、道祖神が区分するものがなくなった後でも移動、集合、再配置されていたり、植栽が異常に巨大化したり精緻につくられていることである。

### ・みんなが集まる場所

神楽殿や農村歌舞伎は、かつて集落の娯楽として日

本中に見られた。千年村では、現代でも現役で使われている事例が多く、みんなが集まることができる場所は、集落の持続にとって大切な要素の一つであると思われる。

## 4.考察

千年という時間単位は、集落の変化を検証することがたいへん難しい。このような印象論による考察も、集落の持続性に関する可能性の拡張と考えていただければ幸いである。



## 土地の高さ



水平の境界



みんなが集まる場所



千年村プロジェクトでは当初から、千年村としてわれわれが目にする「継続的な土地固有のシステム」が、環境・集落・共同体の三要素からなる、との作業仮説を掲げている。この三要素のうち、環境と集落については、相応の知見を蓄積しつつある、と評価できよう。しかし共同体については、環境と集落のそれに比して、蓄積はほぼ皆無に近い、と言わざるをえない(これまでの疾走調査報告書の各「共同体」項を参照せよ)。極言すれば、環境と集落を調べるのに精一杯で、共同体については、正直なところ後回しにされているが、やむをえないところもある。基本的に外部観察者である現行の運動体メンバーがまず対面するのは、きわめて具体的な環境や集落の様相なのであって、むきだしの共同体といきなり出くわすわけではないからだ。とはいえこれは視点の問題であって、たとえばある一定の時間幅で持続されてきたであろうその景観を、そもそも持続可能にした人的資源を再生産する仕組みはいかなるものか? との問いを立てれば、自ずとその地の共同体へと関心が向かうはずなのだ。

ところで「環境」について調べるとして、いきなり検索窓に「(調査する地名) 環境」と打ち込んでググったところで、期待できるサイトにたどりつけないし、まずは土地条件図など、既存の信頼に足る基本情報を参照するだろう。では「共同体」を調べるとして、土地条件図のような参照すべき基本情報をどこで入手できるかといえば、まずはその地の自治体史編纂の過程で、公立博物館や大学研究室による調査で、あるいは地元の人々による自発的な取り組みによって、それ相応の水準で重ねられてきた調査記録、といえよう。それら先行調査と、千年村プロジェクトの興味関心を繋ぎ合わせることでさえできれば、「疾走」しつつも「共同体」を視ることが(少なくともこれ

までと比べて)きわめて容易になると思われる。

たとえば今回の調査地に所在する平塚市博物館などは、きわめて貴重な調査報告を膨大に蓄積している地域博物館である。その公式サイト上に公開されているコンテンツに限定しても、相当に知見を拡げることが期待できる。以下、瞥見してみたい。

ひとつめは、旧須賀村(現・平塚市札幌町、同千石河岸など)【B-07】である。疾走調査では、寺院境内墓地に並ぶ墳墓群の配置(歴代住職墓域への近接度合など)や、鎮守社境内の奉納金芳名額あるいは玉垣に刻銘された奉納者名など、この地の宗教的施設を経済的に支える人名群から、この地の共同体がうかがえた。とはいえこれだけでは、この地での死者を含む共同体が、あたかも内部で完結した孤立系のごとく誤解しかねないが、水死者という外部から流れ着いた死者への対応もなされていたことを示すのが、高浜台にある石仏「オアマダサマ」と海難供養塔群である(「海難供養塔」)。以前は相模川河口に近い松林の中にあつたのを移設し、現在でも8月16日には施餓鬼が行われているという。

ふたつめは、旧大神村(現・平塚市大神)【B-02】である。この地の鎮守である寄木神社は、今でこそ周囲を住宅や工場に取り囲まれているが、迅速測図の頃は、八王子街道を挟んで大神村の集落と向き合う。迅速測図と現在の地図を照合すると、集落内のそれぞれの道は付け替えられ整備し直されているものの、集落全体を眺めると、かつての八王子街道沿いに並んだその向きは踏襲されている。これを神社側から眺めれば、眼前を横切る八王子街道を挟み、集落の向こうに大山が聳える、ということである。寄木神社から集落へは、鳥居正面からの道はなく、少し北へ寄ったところから道が延びるが、この道沿いに新幹線高架下をくぐる(※)と般若院(真言宗)そして正安寺(

浄土宗)が立ち並ぶ。この道の方向に大山が聳える構図となっている。狭い道幅ながら、現在でも頻繁に自動車が行き交いバスも通る八王子街道と合わせると、この集落と周辺地域とのより広汎な繋がりをうかがわせる立地である。その傍証が、寄木神社の祭礼に関連する事項である。かつて寄木神社では昭和30年頃まで祭礼時に人気の役者による歌舞伎が上演され「相模の歌舞伎座」と称された賑わいだったと伝え、また神輿は大山の宮大工・手中明王太郎景元による製作(明治12年)で(「18寄木神社」)、寄木神社のほか、四之宮の前鳥神社と八坂神社、そして横内の御霊神社に残されている(「神輿の製作者」)。かつての歌舞伎からは街道を介しての、また神輿からは宮大工を介しての、この集落と周辺地域との繋がりがうかがえる。この歌舞伎・神輿ともに、この地の共同体と不可分な祭礼にちなんだ事項であることは言うまでもない。

以上のように、適切な先行調査にアクセスした上で疾走調査に取り組んだならば、共同体についての知見を拓けることが期待できる。疾走調査で「疾走」しつつ「共同体」を視るには、まずは信頼に足る既存の基本情報・先行調査との媒介に徹することが、何よりも必要と思われる。

[参照コンテンツ]

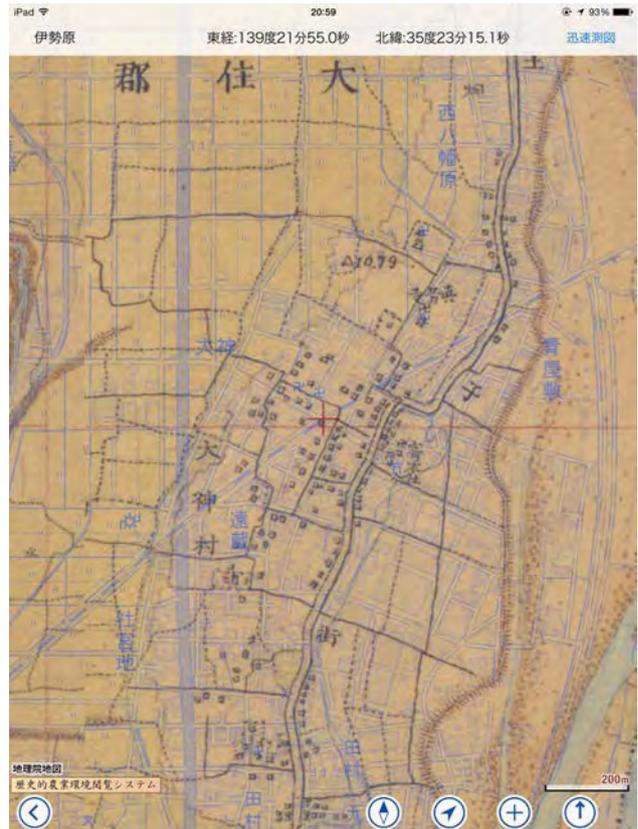
海難供養塔(平塚市博物館公式ページ内コンテンツ)

[http://www.hirahaku.jp/hakubutsukan\\_archive/minzoku/00000063/8.html](http://www.hirahaku.jp/hakubutsukan_archive/minzoku/00000063/8.html)

神輿の製作者(平塚市博物館公式ページ内コンテンツ/平塚のお祭り)

[http://www.hirahaku.jp/hakubutsukan\\_archive/minzoku/00000084/30.html](http://www.hirahaku.jp/hakubutsukan_archive/minzoku/00000084/30.html)

18寄木神社(平塚市博物館公式ページ内コンテンツ/平塚58社のお祭り)



旧大神村の集落の向きを踏襲する現・平塚市大神 (FieldAccess2による国土地理院基本図と迅速測図の重ね合わせ。図の中心は本文中の※と対応。)

千年村ウェブサイトでは現在、和名類聚抄に基づく郷名の現在地名比定とそれによる地図上への千年村候補地の空間プロットをはじめ、今後のあらたな千年村調査をたすける資料の蓄積を進めている。現地調査、特に調査対象地を絞らずにある地域に散在する多くの千年村候補地を悉皆的に見て回り、その傾向を把握し、後日の詳細調査対象地を定める「疾走調査」の際には、これら資料への参照が頻繁に行われる。また、古地図にあらわされた歴史的推移や地質など、現代の視覚的な景観のみからは容易に見出しにくい情報を、実際に現地の集落のありようを目の当たりにしながら同時に把握することは、その土地の文脈を理解する上で重要な視点をあたえてくれる。調査の際には、こうした情報を紙にまとめた資料集(野帳)を作成し持参するが、紙の資料に加え、現在スマートフォンやタブレットなどの端末から情報へのアクセスも同時に行えるようにシステムの整備を行っている。以下にその概要を述べる。

もともとがウェブサイトであるために、スマートフォンのブラウザなどから情報にアクセスすること自体は可能ではあったが、PCでの閲覧を前提としたサイト構成や画面デザインは、机の前でじっくりと情報をたどってゆくのに適してはいても現場での素早い情報へのアクセスにはあまり向かない。さらに、特に現地で参照する需要が高いと思われる様々な背景地図への千年村候補地のプロット画面も、モバイル端末での使い勝手が良いものとは言えなかった。集落を目の前にし、それをつぶさに観察する中で、ウェブサイト上の情報にアクセスすることにはしばしば大きなストレスがともなう。おもな要因としては、

- ウェブページに記載された内容を把握するためには、画面内で必要となる情報を抽出し、必要であればたどるべきリンクを見分け、その部分を選んでクリック(タップ)し、画面遷移する必要がある。こうした脳内の視覚・情報処理に伴い、小さな画面への過度の没入が必要となり、目の前の景観を理解するための認知が中断され阻害される。
- 小さな画面ではPCのように自由に画面を拡大縮小



千年村プロジェクトウェブサイト



千年村プロジェクトウェブサイト

スクロールすることが困難なため、地図閲覧のストレスが大きい。

- 各種操作に細かくともなう遅延の問題。少し操作しては少し待ち、操作可能であることを確認してまた操作する、の繰り返しは非常にストレスである。これも過度の没入を要する原因となっている。

今回、こうした現状を改善するため、ウェブブラウザによる閲覧のかわりに、主に以下の点に留意した専用のアプリを開発した。また実際に疾走調査で利用し、集落調査におけるモバイル端末活用の可能性を探った。

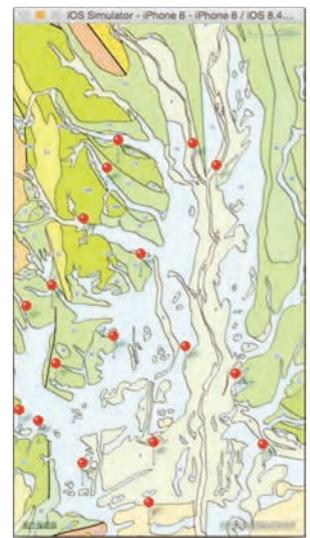
- 千年村ウェブサイトに記載された各候補地のページに記載された情報へ、スマートフォンらしい使い勝手のよい画面・ナビゲーションでのアクセスを可能にする。
- かつての集落の範囲や周辺の地質を把握するため

に、モバイル端末のGPS機能を利用し、現在地をリアルタイムで各種地図に反映する。

集落調査中の情報へのアクセスは、ある任意の場所に立ちながら「この周辺の過去を知りたい」「この場所の地質を知りたい」など「その場所の位置」を切り口として行われる機会が多いと考える。したがってアプリを立ち上げて即「その場所」から情報へアクセスが可能になるように、地図を初期画面とする。地図は千年村ウェブサイト同様、古地図、地質図、河川などの背景地図を切り替えて表示できるようにする。また、千年村候補地を地図上のピンとしてプロットし、ピンをタップするだけで集落個別の情報にアクセスできるようにする。この情報もブラウザを介したウェブページの表示では応答性や可読性がやや悪いので、ウェブサーバに対するリクエストは千年村ウェブサイト採用しているWikiのAPIを利用してデータベースから必要な情報を返すのみのものとし、端末側でモバイルに最適化した表示に変換する。また集落や任意の地点への移動経路アプリ初期画面でピンを背景地図に地質図を指を素早く検索できるよう、経路検索へのリンクも設ける。調査の現場で実際に使用してみたところ、個別の集落の情報にアクセスする機会はありません、地図画面の閲覧が主な利用となった。これは、現時点での千年村ウェブサイトに掲載されている各集落の情報が、地名比定に関する簡潔なもののみであるため、あらためて現地で参照する必要があまり生じなかったことが原因であると考えられる。現在、千年村プロジェクトでは現地調査に赴く前に各地の情報をまとめた野帳を学生が中心となって作成しているが、特に1日に調査する集落数が数多い疾走調査の場合、野帳全体のページ数も膨大なものとなり、位置的に周辺に位置する集落の情報をページを繰って探し出すことが困難な場面も多かった。この野帳の作成をWikiを利用して行えば、ウェブサイトの情報の密度もあがり、各集落個別の情報に端末から簡単にアクセスできることのメリットが生まれてくるものと考えている。

一方、現地において各種地図画面に素早くアクセス

できることのメリットは十分に確認されたと考えている。GPSを用いて現在地がピンポイントでさまざまな背景地図の上に素早く表示されるわかりやすさは特筆すべきものがあつた。また、特に古地図をタブレットなど比較的大画面の端末を用いて閲覧した場合、調査中に通りがかった集落のお年寄りの記憶の誘い水になることが幾度かあり、現場で現在地を各種背景地図上に表示する画面は、ヒアリングを行う際の補助としても有効に働く可能性が確認された。こうしたフィードバックをふまえ、今後もさらに現場での活用を通じて利便性向上を図り、ゆくゆくは一般公開することにより千年村運動の一助となることを目指して現在もアプリの開発を続けている。



アプリ初期画面でピンをタップした状態 背景地図に地質図を指定



各集落の個別の情報表示

## 第4章 付記

### 4-1. 参加者

相模川周辺疾走調査については以下の通りである。

#### ■教員・調査協力者

石川初(環境情報学/慶応義塾大学教授)

木下剛(造園学/千葉大学大学院准教授)

小林千尋(早稲田大学 中谷礼仁研究室OB)

高橋大樹(千葉大学 木下剛研究室OB)

土居浩(民俗学・文化地理学/ものづくり大学准教授)

中谷礼仁(歴史工学/早稲田大学理工学術院教授)

福島加津也(建築家/東京都市大学講師)

元永二郎(ソフトウェア技術者)

#### ■学生

##### 【石川初研究室/慶應義塾大学】

相原愛・貴洞聖彦(学部生)

##### 【木下剛研究室/千葉大学】

相原雄太・橋本慧(大学院生)

小島侑李子・金盛晋也・近藤真・豊間根海・真野彩音・永井朝樹(学部生)

##### 【中谷礼仁研究室/早稲田大学】

犬伏順一・岸本太幹・神保洋平(大学院生)

太田紀子・大森圭祐・木村真拓・鈴木明世・鈴木登子・高野泰幹・永田奏・松木直人(学部生)

##### 【福島研究室/東京都市大学】

福井啄人(大学院生)

佐竹高祐・森秀太(学部生)

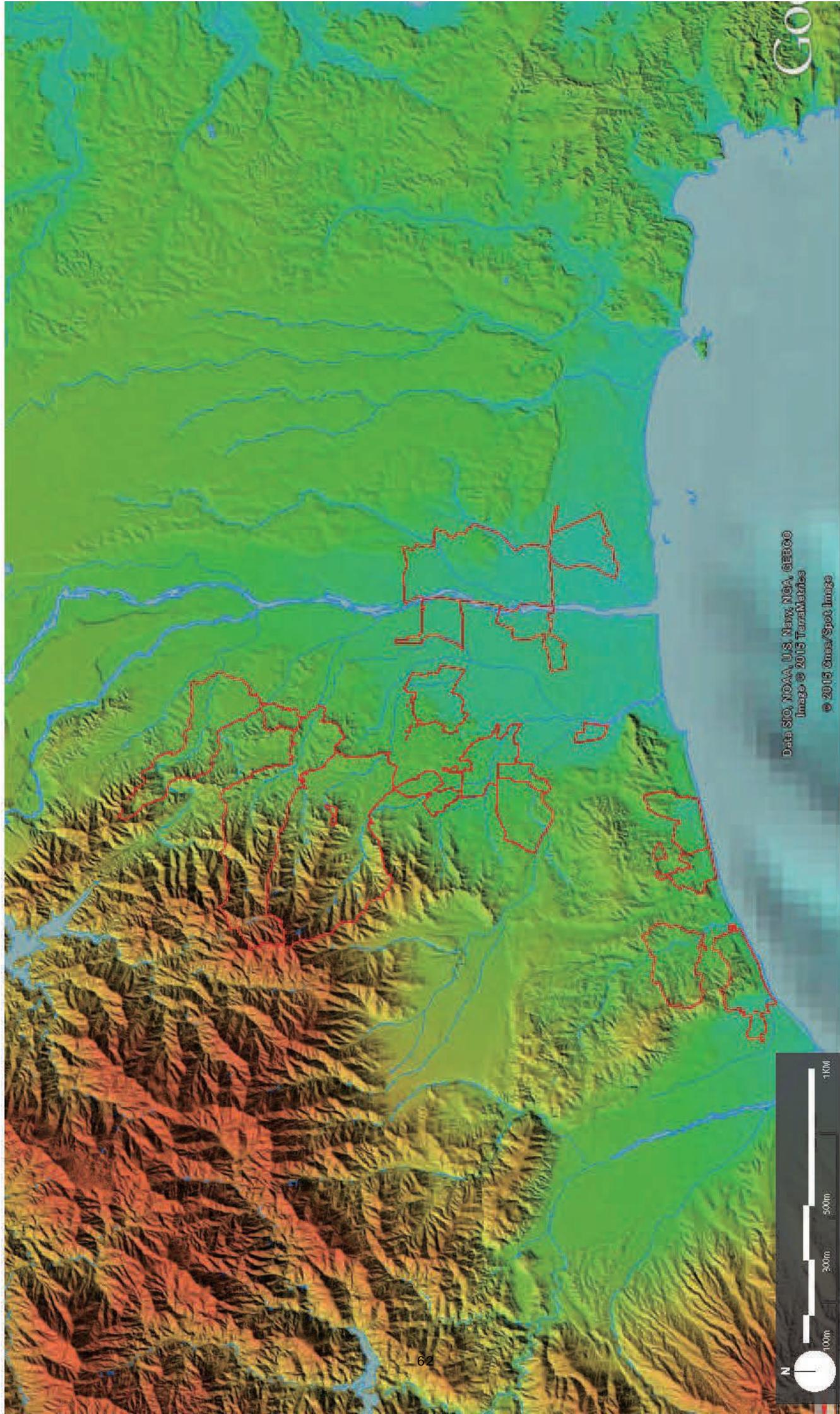
### 4-2. 巻末資料

- ・地形段彩図
- ・植生図(北部・南部)
- ・地形分類図(北部・南部)
- ・野帳の凡例

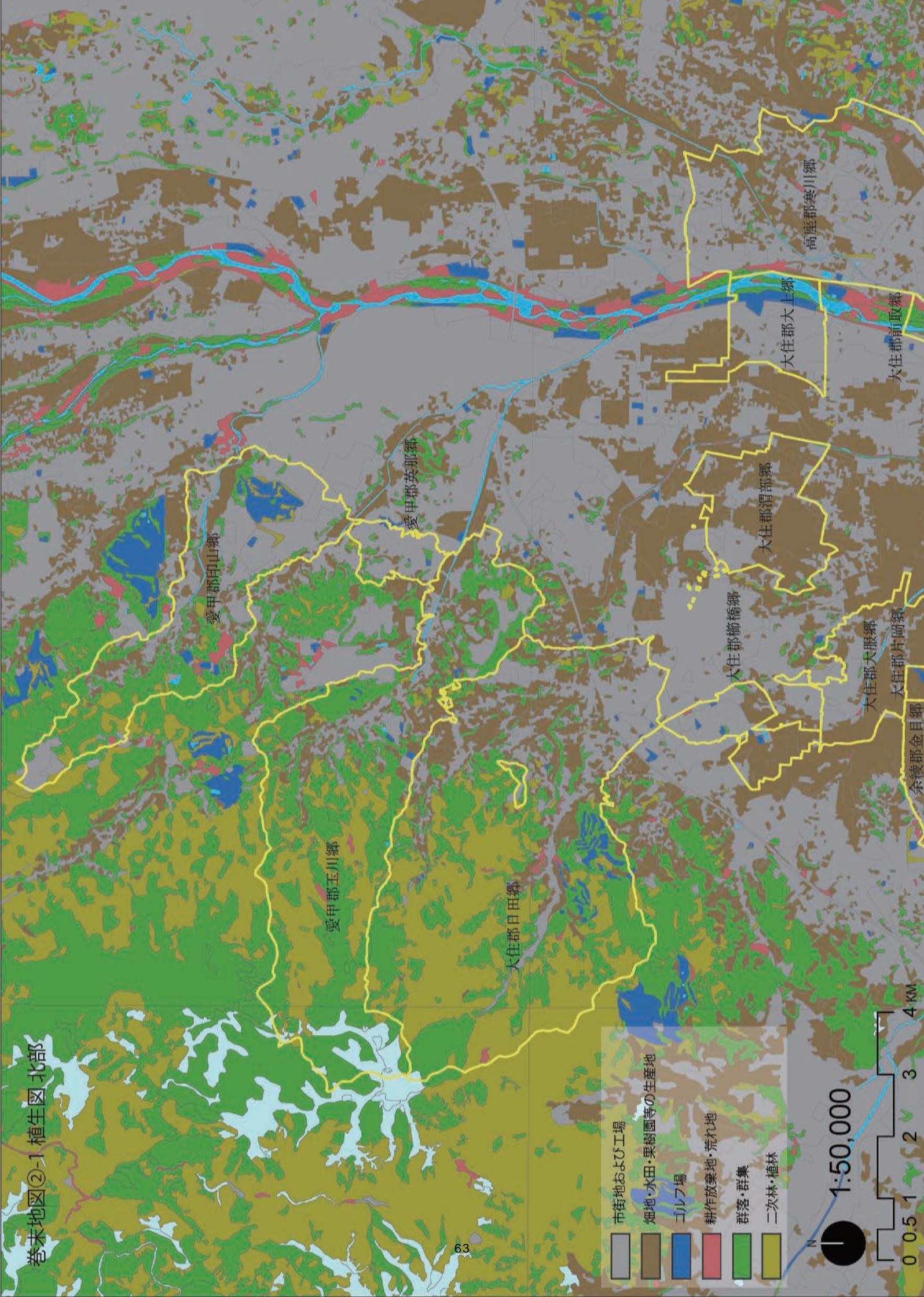
(次ページより)

### 4-2. 謝辞

相模川流域周辺を悉皆調査するにあたり、調査対象地である18ヶ所の地域にお住まいの方々には大変お世話になりました。心より感謝致します。



巻末地図②-1 植生図 北部



愛甲郡印山郷

愛甲郡英那郷

愛甲郡玉川郷

大住郡日田郷

大住郡楡橋郷

大住郡滑部郷

大住郡大上郷

高座郡寒川郷

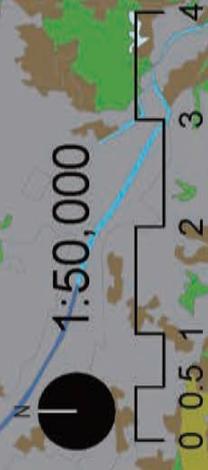
大住郡大服郷

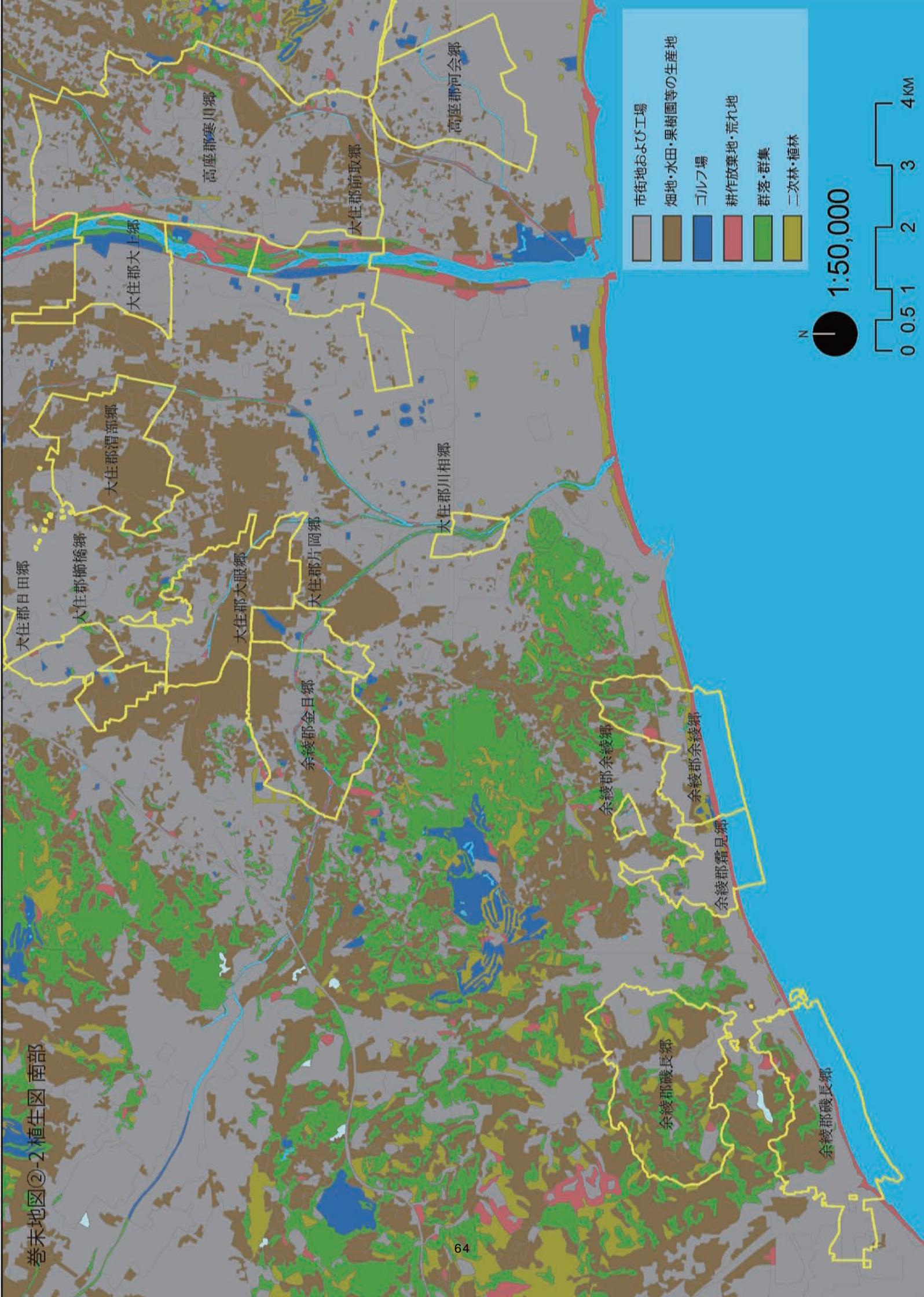
大住郡片岡郷

余綾郡金目郷

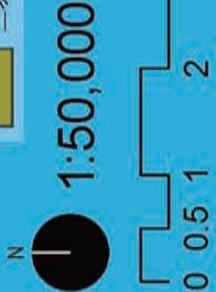
大住郡前取郷

- 市街地および工場
- 畑地・水田・果樹園等の生産地
- コルプ場
- 耕作放棄地・荒地
- 群落・群集
- 二次林・植林





- 市街地および工場
- 畑地・水田・果樹園等の生産地
- ゴルフ場
- 耕作放棄地、荒地
- 群落・群集
- 二次林・植林

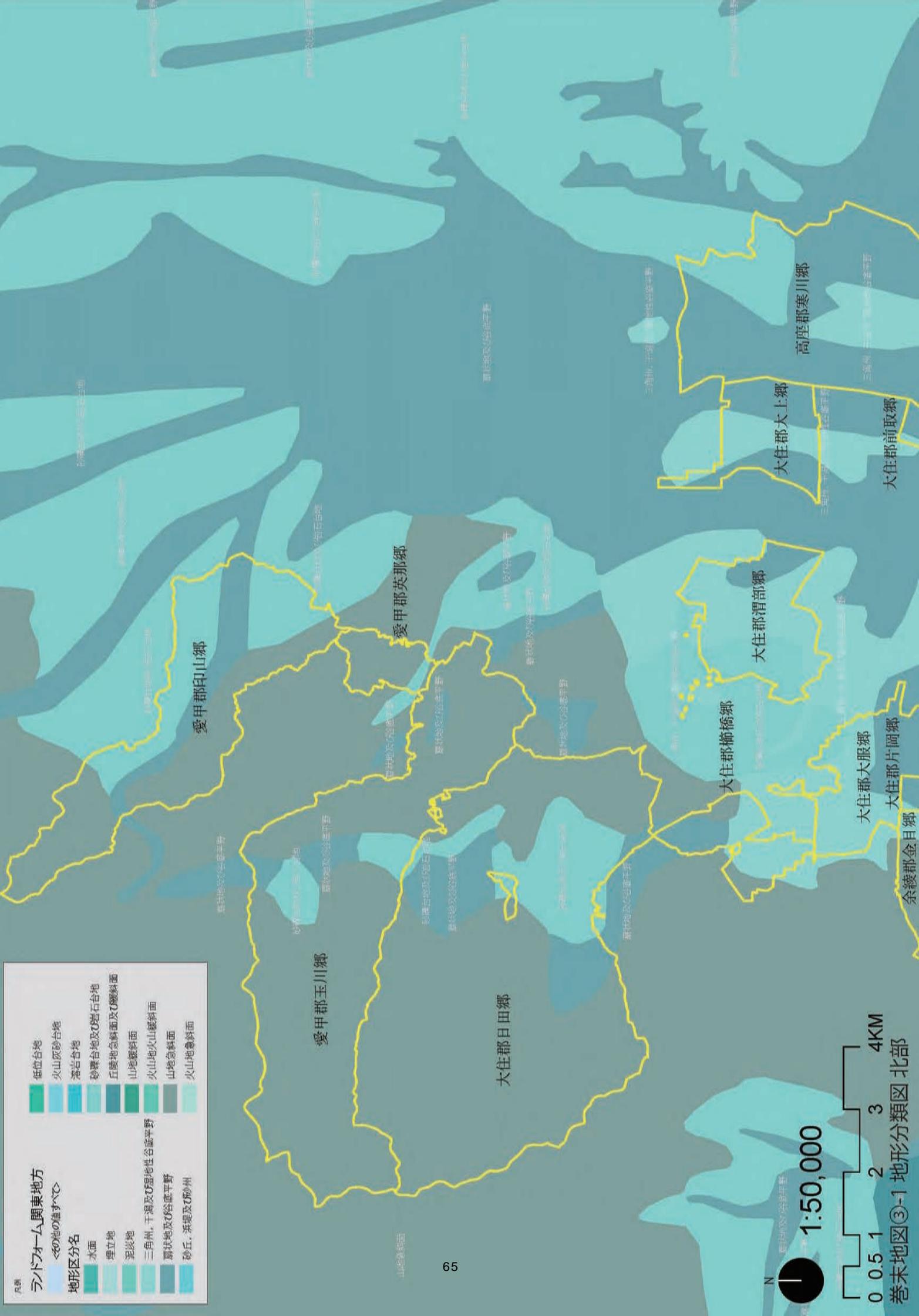


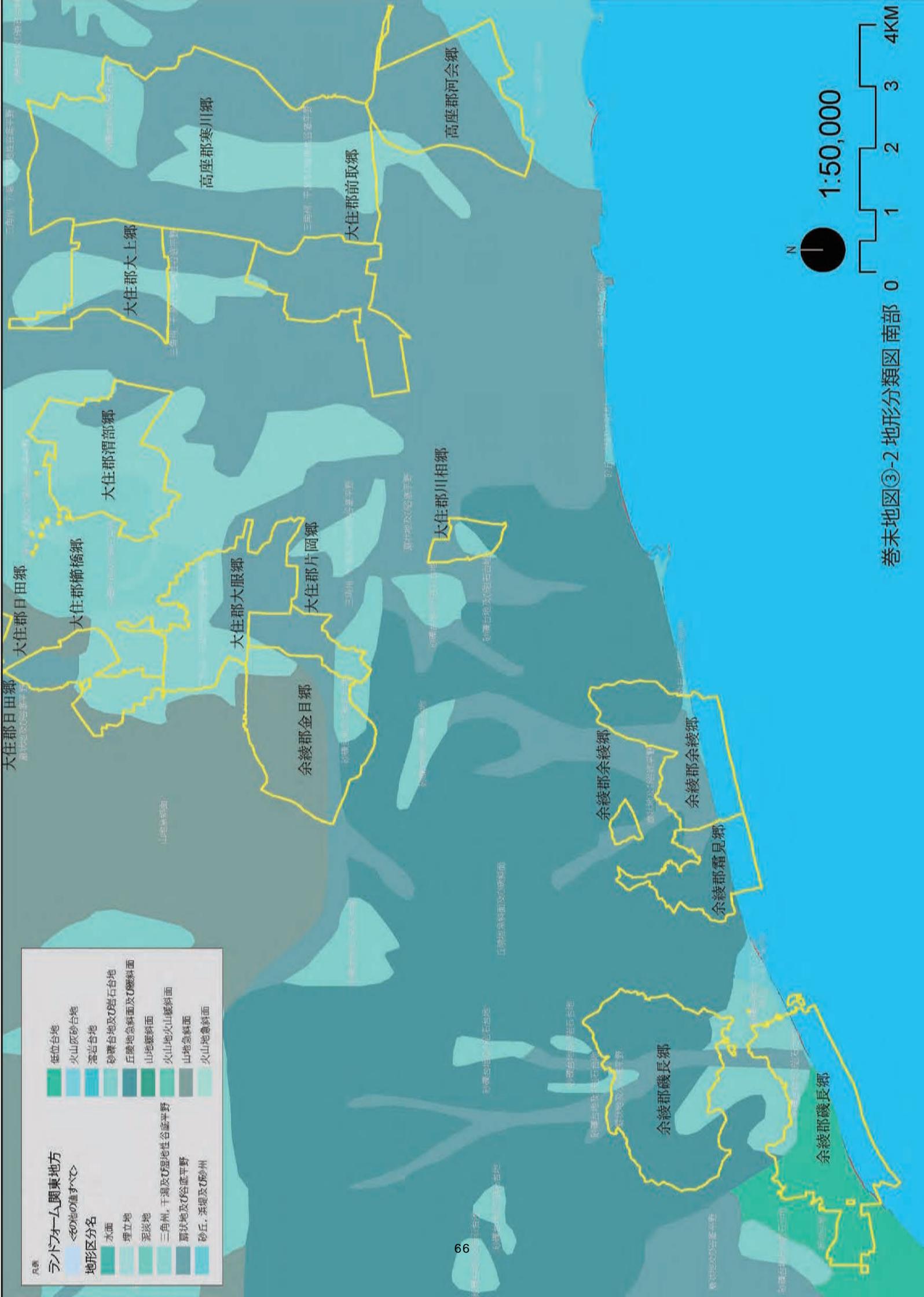
凡例

ラドフォーム関東地方  
 <その地の値すべ>

地形区分名

|                 |             |
|-----------------|-------------|
| 水面              | 低位台地        |
| 埋立地             | 火山灰砂台地      |
| 泥炭地             | 海岩台地        |
| 三角州、干潟及び湿地性谷盛平野 | 砂礫台地及び岩石台地  |
| 扇状地及び谷底平野       | 丘陵地急斜面及び礫斜面 |
| 砂丘、浜堤及び砂州       | 山地緩斜面       |
|                 | 火山地火山緩斜面    |
|                 | 山地急斜面       |
|                 | 火山地急斜面      |

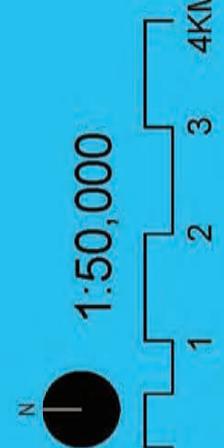




凡例

ラノドフォーム関東地方  
 <左の地の値すべ>

| 地形区分名           | 色   |
|-----------------|-----|
| 水面              | 水色  |
| 埋立地             | 淡黄色 |
| 泥炭地             | 黄褐色 |
| 三角州、干潟及び湿地性谷盛平野 | 黄緑色 |
| 扇状地及び谷底平野       | 黄緑色 |
| 砂丘、浜堤及び砂州       | 黄緑色 |
| 低位台地            | 黄緑色 |
| 火山灰砂台地          | 黄緑色 |
| 溶岩台地            | 黄緑色 |
| 砂礫台地及び岩石台地      | 黄緑色 |
| 丘陵地急斜面及び礫斜面     | 黄緑色 |
| 山地緩斜面           | 黄緑色 |
| 火山地火山緩斜面        | 黄緑色 |
| 山地急斜面           | 黄緑色 |
| 火山地急斜面          | 黄緑色 |



巻末地図③-2 地形分類図 南部

## [概要]

●英那郷について(『角川日本地名大辞典』より)  
奈良期～平安期に見える郷名。相模国愛甲郡愛甲社の一つ  
「万葉集」巻14に「足柄は安伎奈の山」と見られるが、  
英那はアキナと読んだものと思われる。

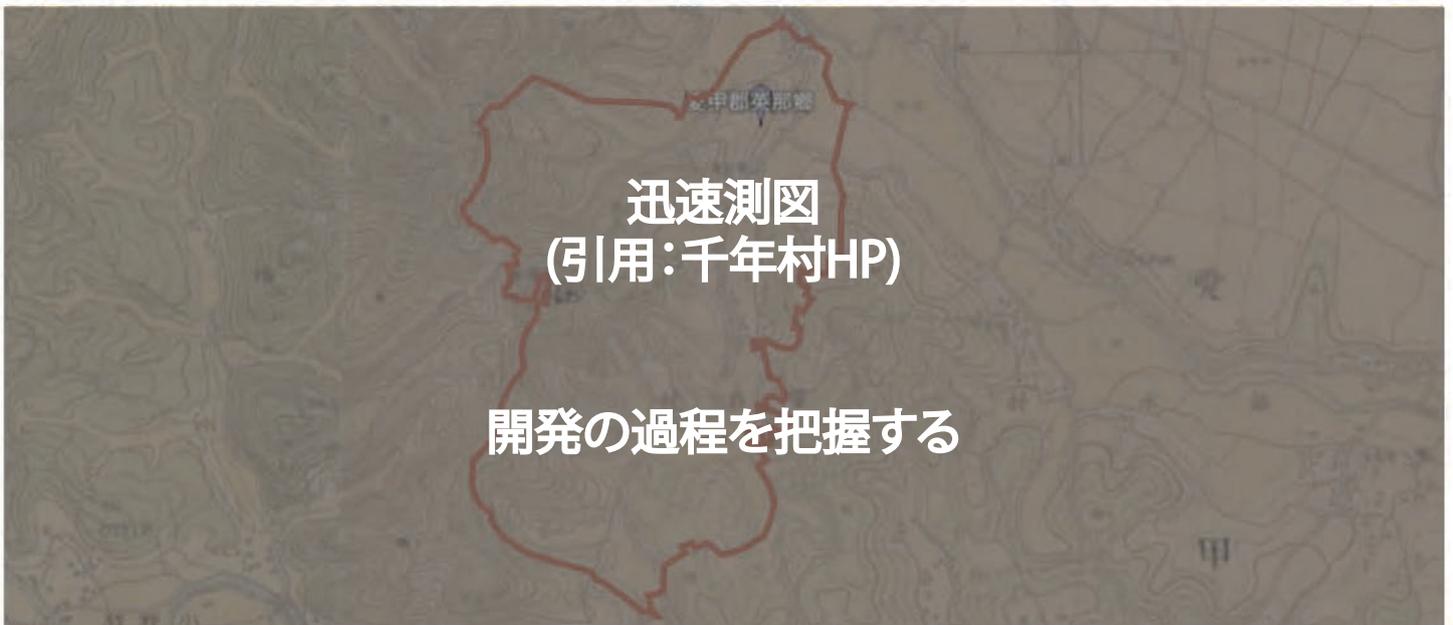
## 郷、現在の市町村の概要 (引用:角川日本地名大辞典等)

愛名(厚木市の西部に位置し、高松山丘陵上に立地する。  
愛名鳥山遺跡から縄文早期の  
竪穴式住居1ヶ所、弥生中期の竪穴式住居7ヶ所が発掘されて  
いる。(『角川日本地名大辞典』より)



### 過去の航空写真 (引用:地理院地図)

開発の過程を把握する



### 迅速測図 (引用:千年村HP)

開発の過程を把握する



### 土地条件図 (引用:地理院地図)

集落の土地条件を把握する

## [野帳作成者による見どころ]

- ・県道沿いにはいわゆるロードサイド的な開発がされ、その他の住宅も比較的新しいものが多い。
- ・東西を山林で挟まれていたが、東側には住宅地が開発され元々の林はなくなっている。西側は愛名緑地やゴルフ場が広がっている。
- ・中央の道に沿って水田と住宅が広がっていた。現在は赤梓の郷内には水田はあまり確認できないが、郷の東側にはかなり水田が残っている。また小高い場所に小さな畑地がぽつぽつとある。



[断面図]

## 対象地の断面図

調査メモ用

環境的特徴および興味

共同体的特徴および興味

## 各視点の分析

建築・集落構造的特徴および興味

その他の視点(交通等)に基づく特徴および興味

この村を一言で表すと

調査メモ用



---

2016年1月31日 発行

## 2015年度相模川流域周辺疾走調査報告書

### 著作・編集

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース  
環境造園領域 都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室

東京都市大学 工学部 建築学科 建築計画 福島加津也研究室

慶応義塾大学 環境情報学部 石川初研究室

ものづくり大学 建設学科 土居浩

元永二郎

高橋大樹

### 発行

千年村プロジェクト

関東地域調査拠点

早稲田大学理工学学術院 創造理工学部 建築学科 中谷礼仁研究室

〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1 55N-8-9

Tel.03-5286-2496

※本報告書は文部科学省科学研究費基盤研究（B）

「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」

(26289224) の研究助成により製作された。

---

